背高のっぽの恋

飯野こゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
背高のっぽの恋

【Ｎコード】
Ｎ２５１８Ｅ

【作者名】
飯野こゆみ

【あらすじ】
小さな頃から背の高かった梓。男勝りな梓が恋をしたのは？

気になるあいつは！

知らず知らずのうちに目で追ってしまう。
いつだって私は彼を捜していたんだ。

「梓、また見てたでしょ。後ろからみてたらバレバレだって。」
休み時間が終わりに近づいた時、千恵がやってきた。

「だって体育してたんだもん。折角の窓際、見ないはず無いじゃん。」

全くもう、でもあんたが女の子かもって思える貴重な時間だからね、なんて千恵は毎度のことながらあきれているようだ。

「それにしてもこんなに離れてて良く見分けがつくねぇ。近くにいたって解らないっていうのに。たいしたもんだよ。」

そう、私の好きな人は一卵性の双子だ。
確かに似ているとは思うけど彼と彼は違うから。

さっきの時間は1組と2組の合同体育。
同じ髪型に同じ身長、同じジャージを着ていたって私は彼を見間違うことなんてありえない。

ガラッと教室の扉が開いた。

「おーい佐藤いるー」
私が顔を向けると返事をするまでもなく目が合った。

「花井先生から伝言。今日は何って言ってたっけ、ん～忘れた。兎に角学校の用事があるから放課後部活出れないって。後は宜しくだとよ。」

「了解！ありがと」
私は軽く手を上げ返事をすると

「おう、じゃあ伝えたかんな」
といって自分の教室に戻っていった。

千恵はすかさず「どっち？」と聞いてきた。

「健太。」

私が名前を言うと残念！と肩に手を置いた。

健太と康太、双子なんだけど小学校の頃、私より唯一（2人だから唯二か？）背の高い男の子だった。
私は小さな頃から背が高く、後ろから2番目というのにさえなったことがなかった。
双子と言う事で同じクラスになった事がないこの2人も同じだ。
小学生の頃から他のクラスなどでは背の順が前後する事があっても私達3人だけはいつも一番後ろだったりする。それは中学に入ってからも変わらなかった。

季節のせいなのか物思いに耽っていたら、いつのまにか国語の授業が始まっていた。
彼の体育が終わってしまって今日のスペシャルタイムは終了だ。
先生には悪いと思うが、誰にも邪魔されず好きな人をみられるなんてこんな嬉しい事はない。先生は教科書を読みながら何だか言って

いたが、早く終わらないかな、とそればかり、私はもう放課後の部活に意識が飛んでいた。

中学2年のこの時期、3年生が部活を引退して私達の代になった。
私と千恵はソフトボール部、彼らは野球部に所属している。
因みに私と健太は部長だ。
放課後のグランドは込み合うのを避けるため曜日毎に割り当てが違う。
ソフトと野球はいつも同じ割り当てだ。
そして今日はグランドを使える日だった。

よっぽど遠い目をしてたんだろう、隣の席の金田大和が私を小突いてきた。

「な～にぼーっとしてんだよ。次差されっぞ。」

教科書をこんこんと指でつついて今やっている場所を教えてくれた。

「さんきゅ！」

この授業で初めて意識を教科書に向ける。
大和の言うとおり私は音読を指名され無事ことなきを得た。

そんなこんなでやっと放課後だ。
うちらの担任はやたらと話が長い。意味のない話を永遠と、まあよく話す話す。
おかげで大事な放課後が減ってしまう。
挨拶もそこそこにカバンを持つと千恵に一言。

「部室の鍵開けなくちゃだから先に行ってる。」

そういって教室を出た。
階段を下りるとそこにはあいつが。

「よう！」

私はカバンを思いっきり振り上げてあいつの背中へぶつける。
これが私の日課だったりして。
解っているこれは自分の照れ隠しだと。

「ようって、お前なぁ痛ってーよ。」

そういってあいつは私の頭をぐりぐり押すんだ。
「悪い悪い」なんて言いながら私は今日一番の幸せを感じたりしているのだけれど、そんな事は微塵も出さずに隣に並ぶ。
私達はずーっとこんな感じだった。

背も高く、どちらかと言えば男っぽい私。
実際、千恵以外とは女の子とあまりつるまなかったりする。
女の子同士で一緒にトイレになんか行ったことはないし、誘った事もない。
休み時間だって喋っているより外でドッヂボールをした方が楽しかった。
何より裏がありそうな女の子より、さっぱりした男の子と一緒にいた方がずーっと気が楽だった。
それに、こんな風に接していたら、こいつと男友達のように、いつまでも一緒にいられるってそう思っていた。

「お前さぁ女なんだから少しはどうにかなんねえのかよ。この馬鹿力。たまには女らしいとこ見せてみろよ」

一瞬私は固まった。

「康太、お前ねぇ。佐藤にそれを求めるのは酷ってもんでしょう。」

振り返ると大和だった。
こいつも野球部だったりする。
こいつは続けた。

「想像してみろよ、こいつが制服以外のスカートとか穿いてんの見たことあっかよ。俺なんか隣に住んでたってみた事ねえよ。」

うるせぇって！スカートなんて学校だけで十分だっていうの。
それより私は、こいつ、康太が私に女らしくと言われた事がショックだった。

「ふーん。康太は私が女らしい方がいいんだ。」
平静を装い康太の顔を覗きこんで様子を伺ってみる。

康太はそっぽ向いて
「そういう訳じゃねえけどよ」

とぽつり呟いた。
顔は良く解らなかった。

私は何だかその場に居ずらくなって

「部室の鍵もってるから先に行くぞ」
ってその場から逃げ出してしまった。

「佐藤、遅せえよ。後輩待ってっぞ。」
逃げ出してきた先に、殆ど同じ顔があった。
なんとも複雑な気分だ。
「毎度の事だけど、担任が話長くてさ、本当に参るよ。」
片手を挙げて通り過ぎる。
といっても3つ先の部屋だけど。
健太の言うとおり部室の前で後輩たちは待っていた。
「「先輩こんにちは」」
今年の一年は元気がいい。挨拶ってやっぱこうじゃなくちゃと思いながら
「おっす、遅れってごめんな。」
そういいながら鍵を回した。
部室に入りジャージに着替えいつもと同じようにボールやバットを持ってグランドへでる。
体育の時と同じ校庭なのに、部活と意識すると何故だか違う場所に思える。
不思議な感覚だ。
グランドの反対をみると、野球部はもうランニングが始まっていた。
先頭を走るあいつ、いつみてもカッコいい。
いつもこんなに惚けているのかといったらそうでもない。

今までは先輩がいたから、練習に集中していたし、そうでなくても、いつ飛んでくるか解らないボールを相手にしているだけに、練習はきちんと集中していた。・・・と思う。
たまに無意識に視線の先にいるのだが、無意識だけに見逃して欲しいとこだ。

「あ・ず・さ。よそ見してると顔面にボールぶつかるよ。」

千恵とキャッチボールをしていた。にやけた顔してこっちを見てる。
千恵の奴め、調子に乗ってぇ。

「してません。」
ありったけの力を入れてボールを返した。

「ギョッあんた、私になんの恨みがあって！」
別に、フンっだ。

お返しとばかりに、バッシっとグローブに千恵が放ったボールが食い込んだ。
ちょっと痛かった。

「あんた達何やってんの。今日は先生いないんだから、あんた達がふざけてちゃしょうがないでしょ！」
仲間のカンナに怒られた。

「「ごめん」」
2人同時に謝った。

私は部長なんて肩書きがあるけど、しっかり者のカンナには頭が上がらなかった。

キャッチボールを終え、トス、フリーとバッティング練習をした。
いつもだったらこの後は顧問にノックしてもらって、ベースランニングをして部活を終えるのだけど今日はその顧問がいなかった。

「次どうしよっか？」
2年で集まって話をしていたら、

「佐藤～ちょっとこっち来い！」

野球部の香田先生だった。
先生そんな拡張器で呼ばなくても。まるで怒られに行くようだよ。

「今行きま～す。」
すぐさま返事をした。
これ運動部の基本ね。

相変わらずでかい声だこと。

千恵の呟きが耳に入った。大きなお世話だよ。

野球部は丁度休憩に入ったところだったようだ。

「佐藤来ました。なんでしょう？」

先生は健太と話をしていた。
「悪いな、こっちに来てもらって、花井先生には了承済みなんだが、お前ら良かったら久し振りにやるか？」

バットを振る真似をしながら聞いてきた。
そんなこと言ったって断るはずないって解ってるしょうに。

「私はもちろん！でも一応、皆にも聞いてきます。３連敗は何でしたっけ？確かアイスだったような。」
ニヤリと返してみた。

すると今度は健太が口を挿んだ。
「お前なぁそれは、先輩達だろ！俺達の代は俺達で勝負しようぜ。なあ康太もそう思うだろ。」

康太は笑って俺はどっちでもいいよと言った。
どうせ今度は勝つのだからと。

「おいおい、おごるのは俺なんだから、ノーカウントにして欲しいとだが、康太がそこまでいうんだから大丈夫だろ。お前達頼んだぞ。」

実際のところ誰も先生におごってもらおうなんて考えてないけど、まあそれは置いといて。
じゃあ聞いてきます。と来た道を戻った。

今話してきたことを部員に告げると、やりいとばかりに千恵を初め皆が賛成した。
結局のところみんな好きなのである。

そうしてソフト部対野球部のソフトの試合が始まるのだった。
さっきも言ったように、今のところソフト部が二連勝中。
男と女。
それも野球部とソフトの試合をするなんて、何も知らない人だったら無謀に思えるかもしれない。
ボールにバットにグローブ、なんせ使っている道具は同じだから。

でもここが味噌だったりするんだよね。

高校生同士だったら野球部が勝つだろう、でもまだ中学生の私達、男の子より先に成長期がくるから体格ではあまり差がでないのだ。

それにソフトと侮ってはいけない。

実は同じバットでも野球とソフトでは真心が違うのだ、つまりボールにあたるポイントが、野球ボール１つ半ソフトのほうが根元にある。

ボールだって大きいから打ち易そうに思えるが近場から投げることでスピード感も違うし、上投げとした投げではボールの回転が違う事も打ちにくい要素なのだ。

だから思いっきり野球部が打とうとすると、高いフライになって内野に落ちてくるのだ。

今までの対決では圧倒的にソフト部に分があった。

「じゃあ始めるぞ。野球部先攻で5回までもしくは部活終了のチャイムが鳴るまで、コールドは無しってことで。プレーボール」香田先生の合図。

「「お願いします」」

本当の試合さながら、きちんと挨拶をして始まった試合。

私はピッチャーだったりする、受けるのは千恵だ。

一番バッター、2番バッターとそれぞれショートフライに打ち取って思った通りの試合展開となった。

次のバッターは大和だった。
が、あえなく撃沈。
あっという間に私達の攻撃になった。

相手は健太がピッチャー、もちろんキャッチャーは康太。
双子のバッテリーだ。

普段は中学生離れした剛速球を投げる健太も、投げなれない下投げになると、球の勢いはグンと下がる。
1番バッターのカンナは三遊間を抜けるヒット。
続く由香里もセカンドの頭上をポンと超えるヒット、3番バッターの千恵までもヒットを飛ばし、あっという間にカンナがホームに返ってきた。

今年も楽勝じゃない？

「よーしっ」

気合を入れてバッターボックスへ。
私のすぐ後ろには康太がいる。

ちょっとドキドキしてるけど集中集中。
ぐっと目の前の健太を睨んだ。
心なしか健太の顔が引きつったような、そりゃあ仕方ないよな3連続ヒットなんて小学生の時だって経験してないだろうから、バットを握りしめて構えたその時。

「タイム！」

康太が立ち上がった。

何だよ、試合はまだ始まったばかり、それもただのレクレーションだっていうのに。

康太はキャッチャーマスクを上げて健太の下に走りよった。

サードの大和も近寄って。

康太は何やら健太の耳に囁いた。

健太はふっと笑いながら私を見ていた。

何だっていうのよ！

私の横を通りすぎる瞬間、康太は私に微笑みながら”遠慮なんてするんじゃねえぞ。”って。

初めっからそんなこと考えてないっつうの。

マウンドに戻った健太は真剣な顔をしていた。

まるで野球の試合をしているように。

でもおいおい、何だか私の事みてないか？見るのはミットだろ。

気をそがれたその時、さっきとは随分と球筋の違う一球が。

「ボールっ」

外角に外れはしたものの、いいとこ点いてくるじゃん。

俄然やる気が出てきた。

再びグリップを握り直す。

いくら球筋がよくなったとはいえ、私にとったらまだまだ打ちごろ

だ。

来た！いい球、貰った！

打球はわずかにサードベースの脇に。

両方のベンチからはため息がでた。

私達のベンチからは、残念な、野球部からは安堵のため息が。

「流石だな。」

康太は私を見上げながら言った。

「いえいえ、ファールじゃ何にもなりません。」

本当は嬉しかったけど、これは本音だ。

いくら打球が良くてもファールじゃ何にもならない、私のストライクカウントが増えるだけだ。

健太の体力を消耗するだけの意味はない、あいつのタフさは良く知っている。

しかも5回までだしな。

次にきたボールを今度は引っ張らず、センター前に転がしたつもりだったが、運良くセンターの脇を抜け、三塁打になった。

走者は一掃、一気に2点入った。

しかもまだノーアウト。

審判をしている香田先生と目が合った。

私はサードベースの上から、ア・イ・スと口パクをした。その後、

康太は先生に小突かれていた。

大和が振り向いた。

「お前さぁ、ちょっとは手加減しろよ。うちのエースが自信なくしたら責任取ってくれんだろうな」

そうは言うが顔は笑っている。

冗談だと思ったので冗談で返した。

「そうだね、お嫁に貰ってやろうかな。」って。

すると何を考えたのか大和は大きな声で

「健太、これで自信なくしたら梓が嫁になってくれるとよ。」

っておい違うだろ。

私は嫁に来いって言ったんだって、ってだからなんでそこでそれを健太に言うんだよ。マジ勘弁してもらいたい。

当の健太は固まっていた。

でもその後、よっぽど私を嫁に貰うのが嫌なのか、いいコースを点くようになって結局私の後は続かず、私もホームに帰ることは出来なかった。

ベンチに戻りグローブを掴むと、今度は千恵が

「鞍替えかい？」

ってそんなわけないだろっ、後で大和とっちめてやる～。

マウンドに立つ。
ボールを握りしめながら、ふーっと息を吐いた。
次のバッターは健太、次は康太。
ピッチングもさることながら、バッティングセンスも抜群の2人が続く。
健太も段々とピッチングのコツを掴んできたみたいだし、ここで抑えなくてはいけない。
バッターボックスに立つ健太をみた。
只でもでかいのにそこに立つとより一層大きく見える。
こいつらと試合をする相手はさぞかしビビルだろうな。
渾身の力を込めて投げた。
ど真ん中。
ストライクを取ったのは私なのに、球筋を見極められていそうで妙な怖さだ。
千恵は外角の低めを要求してきた。
コントロール悪い私にそこへ投げろと言われても果たしてそこへいくかどうか。
「行ぇー」
放ったボールは低めのど真ん中だヤバっ。
あいつは本気？フルスイングで振ってきやがった。

しかしボールはミットへ。

助かったぁ、あれが当たっていたらホームランだよ。

超やばかった。

カウント2ストライク。

本当の試合だったらここで外すんだろうけど、あいつの本気さ加減をみていたら、勝負がしたかった。

次は千恵がどんなコースに構えようともど真ん中に投げる。

そう決めていた、ボールをジャージのズボンでふいた。

ふとミットをみると千恵はど真ん中にミットを構えていた。

さすが千恵、案外私より私の事を解ってるんじゃないだろうか。

そしてまた息を吐く。

打てるもんなら打ってみろ。

私が放ったボールはど真ん中。

それをあいつはまたフルスイングで、ジャストミートされた。

ジャストミートされた鋭い打球はボールは真っ直ぐに私の右足に向かってきた。

周りでは”危ない”とか”先輩”だとか”梓”だったり、一瞬の出来事なのにやけにはっきり聞こえたりして、私はボールから逃げな

くちゃなんて考える間もなくグローブを出した。

本当に出したって感じ。

これは反射神経ってのだ。

結構な衝撃を感じながら打球は私のグローブに納まった。

”ナイスキャッチ”そういったのは打った本人だった。

何だかたった一人投げただけなのに相当な神経を使ったみたいだ。

おまけに次のバッターは康太だ。

「ワンアウトー」

千恵が右手の人差し指を空に突き上げ大きな声をだす。

さっきとはまた違う緊張感。

康太が真っ直ぐ私を見ている。

”これは試合。これは試合。集中しろ”

自分の心の中で呪文のように繰り返した。

康太を見ず、千恵のミットだけを見つめ一球目を放つ。

健太と同じど真ん中。やっぱり双子だ。

まるっきり同じ反応。

ボールを見極めるように微動だにしなかった。

全く敵となると嫌な奴だよ。

二球目、インコースを構える千恵のミット。

こうなりゃ自棄だ！と投げたボールは康太の太ももに向かっていって。

康太はさっきの私さながらの反射神経でくるっと身を翻しボールを避けた。

「傷者になったら、俺もお前に貰ってもらわなくちゃか！」って。

笑っていうな！冗談だって解っているのに私は動揺してしまった。

”タイム”

千恵がこっちにやってきた。

「あんた何やってんのよ。そりゃ嬉しいのはわかるけど、顔赤いよ。まあ私しか気がつかない程度だけど」

そういうと、ミットをとって私のほっぺをパンパンと叩いた。

「気合入れて、頑張れ梓。」

そういって戻っていった。ほっぺがヒリヒリしてる。

今度こそ顔は真っ赤だ。

フーっと息を吐き、気を取り直して試合続行。

康太は次に私が放ったボールを合わせるようにミートしレフト前に運ばれてしまった。

”ドンマイドンマイ”

ショートを守るカンナが声を掛けてきた。

手を上げそれに応える。

ふと大和の声が聞こえたような気がしたが、今はそれどころではない。

緊張したせいか喉がカラカラだった、早くベンチに戻りたい。

健太と康太を相手にした後は何も怖いものはない。

そしてあっけない程すぐにベンチに戻ることになった。

この後、両者一歩も譲らずっていう感じで3回まで進み、４回表、次のバッターが健太というところで部活終了のチャイムが鳴った。

正直ホットした。

結局、点が入ったのは初回のみで３－０でソフト部の勝利だ。

香田先生は約束だからと夏休みの部活でアイスをおごると言ってくれた。

挨拶をしてグランドから部室へと戻ってきた。

「梓先輩、お疲れ様でした。今日かっこよかったです。」

なんて言われて気をよくしたりして。

そして後輩は続けた

「健太先輩と康太先輩と仲がいいんですね。私達からしてみたら健太先輩も康太先輩もちょっと怖そうな顔してて。」と。

健太は兎も角として康太の顔が怖いって?!
私にはかっこよくしか見えないんだけど!
私の心中察したのか、千恵は大きな声で笑いだした。
千恵は言った。
「まあ確かに目は鋭いし、ごつくって、でかくって、声も低いし、今時の顔じゃないよねぇ。どっちかっていったら線も細くってさらさらヘアーの大和の方がカッコイイかもね。」
ええーっそうなんだ。
私には衝撃的な話だった。
後輩達は、うん、うんと頷いていた。
部室の鍵を閉め、本日の部活も無事終了。
千恵と一緒の帰り道。いつもと同じようにくだらない話をしていたのだけど、不意にさっきの部室での会話を思い出した。
「ねえ、千恵。さっきの話だけど。」
皆までいうもなくそれだけ言うと。
「さっきの?あぁあれね。一般論だよ。実際あの2人は厳つい顔してるよ。梓からしてみれば恋は盲目っていうからね。大和にしったってそうだよ。あんたは近くに居過ぎるから解らないだろうけど。いい顔してるんじゃない。」

そうなんだ。ふーん考えた事もなかったよ。
「もしかして、千恵も大和がかっこよくみえたりするんだ。」
素朴な疑問だった。
「だから一般論って言ってるでしょ。」
顔も赤くなるわけでもなく淡々と返事が返ってきた。
一般論ねぇ。
良く解らないや。
そうこうしているうちに千恵の家に着いた。
私の家は千恵の家から徒歩3分、辺りは暗くなり始めた。
なんてことはない歩き慣れたこの道。
少し早足で自宅へ帰った。

幼馴染＝悪魔？

「女の子らしくかぁ」

湯上りの濡れた髪をひっぱりながら、鏡をみる。
日焼けした肌に、ストレートのショートカット。
パジャマでさえジャージだったりする。

私の中の女の子らしくっていうのは、色白の肌に、ふわふわとカールした髪、パジャマはーそれはいっか。
何より、男友達として付き合ってきただけに、あいつの言葉は私にとって晴天の霹靂だ。
何の気なしに言った言葉なんだろうけど。

思わぬ試合になったため忘れていたけど、自分の部屋で一人でいると今日の出来事を振り返ってしまう。

忘れていたといえば！！大和だ。

髪を乾かすのもそこそこに、新聞紙をくるくるっと細長く丸めて窓を開ける。
電器が点いている大和の部屋の窓をその武器で突っついた。

「何だよ、宿題か？」大和が顔を出した。

「終わったって！そうじゃなくて、今日はよくも失礼な事をオンパレードしてくれたじゃない。」
私は怒ってるんだから。そんな私を尻目に

「俺、なんか梓に言ったっけか？」
なんて首をかしげている。白々しい、分かっているくせにすっとぼけやがって。
「あのねーぇ」
私も呆れた顔でかえした。
「あぁ、あれか？康太の時の、それとも健太の時のか？」
やっぱり分かってる！むかっとした。
「両方だよ。」ありったけの目力で睨んでやった。
すると大和は
「失礼って、本当の事じゃねえか。スカート穿いた事ねえのも、責任とるっていったのも。」
今度はニヤリと笑いやがった。
「スカートはそうかもしれないけど、責任とって私がお嫁に行ってどうするのよ！私は嫁に来いっていったんだ。それも冗談で返しただけなのに。間違った事をあの試合中に健太に言う事ないじゃん。」
もう一度睨む。
「ふーん。そんな事か。どっちにしたってあんまり変わらねぇって。でもあの一言でうちのエースが立ち直った訳だから俺らにとったら当たりだぞ。それとも誰かに聞かれたくなかったとか？」
嫌な奴だ。

小さな頃から一緒にいるせいなのか、私の心の中を覗いたように的確だ。
全くその通り、冗談と言えど康太に聞かれてしまった事が一番ショックだったりすんだよ。
でもこれを認めてしまうと、明日からの私はからかいの対象間違いない。
普段あいつの近くに居るだけに認める訳にいかなかったりする。

「そんな奴はいねえって。もういい、お前とまともに話した私が悪かったよ、じゃあな。」
一方的にそういうと窓を閉めカーテンを引いた。

その瞬間、”髪は乾かしてから寝ろよ”と聞こえたけど、カーテンのこちら側からアッカンベーをしてやった。
でも、もしかしたら気がついてるのかも知れないとも。
そう考えた瞬間ブルブルっと寒気が襲ってきた。

思えば、小さな頃から大和には何でもお見通しとばかりに散々からかわれてきた。
友達とケンカした時、母さんに怒られた時、その日の私を見て心の動揺を突付いてくるのだ。私も堪らず言い返すのだが、いつものらりくらりとかわされてしまう。
でもその後にはフォローもしてくれたけど。

そういや最近は一方的に突付かれるだけでフォローの何もあったもんじゃない。
大和がいい奴なのは分かるが、かっこいいって思われてるなんて信じられない。
今となっては

幼馴染という名の悪魔だ。
そんな事を考えていたら
「あーずーちゃん」
兄貴だ。
2歳上で幸太郎という。
この声を出す時はどうせロクな用事じゃない。
「な～に」
兄貴に倣ってブリッコした声出してドアを開けた。
そこには顔を歪めた兄貴が立っていた。
「お前のそんな声初めて聞いたよ。そんな声もでるんだな。」
でたよ。今日2人目の失礼な奴だ。
「今日もですか？」用件は聞かなくても分かっている。
「持つべきものは可愛い妹だね。」
そういうと私のベットの上にうつ伏せになった。
「20分でジュエルのモンブラン2つ。」時間と大好きなケーキを要求した。
「了解！」
兄貴の返事を聞き背中に跨った。

「いくよ。」

同時に両手で丁寧に揉み解す。

「あー気持ちぃ。やっぱり梓が一番だよ。この力加減が絶妙だぁ」

そう高校で陸上部に入った兄貴は風呂上りに私にマッサージの要求をするようになった。

今日のように猫なで声で私の部屋に入ってきた兄貴が私の手を取り、

「この手の大きさ、そしてお前の力強さ、どうみても理想的だ。」

そういって私にマッサージの指導をした。これを覚えておくと絶対この先、役に立つと。

気がつくと兄貴の専属マッサージ師だよ。

まあしてあげる度におねだりもしているから、悪い気はしないけど。

「そういや、さっきロミオと何話してたんだ?」

ロミオって、何だよ!

「別に。」そういってありったけの力で背中を押した。

「やめろって、お前の力、洒落になんないんだから。」

こうして夜は更けていった。

「遅刻しちゃう~。どうして目覚ましが止まっているのー。」

慌てて着替えを済ませてカバンを持った。

「お母さん、おはよう!兄貴は?」

テーブルに置いてあったトーストにかじりつく。

「おほよう梓、ちゃんと座って食べなきゃ駄目じゃない。お兄ちゃんなら部屋にカバンを取りにいったわよ。」

全くもう、何でこの子はこうなのかしら？と小さい声が聞こえたが聞こえなかったことにしよう。

トーストをほおばり一気に食べる。

手早く顔を洗い、歯を磨いた。

程なくすると兄貴がカバンを持って玄関に向かった。

「お兄ちゃん、乗せてって」

頼む、と顔の前で手を合わす。

「久し振りに聞いたな、お前のお兄ちゃん。ジュエルのモンブラン1個没収な。」

勿体無いとは思うが遅刻よりましだ。交渉成立。

「やっぱり持つべきものは頼りになる兄貴だね。」

「あれ、もう兄貴に戻っちゃうのかよ。まあこっちの方がしっくりくるからな。」

私もそう思った。

「「行って来ます」」

「久し振りだね、兄貴の後ろに乗るの。」

「お前、重たくなったんじゃねえの？」

言い返したいところだが、後ろに乗せてもらってる身、我慢我慢だ。

「あれだよ、トレーニングと思ってさ。」

「トレーニングねぇ。確かにそうかもな。」

兄貴は地元の高校へ自転車通学だ。

中学はその途中にある。

いつもは朝練があるのだが、期末テスト前で今日から部活は休みだ。

そっか朝練ないから目覚まし時間変えようと思って止めたんだった！納得納得。

それにしても自転車だと速い速い。

兄貴と他愛も無い話をしていたらあっという間に学校の近くまでやってきた。１０分は短縮できたよ。

「梓、あれ、何だっけほれ大和のライバル。」

兄貴が言った先には、健太と康太がいた。

今日は朝からラッキーじゃん。

それにしてもライバルって。

「図々しいね、大和も。そんな事言ったの？あいつらと大和じゃライバルにもならないよ。あいつら野球センス抜群だから。」

「可哀相な奴。」

兄貴はぽつりと呟いた。

「こればっかりは、誰がみても確かだから。あいつらと比べる比じゃないからね。」

「報われないな、大和も。」兄貴はまた呟いた。

「ありがと兄貴、ここでいいや。」よっと自転車から飛び降りる。
「じゃあな。ちゃんと勉強するんだぞ。」あんたはお母さんかい、と思いつつ
「兄貴もな。」と軽く手をあげ見送った。
健太と康太の後ろに立って、いつものようにカバンを振り上げた。
そこで一瞬、昨日の康太の言葉が頭を過ぎさる。
私はゆっくりとカバンを下ろした。
「おっす。」双子の隣に並ぶ。
「「おう」」さすが双子だ、声も揃ってる。
「珍しいな、お前が普通に登場するの。」康太が言った。
それは康太が昨日言ったからなんだけど・・・
「朝はお弁当がよっちゃうからな。」と苦しかったが笑ってごまかした。
「弁当なんて入ってないくせに」健太の鋭い突込みが小さい声で聞こえた。
「ギャグだよ、ギャグ。細かいことは気にしない。そんなちっちゃい事言ってると嫌われるよ。」
冗談で言ったのに、健太の顔が少し歪んだ。何だ？そんな変なこと言ったか？

「そうそう、昨日の試合のことだけど、」康太が言うと

「次は絶対負けないからな。」

健太が口を挟んだ。

「望むところだ。」

今一噛み合わない会話だったが昇降口に着いて終了だ。

康太が何か言いたそうだったけど、また後で聞けばいいか。

康太は1組、健太は2組、そして私は3組だ。

それぞれの教室に入ってまた学校の1日が始まる。

いつかきっと

俺と梓はガキの頃からずっと一緒だった。
男とか女とかそんなことは関係のない親友だった。

俺の隣には梓がいる、それが日常だったのだけれど、小学校の高学年の辺りから、梓の視線の先にはいつもあいつが映るようになった。
それがわかったのは皮肉な事にいつも俺が梓をみていたからであって。

梓はガキの頃から背がずば抜けて高くて、兎に角目立っていた。
本人は女の子は何を考えているか解らないから苦手なんて言ってるけど、だからといって何がある訳ではなく、只単に、男の子と遊ぶ方が楽しいという単純な発想だ。
裏表のない素直な性格の梓は男からも実は女からも人気があった。

そんな梓と並べるのは俺の家が梓の家の隣にあったからだ。
いつも一緒にいた俺は、根が素直というか単純な梓の気持ちが手にとるように解った。
だから梓にかまって欲しくてついついちょっかいをだしてしまったりして、今思えば好きな子を苛めるってのだったんだろうな。
大きくなってくるに連れ段々と男女別に遊んだりしてくるのだが、梓は全く変わりがなく、それが俺にはとっても嬉しかったんだ。

でもそんな俺の前に康太が現れた。

健太、康太双子の兄弟。
こいつらも背が高くてとても目立つ存在だった。
ごつい身体に細い目をした二人は見た目はちょっと怖かった。そん

な俺と正反対の容姿をした康太を梓は気にし始めた。
俺は生まれて初めて嫉妬という感情を覚えた。
俺は中学生になり野球部に入部する。そこで健太と康太と一緒になった。
この双子、揃いも揃って無口だし、ごついし、なにより康太は梓の気になる相手。
あまり関わりたくないって思っていたのだが、付き合ってみるとめちゃめちゃ良い男達でいつの間にか一番気の許せる大事な仲間になっていた。
気がつくと、健太の視線はいつも俺と同じ方向を向いていた。
きっと健太も俺の視線の先に気がついているだろうが、2人でこの話をした事は一度もなかった。
そして、その頃梓の心が動き出したのに気がついた。わかった理由は簡単だ。
あいつらを完璧に見分けられるから。
一卵性の双子というのはちょっとやそっと見ただけでは見分けがつかない。
この双子と一日中一緒にいる俺は正面からみたら見間違う事はないが、横顔や後姿だと微妙なところだ。
が、梓はどんな遠く離れていても、例え後姿だろうと迷いがないのだ。
双子の両親だって間違えることがあるっていうのに・梓はいつだって完璧に見分けていた。
後もう1つ、それは梓の態度だ。わけ隔てなく話しているようだっ

たけど、違うのはその行動だ。ふざけている時、俺や健太には”首四の字だとか何とか、プロレス技をかけてくるが康太には掛けたことがないのだ。
カバンで思いっきり叩くことはあっても、梓は康太に自分から触れることはしないんだ。

それって俺と健太は眼中無いってことだろ。

あいつが俺と接近するのは非常に嬉しいところなのだが、複雑な心境だ。
俺もそうなんだが、健太はどう思っているのだろう。
同じ顔しているのにな、世の中上手く行かないよ。

まぁその方が俺にとったら好都合だけどな。

今は梓より背も低くて健太や康太に野球は勿論のこと勝てるものは無い、完敗だ。
だけど、今に見てろよ。

梓を振り向かせて見せる。

だけど、肝心な康太の気持ちはどうなんだろう？
それに梓が健太に心変わりしたら？
俺の将来は前途多難らしい。

それにしても、今日の試合は散々だった。
一度も塁にでる事なく、いいとこ１つも無かったからな。
梓に良いところ見せたいとは思うのだけど、余計力んでしまうのか気合だけが、空回りした。せめて野球の試合だったら少しはましだったかもなぁ。そんなことを考えていたら、

コンコンコンコンコンコンコン

と窓を叩く音が、梓だ。
この叩き方じゃあ相当怒ってるんだろうな。
深呼吸して窓を開けると案の定、しかめっ面した梓がいた。
俺は、梓が口を開くよりの先に

「何だよ、宿題か？」と、別に宿題じゃなくても良かったのだか。

「終わったって！それより・・・」ほらな、怒っているのに乗り突っ込みをしてくれる。

思った通りの反応で楽しい。
その後もなんだこうだと言っていたが、俺の返す言葉に一瞬押し黙ったりして。
そして俺は止めを刺した。

「誰かに聞かれたくなかったとか？」

「そんな奴いないって・・・」

そうは言っても動揺しまくって、あんなにムキになって反論するってのはそうとしかとられないだろうに。
本当に、梓って解り易いんだよな。
自分で言ってて虚しいけど。

むっとして窓を閉める梓に

”髪乾かしてから寝ろよ”と言った。返事はこない。

最初見たとき本当はドキっとした。
服こそジャージだったが、湯上りでまだ湿り気のある髪、火照った顔。
隣に住んでる特権だよな。

梓は俺がこんな事考えているなんて、これっぽっちも気がつかないんだ。

でも、それでいいんだ。
まだ時期じゃないから。
今は、この小気味良い会話で満足だ。
それに今日のように誰も見たことがない湯上りの梓も見られるわけだし。
俺って危ない奴か？って中学生の男子じゃそう思うだろ。

それにしても後何年かなぁ。俺が本当の意味で梓の隣に並べるのは。

もしかしたらそんな日、こなかったりして。

いらん想像をしてしまって、頭をブルブルっとふった。
こんなことして意味があるとは思わないけど、マイナスの考えを吹き飛ばして、さっきの梓の顔を思い出し、多少早いが寝る事にした。

おやすみ梓。

窓の向こうをみながら返事の返ってこない、いつもの言葉を呟いた。

報われない奴

「おっ空揚げまだ残ってんじゃん！1個もーらい」
梓の給食に手を伸ばしかけた男1名。

バシッっと後頭部へ衝撃を与えた男1名。

「大和っ食い物の恨みって恐ろしいのしいの知ってるか？」

言わずと知れた給食の時間。
私達の後ろに不敵な笑みをみせた康太が立っていた。

何故康太かと解ったかというと私はみていたから。

叩かれた大和は頭をポリポリさせながら、何だかゴチョゴチョ言っていたがこの際無視だ。

そう、私はこっそり梓の顔を観察していた。

赤い、赤くなってるよ。
日焼けした肌は、そう赤くなっても目立たないけれど、四六時中一緒にいる私にはよーく解る。
私に見られていることに気がついた梓はこっそり周りに聞こえないように

「もしかして、赤い？」と聞いてきた。

私は小さく頷いた。

何だか楽しくなってきたよ。
普段は男っぽくて、口調だって何だって女の子とはかけ離れた梓が顔を赤くしてるんだよ。
実は昨日も見たけど。
それに、康太の登場であたふたしてる大和も。
大和はいつだって梓を見ている。
梓の隣にいる私は良く解る。
普段はおちゃらけた態度で梓をからかっているけど、本当はいつだって梓の目の中に入っていたいだけなのだ。

梓に大和に康太、ここに健太がきたらもっと面白いのに！なんて考える私は悪い奴かな？
そんな事を思っていたって、私は梓を応援する気持ちは本物だよ。
好きな人と想いが通じればいいね、って応援してるから。
そろそろ助け船でも出してあげましょか。

「康太さぁ梓はそんなケチな子じゃないよ。空揚げの1個や2個。ねえ梓。」

「そうだよ！そんなケチなわけないだろ。」

そういった梓は、必死に空揚げを守るように、給食に手をかざしていた。
それを見て、思わず3人で噴出してしまった。

本人は無意識でやっているようで、何を笑われたか解っていないようだ。
私は笑いながら、梓の空揚げを指差した。
やっと解った梓は頭をかきながら、本当はあげたくない。と白状した。

「な、やっぱりだろ。大和、この空揚げ食ったらきっと練習中に今度はソフトボールが飛んでくるかもな。」康太が言った。

「ちぇっ、何だよ。別に空揚げの1個位。最後まで残しとくなんて、食べて下さいって言ってるみたいだろ！それより、康太何か用か？」大和は不貞腐れながら康太をみた。

「あぁ、5時間目で使う国語の辞書忘れちゃって、っていうか健太が6時間目にあるの知ってたから当てにしてたら、健太も俺を当てにしてたみたいでよ。悪い辞書貸してくれ。」

「悪い、貸してやりたいのは山々なんだが、俺も持ってきてないんだ。」大和が答えた。

私は気づいてるよ、大和君。いつも、わ・ざ・と、忘れている事を。なんたって隣の席が梓だもんね。やいやい言いながらも、梓の辞書を2人で一緒に使っていることを。そこで

「康太、辞書なら梓が持ってるよ。この子いつでも、”学校に”置きっぱなしだから！！」私が言うと。

康太は視線を梓に戻し、

「宜しく」と言った。

梓は、ハイハイ全然気にしてません。

みたいな顔をして後ろのロッカーから国語の辞書を持ってくると

「土曜の練習の時。イチゴのブリック1個な」

と康太に渡した。
強がっちゃって。

「高っけー」

といいながらも辞書をゲットした康太は満足そうに教室を出ていった。

廊下に出る際、次は健太に貸してもいいか？と聞いてきた。
思わず、私が”いいよ”と返事をしてしまった。

梓は「はいはい、」なんて言ってたけど、隣の大和は小さくチェッと舌打した。
私は心の中でごめん大和と誤りつつも、ニヤリと大和をみてしまった。

「千～恵～っ俺もブリック飲みたい。」

そういう大和にちょっぴり同情した私は、しょうがないなとまだ飲んでいない給食の牛乳を大和に渡した。

そう、好きでも無いくせに、誰かさんに追いつこうと毎日せっせと飲んでる牛乳を。

梓は「好きだねぇ牛乳。」
なんてのん気な事言ってるけど、それはあんたのせいだよ！とは言えずにいる。
なんとも歯がゆい関係だ。

「サンキュウー千恵。」と私から渡された牛乳を飲み始めた大和は

苦笑していた。

「報われない奴だ。」

本心でそう思った。

そして放課後。

試験前で部活は休みだ。

「この後、どうする？」梓が言った。

「どうするって、私は勉強するよ。」ちょっとだけどね。

「ゲッっ」梓の顔が引きつった。

「ゲッっってあんたねえ、はっきり言わせてもらうと、私より梓の方が必要だと思うけど。」

これは本音だ。

でも梓はさっぱりしているというか、全然気にしていないというか。

テストの点が良くても悪くてもどっちでもいいと言うのだから。

梓にとって学校はソフトボールをやる為と康太にあう為だけなんだろうな。

あと体育と給食か。

「ん～。勉強かぁ。考えただけで頭痛くなってきたかも。」梓は本当に頭を抱えだした。

「まだ後5日あるからね、」そんなことを話ながら昇降口までやってきたら、下駄箱にもたれる大きい男が。

梓の顔をみる。
どっちなんて聞くほうが野暮ってもんだ。
「よお、健太。」梓は右手でストレートパンチ。
それを受ける健太。
どっちかっていったらこっちの方が梓に合ってるって思うのは私だけ？
「痛ーって。それよりほれ。」渡されたのは国語の辞書。
「お前なぁ、渡すんだったら教室まで来いよ。また上まで行かなくちゃじゃねえかよ。」
そんな事を言う梓。
まあ尤もなんだけど。そこで私は口を挟んだ。
「梓が辞書を家に持って帰ると思う？普通の子だったら持ってかえってお勉強でもするんだろうけど、梓だからねぇ。」
隣でうん、うんと頷いている。
反論しないで納得するのが梓だ。
「梓、私先帰るから。なんせ、勉強しなくちゃだから。健太、後は宜しく。」
私はそう言って2人を置いていった。
「待っててくんないのかよー」
と叫ぶ梓の声が聞こえたけど、軽く振り返り手をあげて帰ってしま

った。

梓の顔は兎も角として、健太の顔ったらなかったよ。
明日楽しみだな。
頑張れ健太！心の中でエールを送った。

のだけれども
。

「待っててって言ったじゃん。千恵歩くの早い。」
と息を切らした梓がいた。

「あれ、健太は？」
振り返っても健太はいなかった。

「あぁ、健太。お前が借りたんだから、自分で返せって。私の机の上にでも中にでも置いといて。って辞書突っ返した。」誇らしそうにいう梓。

ここにもいたよ

「報われない奴が。」

私の呟きが聞こえたようで、
「何か言った？」
私の３歩前を歩く梓が振り返った。

「なんでもないよ」

そう梓ってこんな奴なのだ。

面白い奴

「やっぱり、化学あの公式でたねぇ。良かった良かった。１つは確実に出来たよ。」

「何、もしかして梓、自信があるの１問だけってわけないよねー。」千恵は呆れ顔だ。

１問だけってわけじゃないけど近いものはある。でも化学が出来たって将来役に立つか解らないじゃん。

今は２時間目と３時間目の間の２０分ある休み時間。千恵と２人キャッチボールをしようと校庭へ向かっている。

「何で、試験中って部活休みになっちゃうのかな～」
そう思うのはあんた位だよ。と千恵のボヤキが聞こえた。

「梓、見てみよ。校庭ガラガラだよ。本当は私だって見直ししたいっつうの。」
「悪い、悪い。１０球でいいからさ。」

ただでさえ最近雨で練習できなかったっていうのに、このテスト休み。
身体が鈍ってしょうがない。
いつもだったら大和相手にキャッチボールするのだけれど、あの一件以来私からあいつに頼みごとするのは何だか癪で、壁相手にするのだが、どうもしっくりこなかった。

校庭に行く途中、渡り廊下に康太の後姿が目に入った。
隣には健太と大和、あとあれはバスケ部の山田か。
一瞬山田と目が合ったような気がしたが、私はキャッチボールキャッチボールと千恵を引っ張り通り目的地へ。

「やっぱり、違うよ。千恵が一番だよ。」
壁とは違う感覚。
やっぱいいねえ。

「本当に１０球だけだからね。でもプラス１０球、いちごブリックでもいいけど。」
やっぱり千恵って・・・。

「１０球でいいよ、でも貴重な時間をくれたから、明日うちで母さんのクッキーご馳走するよ。」後で頼んでおこう。あくまでも母さん任せだけど。

「宜しくね。はい約束の１０球。悪いけど私先に教室行くから～」
マジですか？自分で言ってて何だけど、早すぎませんか？
千恵は言い終わりもしないうちに教室へと戻っていった。
今更詰め込んでもね～。私はゆっくりと教室へ戻ろうとした。
途中の渡り廊下で

「随分と余裕だね。」康太に話しかけられた。

「まあね」
何がまあね、なのだか解らないが一応返事をしてみた。

「何がまあね、だ。諦めの境地だろうに。」
大和が鼻で笑った。
確かに私もそう思ったよ。でも大和に言われると何だかムカつく。
「お前だってこんなところにいて同じだろうが！」ふーんだ。
そんな私達の会話を周りのやつらが笑っていた。
その時山田が
「やっぱ、佐藤って面白ろいな。俺好きだわぁ」
この発言に大和と双子は反応した。
「お前、好きってー」健太の言った言葉を遮って再び山田が口を開いた。
「まあそれはそれとして、今日佐藤勉強する？」
「多分しないな。」という私の言葉に、大和は
「多分はねえな。」と。全く減らず口が。
「じゃあさ、放課後一緒に帰らない？話があるんだ。」と山田が言った。
そうだな、きっと千恵は最後のあがきをするんだろうし、山田の話も気になるし
「オッケー。じゃあ放課後ね。」

手をヒラヒラを振りながらその場を後にした。
後ろの方で、健太と大和が山田に何か言ってたようだったけど、あまり気にもならず教室へ戻ってきた。

教室へ入ったら驚いた。
殆どの生徒が机にかじりついていた。
このクラス変わってる。
とは言っても今来た途中の教室もこんな感じだったかもしれない、そういえば廊下にでていた人はまばらで、あいつら位だったもんな。

「千恵、次なんだっけ？」

「本当あんたには、」千恵はふーっと息を吐き。
「英語、リーダーだよ。」と教えてくれた。

だからみんな必死で単語覚えてるんだ。
妙に納得してしまった。
服部先生厳しいからな～。

「梓さぁ。追試になったらそれだけ部活できないの知ってるでしょうに。」
と千恵に言われて思い出した。

何日後の追試に受からないと、夏休みも補習をするんだっけ。

「ゲッっ」

それだけは勘弁だ。
補習はしょうがないけど部活と被らなきゃいいな。
私の中では追試は決まりごとだったから。

もともと勉強してなかったからテストが出来なかったのは当たり前なんだけど、

「夏休みの補習かぁ」

頭痛くなってきた。

試験中は3時間で終わるので、給食を食べずに下校する。

そうそう。今日は山田と帰るんだった、千恵に言わなきゃ。

「千恵、今日さぁ、私山田と帰るから。」

「山田とー？！そりゃまた珍しい組み合わせだね。」

千恵は驚いていた。

「そう何だけど、なんか山田が話があるって言ってさ、そんなわけだから。」

「そんなわけって、もしかしたら告白かもよ？」

千恵は冷めた口調で私をみた。

「それはないない。そんな感じじゃなかったから。」

ちょっと千恵が怖く見えるのは気のせいだろうか？

その時、時の人が姿を現した。

山田は始めに、私ではなく千恵に

「よお」

と声をかけた。

千恵は
「よお」と短く返した。

そして、私の肩に手をかけ
「じゃあ行きましょうか？」といい2人で教室をでた。
勿論、手は払ったが。

教室を出ると、大和と健太が2人して腕を組んで立っていた。
その隣に腕こそ組んでいないが康太まで。
何だか空気が重たいような。

「おっす、またな。」私は3人にいつものように言ったのだが、康太こそ私をみて

「またな」と言ったものの。

他の2人はと言うと私ではなく、山田をみていた。

「本当に一緒に帰るんだ。」と大和が言った。

「おう、じゃあまた。佐藤行くぞ。」
「おう、じゃあな。」2度めの挨拶に2人は

「「またな」」としぶしぶ応えた。

2人並んで校門を出る。
「なんか、あの2人感じ悪かったな。お前ケンカしたのか？」
思ったことを素直に口にした。

山田は笑いながら
「やっぱ、佐藤って面白いな。」と。
全然答えになってないんですけど。
まあいっか。康太は普通だったしな。
「それより、話ってなんだ？」
「まあ、そんな慌てることないだろ？うち行くか？」
うちって山田の家か？
「別にいいけど、」
「いいのか？俺冗談で言ったんだけど。」
これじゃあ、あいつらが気を揉むわけだ、山田は小さな声で呟いた。
「冗談なのか？じゃあ、うちにする？」
「いいのか？」
「別に、いいも悪いもないだろ。大和だってたまに来るし、いきなり友達が来たって母ちゃん嫌がらないぞ。」
そうじゃなくって、と山田は思った。
「じゃあ、遠慮なく。誘ったのは俺なのに悪いな。」
「気にすんなって。」
そんな会話をしながら家へと向かった。

途中千恵の家の前を通りすぎる。
山田の目線は一瞬千恵の部屋に向かったような気がした。

もしかして！

千恵の家の前を通り過ぎると山田は何事もありませんでした、という顔をしながら他愛もないことを話している。
そういえば千恵の態度もいつもと違ったような。

何だか出来なかったパズルが出来たときのようにすっきりしてきた。
試験もこんな風に出来ればいいのに。
知らず知らずのうちに顔が笑っていたらしい、山田に

「そんなに俺と帰るのが楽しいのか？」
と聞かれた。

「そんなところだ。」
どんなところだ？と思ったけどまあいっか。

本日3度目の
”面白い”発言が聞こえた。

狙っちゃえば！

「ただいまー。母さん、友達連れて来たから。後で飲み物持ってきてぇ。」

「お帰り、了解！」奥から母さんの声がした。

「なっ、大丈夫だろ。山田入れよ。」玄関に突っ立ている山田に声かけた。

「お邪魔します。突然すみません。」山田の声のが聞こえたのだろう。今まで顔を見せなかった母さんがひょっこり顔をだした。

「あら、いらっしゃい。梓がいつもお世話になってます。どうぞ。」興味深深って感じだ。

でもまあ、男友達が来るのは初めてじゃないし、というよりか圧倒的に男友達の方が多かったんだけど。

母さん、新しい面子が来ると必ず顔みせたりするんだよな。

「同級生の山田です。」とペコリとお辞儀して私の後に続いた。

「はーやっと帰ってきた。部活と給食のない学校なんて疲れるだけだよ。」

そう言いながら部屋の窓を開けた。

振り向くとまだ山田は部屋の前に立っている。

「入らないのか？遠慮する事ないぞ。」

「あぁ。それにしてもお前の部屋って」

そう言って部屋をグルリと見回す。

「俺の部屋と変わらないな。」

「そうかぁ。特になんてことの無い部屋だけどな。」

山田に言われてみてふと見渡してみる。なんてことはない、いつもの部屋だ。

壁には

全日本のソフトボールの選手のポスターが貼ってあり、本棚にはソフトボール関係の解説書や主人公が野球やソフトの漫画。

床には

バットとグローブが置いてある。

カーテンやベットカバーは薄い水色で統一している。

どちらかというと、あまり物が置いていないすっきりとした部屋だ。

「俺、女の部屋っていうイメージを根底から覆されたよ。」

失礼な奴だ。

「それより、話ってなんだよ。」多分あの話だと思うが・・・

「あぁ、そうなんだよな。それを話にきたんだよな。」

と言ったきり話が続かない。

丁度その時、

「梓、入ってもいい？麦茶持ってきたわよ。」

母さんだ。

「いいも何も、今まで聞いた事、無いくせに。変な母さん。」

山田は本日４回目の”面白い奴だよ”発言。

「頂きます。僕は相談にきただけなので期待に応えられないみたいです。」

と山田は笑った。

母さんも笑っている。

「あら、残念。やっとこ女の子を産んだと自覚できるかな？と思ったのに。」

聞き捨てならない言葉を聞いた。

「れっきとした、女なんですけど。」

意味解らないって。

「これだからね、じゃあ山田君ゆっくりしてってね。」

と母さんが下へ降りていった。

「お前ん家、母さんも面白いんだな。」

あの会話のどこが面白いんだ？

「そうか？たまに意味不明なこと言うけど、面白いのか？」

「面白いよ。」

”面白い”は山田の口癖なのだろうか？

「それで。さっさと話ちゃえよ。」

「あぁ。」

またそういったきり黙る山田。

暫しの沈黙

「あーじれったい。千恵の事だろ。」
私は痺れをきらして言ってしまった。

一瞬で山田の顔が赤くなった。
ビンゴだ。

「お前、いつから・・・。」

「さっきだよ。自分でもびっくりだよ。こんなにすっきり答えが解ったのは、テストでも何でも初めてだけどな。すげー自分。」
私は満足気に頷いた。

「それで。一体何を相談したかったんだ。」
私が聞くと、覚悟を決めたのか山田は話始めた。

初耳だったのだが、山田と千恵は幼稚園からの友達だそうで、小学校の低学年までは仲が良かったらしいのだが、良くある話でなんでも友達にからかわれたのが切欠で段々と話をしなくなっていったそうだ。

そういえば、千恵は４年生位の時に引っ越してきたのだ。
学区内だったから気にも留めてなかったのだが。
それまでは、山田の家の近くに住んでたってことかぁ。

最近まで何とも思わなかったみたいなのだが、私と一緒にいること

で大和や康太、健太達と話をする姿をみて、自分自身が落ち着かなくなってきた事を話だした。

「要するに、嫉妬してた。ってわけだ。」

私の言葉に山田は頷いた。

「それでだ。来週の花火大会に誘いたいんだ。でも俺、今まであいつから随分と離れていたから誘いにくくて・・・。大和や健太、康太も誘うから、お前も一緒に行ってくれないかと。恥を忍んで頼みにきた。」

「仲直りの一歩。ってのか。でもそれっておかしくないか？千恵だってどう思うか。はっきり好きだっていうのが一番だと思うけど。」

「それが出来たら、やってるよ。」

山田は窓の外に目を向けた。

「千恵って好きな奴いるのかな？」独り言のように山田が呟く。

「さぁ。でも今日の様子からしてみるともしかしたら、」

「もしかしたら？」

「秘密だ。まあ回りくどいことしないで、正面から行くのが一番いいんじゃないのかな。」

「で、玉砕したら？佐藤が責任取って俺と付き合ってくれたりして。」

と山田は笑った。

「そんなこと、ある訳ないだろ！」

真剣に話してやってるのに、冗談言ってる場合か？何かこの手の話最近もしたな。

「頼むよ。後は自分で何とかするから。兎に角、きっかけが欲しいんだ。」

さっきとはうってかわった真剣な表情の山田をみてしょうがないなと。

「誘うだけだからな。」と言ってしまった。

「本当か、恩に着るよ。このお礼はいつかするから。」

山田が抱きついてきた。

「わかったから、暑苦しいって。」

その時さーっと風が吹いてカーテンが捲くれ上がった。

そして、窓の向こうの大和の部屋から、こちらを向いている健太と目が合った。

「健太だ」

私の言葉に慌てて山田が離れる。

苦笑いした山田が

「ありがとうな。じゃあ俺帰るわ。」

と立ち上がった。

「おう、頑張れよ。」

山田を玄関まで見送った。

「じゃあな。お邪魔しました。」

山田の声に気がついた母さんが来た時と同じように顔を出した。

「またいらっしゃいね。」

「はい」

にっこり笑って山田は帰って行った。

「感じのいい子ね」

母さんが言った。

「そうかもな」

と返事をする私に。

「狙っちゃえば。」

とニヤリと笑う母。

「怖いんですけど、その顔。それにあいつは今、思ってる子以外目に入らないよ。」

「あら、残念。」

そう一言いうとまた奥に引っ込んでいった。

噛みあわない会話

自分の部屋に戻り一息つく。

千恵がねぇ。

そういえば、山田と千恵の事でいっぱいで考えていなかったけど、

私も康太と一緒に花火大会に行くのか。山田いい奴じゃん。

楽しみになってきたぞ。

夕飯を食べ終え、風呂に入り寛いでいたところに

”コンコン”窓がなった。

珍しいな、大和からなんて。

「何？」

まだ機嫌悪いぞオーラをだしてみた。

「今日、光芳呼んだんだ。」

（光芳？？？あっ山田のことか！）

「ああ、話があるっていうからな。」

だから何だ？

「付き合うのか？」

大和が言った。

（随分と単刀直入だな。どうだろ？上手くいくか？相手は千恵だからなぁ）

「あいつ次第じゃないか？それより、お前知ってたのか？」
「いや、全然分からなかったよ。ってお前あいつ次第って何だよ。」
大和はいつになく真剣な顔をしていた。
「あいつ、はっきりしないんだよ。遠まわしな事しないで”好きだ”っていえばいいのに。」
「それで、お前はどうするんだよ。」
（な・なんでそんなに怒った顔してるんだ？）
「どうするって、そういや来週の花火大会にお前らと千恵誘って行きたいって、言うから取りあえず行ってみないとな。」
「あー。何でそんなとこに俺が行かなきゃいけないんだよ。そんなに行きたきゃ、2人で行けばいいじゃねえか。」
「言ったよ。2人の方が良いって。でもあいつが皆で行きたいって言うんだからしょうがないだろ！」
なんなんだよ大和の奴。やけにムキになってないか？
「お前って結構残酷だな」
小さな声だった。
「残酷って。そんなつもりじゃぁ」
だから、2人の方が良いって言ったって言ったじゃないか。
「だいちっから、お前は・・・」
そう言うと大和は夜空を見上げた。

「お前は？」

「もういいよ。お前の気持ちは分かったから。俺から健太と康太には言っておくよ。」

「何が分かったんだよ。それに健太と康太にはあいつが言うんじゃないか？」

今一どころか今十くらい話が噛みあわないような・・・

も、もしかしてこいつも千恵の事好きなのか？良く考えてみたら、大和と千恵のコンビネーションはバッチリだもんな。特に私をからかう時なんかは。

なるほどねー。今日2つ目のパズルが解けたかも！私って天才かしら。

「大和も大変だな」

ライバル登場ってな。

「一番お前に言われたくないんだけど。」

失礼な奴だ。

「ライバル登場だけど、頑張れ。」

山田にも応援するっぽい事言ったけど。2人とも頑張れってことで。

「頑張っていいのか？」

やけに真顔で言ってきた。

「いいんじゃない？」

「俺、本気だぞ。」

「勝ち目は薄そうだけどね。でもまあ向こうは幼馴染としてのハンデがあるから大和には不利だもんね。」

「ん、んっ？」
大和は首を傾げた。

「ん？って？」

「ちょっと待ておかしくないか？なんで幼馴染が不利なんだ？」

「だって、千恵と山田は幼馴染だって言ってたぞ。お前も知らなかったのか？」

「だーっ」

訳のわからない言葉を言って頭を抱えだした大和。

「ち、違うからそれ。お前の勘違いだから。っていうか冗談だよ。」
大和の乾いた笑いが聞こえた。

「そっかぁ？なんか怪しいけどな。」
何が勘違いなんだ？冗談？？？

「怪しくなんか無いって。それよりか、やっぱ幼馴染って有利なんかなぁ？」

「やっぱ気にしてるんじゃん。極一般的には多いんじゃないの。それに・・・」

「それに？」

「正直いうと、大和はいつも一緒だったから、違う人といるのをみたら少し寂しいかもな。」
こんな事を言うのは癪だけどこれは本音だ。

「それって、友達として？」

「もちろん、と」
言いかけた私の言葉を大和は遮った。

「あー、悪い自分で聞いといてなんだけど、いいから、その先梓が言わなくても。約束しただろ。ずーっと俺たちは仲間だって。」
そういって右手をストレートパンチと突き出した。

「そうだな。仲間だな。」
といって私も大和宛ら右手を突き出し自分の拳と大和の拳を合わせた。

その後、他愛もない会話をして窓を閉めた。
大和との会話は腑に落ちないものだけど、大和に煙にまかれるれるのはいつもの事だしー。
大和、本当は千恵に気があるんじゃないのかな？私に弱みを見せたくなくて誤魔化したのかもしれないな。

ベットに横になって目を瞑った。
その瞬間、昼間山田が引っ付いた時、目があった健太の顔が浮かんだ。

正直忘れていたのだが、フラッシュバックのように浮かぶ健太の顔。

目を見開いて、固まっていたような。
どうして、健太があんな顔をしたのかわからない。
健太にだって、大和にだって抱きついた事はあるんだし。

さっきの山田のように、中学1年の時、3年メインの試合に出させて貰って初めてヒットを打った時だったり、先輩達の試合に初めてリリーフで出た時とか嬉しかった時は思わず抱きついたりしたじゃないか。それと同じだろ、仲間なんだから。

自分でもどうして健太の顔が浮かんだのかは解らなかった。

でもほんの少しだけ、胸がキュンと鳴った。

きっと、康太と似ているからかなぁ。
そんな事を思いながら眠りについた。

なるほどな

珍しく朝から陽がでている。
やっぱりスカッとした天気は気分もいいな。
学校へ行く足取りも軽くもう直ぐ校門というその時。

「梓先輩ーおはようございます。」

可愛い声に振り返ると琴音がいた。

「琴音、おはよう。ってよかその梓先輩っていうの止めろって言っただろ。琴音に言われるとなんかむず痒いって。」
本当に変な感じだ。

「だって、先輩は先輩でしょ。それに先輩人気あるから、前みたいに”さーちゃん”って呼ぶと呼び出し食らっちゃうよ。」
にこっと笑った。

山岸琴音。健太、康太の向かいに住むあいつらの幼馴染だ。
無口でいかついと呼ばれるあいつらに、唯一、健ちゃん、康ちゃんと呼び慕っている子。

そして、あいつらにとっても唯一可愛がる特別な子だ。

私よりも２０ｃｍ近く小さく、髪はふわふわのセミロング。
にこっと笑った顔は天使のようだ。
媚びることもせず誰にでも笑いかける琴音は私も大好きだ。

それにしても呼び出しって？何だ？

「さーちゃんって呼ぶと呼び出し食らうって？」
素朴な疑問だ。
「本当だよ。梓先輩人気あるんだから。表だって言ってると嫌がるだろうから言わないだけで憧れてる子もいて、ファンクラブみたいなもんまであるんだから。」
冗談とも嘘ともとれる話だ。
尤も琴音が嘘をつくとも思わないが。
複雑な心境だ。
「そんな事で琴音がやられたら只じゃおかねえって。それにあの2人も黙ってないだろ。気にしなくていいのに。」
そういうと
「でも私はさーちゃんより梓先輩のが”らしい”と思うけどね。慣れるの直ぐだよ。」
一歩先にでた琴音が振り向きながらそういった。
可愛い。そんな言葉がぴったりだ。
「じゃあ、梓先輩。テスト最終日頑張りましょうね。」
そういって昇降口へと消えていった。
女の子だよなぁ。かといって、琴音は大人しいわけではない。
嫌なものは嫌とはっきり物をいう子だ。
さーちゃんという私の呼び名も彼女が言い出した。
梓ちゃんなんていいにくいから、さーちゃんでいい？と。
外見はいかにも守ってあげたくなるような、何も出来なさそうな感じなのだけれど、騙されてはいけない。

行動派で何でもこなすタイプだったりする。
人は見かけによらないんだよなぁ。

教室に入ると昨日と同様、教科書やノートに噛り付く面々。
今更だよと嘆くのは私くらいかもしれない。
千恵も大和も最後の足掻きに必死なようだった。

特に千恵はいつもだったら私に気がついて手でも振ってくれるのに、
今日はまるで気がつかない様子。

私から
「おはよ」
と声を掛けた。

千恵は少し顔を上げ
「はよ」
と超短縮に応える。

テスト前なのか妙に気が立ってるようだった。

今日は最終日なので2時間で終了だ。
本来なら3時間あり、その後部活解禁となるのだが、今日は先生の講習会だか何だかあるらしく、テスト終了後に帰宅となっていた。

席に座ると大和と目が合った。
昨日の不可思議な会話を思い出し、千恵と大和を交互に見るもこれと言って違うとこもなく、いたって普通だった。
やっぱり気のせいだったか？

そうこうしているうちにテストが始まった。

本当に嫌いな雰囲気だ。
話し声のかわりに、カリカリ鉛筆の走る音。
テスト用紙に一番上に書いてある

「基礎解析」

名前からして意味不明だよ。
ざーっと見てみたけど、自信をもって言える。
2ケタ取れないと。

私の机からは、カリカリという鉛筆の音ではなく、フーというため息しか聞こえなかったと思う。

追試決定。

まあこれは始めっから予定だったし、基礎解析は補習は無く、課題のプリントを夏休みの間に済ませばオッケーだ。
大和にでも手伝ってもらおう。
この手の話は千恵は協力してくれないからなぁ。

まだテストの最中だっていうのに、追試やその先の課題の事を考えている私って。
テスト監督の先生が全然鉛筆の動いていない私のところにやってきて、呆れかえった顔をしていた。

テストが終わるまでの退屈な時間を過ごし、やっとの事で終了。
次の社会で最後だ。
実は社会だけは、ちゃんと授業を聞いている。

小さい頃から大河ドラマを見てきた私にとって日本史は、日本史だ

けは好きだったりする。
鎌倉から江戸にかけての話はどれも面白く、興味をそそられた。
今回もさほどというよりか全然勉強をしなかったけれど、これだけはそこそこの点数が取れるんだよな。

興味のあるものはすんなり頭に入ってくるらしく、武将の名前も年号もばっちり答えられた。
満足満足だ。

2時間のテストも終わりさっき来たところなのにもう下校だ。
「千恵ー一緒に帰ろうぜ。今日うちくるだろ？」
いつもの調子で話しかけたのだが、テストが終わっても千恵の機嫌は直っていなかった。

「あら、今日も山田と帰るんじゃなかったの？」
千恵は冷めた声でそういった。

気にしてるんだ。山田、脈有るじゃん。

「だって、母さんのクッキー食べるんじゃなかったのか？」
そういうと千恵は

「ごめん。気分じゃないんだ。」
と言った。

私は慌てて
「そういえば、昨日山田が一緒に花火大会に行かないか？っていってたぞ」

「ふーん。そうなんだ。良かったじゃない、一緒に行ってくれば。」

私の顔も見ずにそういった。
「だから、千恵と健太と康太とみんなで行こうっていってたから」
私は焦ってシドロモドロに答えた。
「私パス。」
そう言うとカバンを持って帰ろうとした。
だからなんでこうなるんだよ。
私はこういうの一番苦手なのに。
これも山田のせいだ。
こうなったらあいつに言わせないと段々拗れちまう。
「千恵、待ってて頼むから。ここにいてくれ。帰ったら駄目だからな。」
そういうと千恵はしぶしぶ頷いた。
私は急いで山田のいる教室へ行った。
教室を覗くと直ぐそこに健太がいた。
「健太、丁度良いところにいた、山田呼んでくんねえ」
すると健太は
「何でだ。」と。
私は
「用があるからだよ。」
健太はまた

「大事な用なのか？」と
だからそうなんだよ。急いでいる私は軽く健太を睨むと
「もういい、自分で呼ぶから」
と言って教室に足を踏み入れた。
その時、突然健太に腕を掴まれた。
「何するんだよ。山田に用があるって言ってるだろ。」
大きな声をだした。
その私の声に山田が気がついた。
「梓ちゃーん。俺に会いにきてくれたの？」
昨日までは佐藤だったのに、いきなり梓ちゃんかよと思いつつ。
「お前に用があるんだ。一緒きてくれ。」
そういって、健太の手を解き山田を引っ張って廊下に出た。
健太は眉間に皺を寄せていた。
「どうした？」
さっきとは打って変わって真面目な顔で山田が言った。
「どうしたも、こうしたもねえって。千恵が機嫌が悪くて仕方がないんだよ。お前せいだ。何とかしろ。」
軽く睨みながらそういうと
「何とかしろって言われても・・・」
そういって黙り込む山田。

「だーっ。そんな情けない声だすなよ。千恵はまだ教室にいるから一緒に帰って、自分からはっきり言えばいいんだよ。千恵が機嫌が悪いのはお前絡みだ。間違いないから、男らしく行ってこいって。」

そういう私に山田は

「佐藤って、俺より男らしいな。サンキュウー悪かったな」

そういって私の肩をポンと叩くと千恵の元へと走っていった。

ふーっと軽くため息をつくと、

「なるほどな。」と呟く康太がいた。

このままでいられたら

「康太、お前趣味悪いぞ。立ち聞きしてたのかよ。」

「お前なぁ。言っとくけど、この場所に先に居たのは俺。お前らが後から来たんじゃないか。」

私と山田は廊下の角で話をしていた。

その直ぐ曲がったところに康太がいたって事か。

「そっか、悪かったよ。」

「お前が素直なのもちょっと新鮮だな。」

廊下の先を見ると、むっとした千恵を追いかけるようについていく山田の姿が見えた。

一緒に帰るんだな。少し安心した。

これで千恵の機嫌が直るかな。

私は知らず知らずのうちに笑っていたらしい。

「俺は、意味がわかってるから何とも思わないが、他の奴がみたら一人でニヤニヤして怪しい奴だぞ。」

と康太が言った。

「大丈夫だろ、お前がいるんだから。一人じゃないだろ。」

「それもそうだな。それで、今野はそんなに機嫌が悪かったんだ。」

「そうなんだよ。山田のせいで全くこっちはいい迷惑だよ。」

「ふーん。俺と同じだな。」

「康太もか？」

「ああ、全くいい迷惑だよ。俺なんかもうずっとだよ、それに昨日からはもっと酷くてな。只でさえ怖い顔がもっと怖くなってやんの。」

「へぇーそれって健太のことか？」

「それはどうかな？」

そこまで言っといてどうかな？はないだろぉ。
っていうか怖い顔って健太だろうに。
でも私はこんな風に康太と話時間がとても心地良かった。
思えば、千恵も健太も大和もいないで2人で話すのは久し振りだな。
と思った瞬間。

「康太、帰ろうぜ。」
と健太がやってきた。

「おう」
と返事をする康太。

何だよ。私は無視かい！
健太は私と目を合わせなかった。

「健太、何なんだよ。お前最近おかしくないか？」
と言うと

「別に、おかしくなんてー」
と言葉に詰まる健太。
やっぱりおかしいじゃないか？
あの時あの健太の顔をみてからどうも調子が狂うんだよな。
それにさっきの健太も。

だけど私は
「なら、いいけど。」
そんなことしか言えなかった。

「なあ佐藤、今野も山田と帰ったことだし、部活もないんだ。昼飯食ってから、大和も誘ってたまには公園でキャッチボールでもすっか。」

「マジで！いいそれ。しようぜ。」
放課後にキャッチボール！今日は良い日じゃん。
久し振りにいい天気だしな。

「なぁ、山田が今野と帰ったって？」
健太が口を挟んだ。

「あぁ。山田は千恵と話がしたかったんだよ。」
と私が言うと

「だって、お前、昨日、」
健太の口から単語が並んだ。

すると康太が
「佐藤は相談役だったんだと」

「そういうことだ。」
ちょっと偉そうに胸をはった。

そこへ
「全くなぁ、梓を相談役にするなんて、超ー無謀だよなぁ」
私の頭をコツンとはじく。
大和だった。

「でもそのおかげで、山田は千恵と一緒に帰ってるんだ。いい切欠になったじゃねえか。」
フンっと鼻を鳴らし大和の背中を叩いた。

「痛いって、お前の力は半端ないんだから。暴力反対！なっ康太。」
うっ、よりによって康太に振るなよ。
康太を見ると

「でもそれが、佐藤なんだよな」
と言った。

ちょっと嬉しかった。

「何？暴力女って認められたのがそんなに嬉しいのかよ。」
本当に大和は余計な事ばかり言う。
今度は口より先に足が動いた。

綺麗に回し蹴りが決まった。

「認めてもらったからな。」

そう言って康太と健太を見ると何故か赤い顔をしていた。
そして健太が一言
「スカートでそれは止めてくれ」
と。
なんだそんな事。
「だって下に短パン穿いてるぞ。」
今度は康太が
「そういう問題じゃないだろ」
と言った。
「あーぁ私もズボンだったら良かったのに。」
本音を漏らした。
「お前らしいよ。」
康太の言葉に健太と大和は頷いた。
そんな会話をしながらそれぞれ家に向かう。
途中で健太と康太と別れ、大和と2人で帰った。
家は隣なのに2人で帰るのは久し振りだった。
今がチャンスとばかりに昨日の疑問をぶつけてみた。
「なぁ、大和。お前本当は千恵の事好きだったんじゃないのか？」
「どうして、そういう発想になるんだ。」
「だって、昨日の会話の流れからしたらそう思うだろ。本気だぞと

か言ってたじゃないか。」

「お前ねぇ、話の流れからしたら違うだろ。お前の方がよっぽど解らないよ。でもそれはそれで良かったのかもしれないけどな。」

大和はまた意味不明なことをいう。

理解不能だ。

「まぁ、時期がきたら話すから、その時は聞いてくれよな。」

「おぉ。その時期ってのはわからないけどいつでも聞くから。それってお前の失恋話だったりしてな。」

大和の顔を覗きこむと、大和は

ふーっとため息をつき

「決め付けんなって。それより早く昼飯食って公園行こうぜ。」

と笑った。

「そうだな。」

と返事をして少し早足で帰り道を歩く。

隣に並ぶと、今まで気がつかなかったが、いつの間にか大和の背が私と同じ位になっていた。

そういえば、いつも下に合った目線が今は同じ位だった。

こいつにも成長期ってのがきたんだな。

きっとあっという間に見上げるようになるんだろう。

成長期かぁ、そんなの来なければいいのに。

ほんのちょっぴり膨らんだ自分の胸に視線を落とした。

このままがいいのに、身体の成長と共に自分に沸いてくる感情。

本当は女の子だと認めたくない。
男友達のような関係がいつまで続けていけるのだろう。
自分さえ、康太への気持ちを隠せ通せたら。
きっと大丈夫。そう思っていた。
私は自分の事でいっぱいいっぱいで周りがどう思っているかなんて想像すら出来なかった。

「何しけた顔してんだよ。」
また顔にでていたようで、大和に突っ込まれた。

「しけた顔なんてしてないって。それより早く飯食って公園行こうぜ。」
もう家の前だった。

「おう、お前こそ早くしろよな。」

そういって昼飯を食べに帰った。

ずーっとこのままでいられたらいいのに。
本気でそう思った。

キャッチボール

着替えを済ませ家を出るとまだ大和は出てきていなかった。

何が早くしろだ。
自分の方が遅いじゃねえか。
自転車に跨りながら、グローブを嵌めた手に、ボールを投げ入れる。
何度か繰り返すとやっと大和が出てきた。

「遅ぇよ。」

「お前が早すぎなんだよ。」
こいつは一言”悪い”って言えないのか。
全くもって口の減らない奴だ。

2人並んで公園へと向かった。

ここら辺は都会から少し離れた場所にある。
何でも緑地モデル地だったか、近くにはいくつのも公園があったりする。
小さい子供が遊べる遊具や砂場がある公園だったり、バスケットやサッカー、野球などが出来る公園だったり、最近ではボール禁止なんて公園が多い中、恵まれた環境だったりする。
そうそう中にはドッグランなんてのもあって、休日は人がいっぱいだ。

自転車で5分走ると目的の公園に到着した。
まだあいつらは着ていなかった。

始めは、こっちでいいだろ？そういって大和にソフトボールを投げた。

「いいだろ？って始めからそのつもりな癖して。」

2人でキャッチボールを始めた。

「梓って、やる度に球速上がってないか？すっげー手が痛いんですけど。」

大和は大げさに手を振って痛がる真似をした。

「それはそれは、お褒めに預かり嬉しいですわ。」

力いっぱいボールを投げた。

「うおっ。これで、打てる奴いるのが信じられねえよ。」

「だから、打たせないんだって。」

当たり前だろ？誰が打たせるつもりで投げるんだよ。

暫く続けていると

「早かったんだな。」

健太の声に振り向くと、今度は康太が

「お前のその格好に、その球速。後ろからみたらとても女が投げてるとは思えないね。」

確かに私の格好はタブついたTシャツにジーンズ。

髪はショートしかもキャップを被っているからそうみえるのだろう。

さっきは女の子だって認めたくないなんて思ったけど、康太の言葉にはなんだか複雑だ。

自分で男友達を望んでいるというのに。

「そんな事ないぞ」
えっ大和がフォローしてるよ！思ったのも束の間。
「後ろからだけじゃねえ。前から見ても同じだ。」と。
大和に言われると複雑を通り過ごして不愉快になるのはどうしてなんだろう。
それにしても、最近康太、毒吐くよな。

「大和、俺と交代。」
健太が大和からボールを取り上げた。

大和は
「おう。」
と短く返事を返し健太と交代した。

「ソフトボールだからな。」
私の言葉に

「それがしたかったんだよ。」
と言う健太。

肩慣らしから初め、序序にスピードを上げてきた。
いいテンポだ。

そのうちに健太も本気になってきたみたいだ。
私と同じように下投げを始めた。

センスがいいからか、何度か繰り返すうちにいい感じになってきたのだが・・・

どうも健太の視線が痛いのだ。
きっと私の投球フォームを見ているのろうけど、きっとじゃない実際そうなのだが真剣な顔でじっと見据えられるとどうも落ち着かなくなってくる。
きっと最近の健太のせいだ。

何だか私は堪らなくなって

「ちょっと休憩しようぜ。」
といってグローブを外した。

「お前さぁ、一番ノッてた割には休憩いれるの早くねえ？」
相変わらず痛いところをついてくるのは大和だ。

「いいんだよ、まだ時間はあるんだから。久し振りだから肩壊したら嫌なんだよ。」
そういう私に。

そんな軟な身体してないくせにと大和の呟きが聞こえた。

「それにしても、健太は飲み込みが早いよな。」
康太が言うと

「手本がいいからだよ。」
私が突っ込む。

それに対して健太は
「それは言えてるな。」
やけに素直だった。

ちょっと休憩した後立ち上がった。
「次はこっちでいいぞ。」
野球のボールを持って空へと投げた。
また健太とキャッチボールをするのから逃げたかったのかもしれない。

「康太、やろうぜ。」
康太とするのこそ照れもあるのだが、今はその方が良かった。

「お手柔らかに。」
康太はそう言って私と対峙した。

ソフトボールを持った後に野球ボールを持つと感覚が麻痺するようでやけにボールが軽く感じる。
おかげで一球目はスッポ抜けてしまった。
私が放ったボールは大分上の方へ抜けたと思ったのだが、康太は3，4歩後ろへ下がって高く飛び上がりキャッチした。

「かっこいい」

思わず口に出してしまった。

「惚れちゃった？」
と康太が言った。

惚れてるよ。心の中で呟いた。

「おお、今のはグッときたよ。」
私の顔は赤くないだろうか。

一瞬そんな不安が過ぎった。
平常心平常心。

そんな時
「康太ーっ。俺も惚れたー。」
大和が大きな声で叫んだ。

一瞬で緊張が解けた。
私は思いっきり笑った。
大和のお陰で何とか平常心を取り戻せたようだ。
助かったよ大和。

その後何事もなかったようにキャッチボールをした。
途中康太が
「本当に勿体無いな。佐藤が野球部だったら即レギュラーだぜ。大和のサードも危ういかもな。」
と言って、大和に毒づいた。

「ひっでーな。確かに通用すると思うけど、俺かよ〜。」
大和が嘆いた。

キャッチボールを楽しんだ後は、健太が持ってきたバットで軽く打ってみたり、ノックをして守備練習をしてみたり、久し振りにボールを堪能した。

楽しい時間はあっという間に過ぎていく。
一年のうちで一番長く明るい時間も気がつけば夕暮れだった。

「そろそろ帰るか」

康太の一言で帰る事に。

帰り際

「コツも掴んだ事だし、今度の試合は負けないからな。」

健太が真っ直ぐ私の目をみて言い切った。

「望むところだよ。」

健太の言うとおり今度はちょっと危ないかもと思ったのは内緒だ。

「やっと明日から部活解禁だぁ！」

夕暮れを見上げながら、明日も晴れる事を祈りつつ家と向かった。

「今日はご機嫌だな。」

そういう大和も楽しそうだったぞ。

「おぅ、久し振りに思いっきり投げられたからな。」

実際ソフト部でも私とキャッチボールの相手をできるのは千恵とカンナくらいだ。

他の子はいくらソフト部と言っても球が怖いといって相手を出来ないのだ。

ちょっと嘆くとこだ。

だから今日は本当に楽しかった。

「何だか風呂場から、微妙に外れた歌が聞こえてきそうだな。」

と笑いやがった。

「お前、変態か？」

むっとしながら大和を睨むと

「勘弁してくれよ。誰かさんが風呂場の窓をあけながら歌を歌うか

ら聞きたくもないのに聞こえてくるんだよ。」
と言いやがる。

「やっぱり変態だ。」
本当にこいつがカッコイイなんて思う奴がいるなんて考えらんねえって。

「マジ、変態は勘弁してくれ。」
大和は本当に嫌そうな顔をした。

「冗談だよ」
そういうと、本当にホッとしたようで大和は軽くため息をついた。

「じゃあな」

「おう、」

短い挨拶を交わしそれぞれの家へと帰る。

やっと終わったテスト週間。
明日からまた部活付けの日々が始まる。
私には追試なんてのもあるけどそれはそれで置いておこう。

そういえば千恵はどうしたのだろう？
すっかり忘れていた親友の一大事。
友達甲斐のない奴だ、あたしって。

後で電話してみよう。

そう思った瞬間

クーぅっとお腹が鳴った。
今日の夕飯なんだろう？
まずは食べてからだな。
こんな私って・・・本当に友達甲斐のない奴だ。
ごめん千恵、とりあえず食べてから考えるからと
自転車を降りたのだった。

チエ熱

テスト週間も終わり、いつもの日常に戻った。

早い教科はすでに点付けが終わっていて、手元に却ってきたりする。
いつもの事なのだが、点数だけをみたらこれが１００点満点のテストだとは思うまい。
５０点満点だって怪しいところなのだから。

昨日、結局千恵からの電話は無かった。
自分からしようと思ってもいたのだが、何を話せばいいのかも解らず、何も出来なかったんだ。
学校で直接、話しすればいいかなと。
でも、千恵は今日学校に来ていなかった。
珍しいことだった。
元気がとりえな私と千恵はそれこそ皆勤賞の常連だったりする。
よく大和に”何とかは風邪引かない”なんてからかわれるけど・・・
千恵どうしたんだろう。
山田に聞いてみるか。

昼休み、山田の元へやってきた。
もう梅雨明けが近いのだろう、最近までの愚図ついた天気とは違って抜けるような青空の広がる今、教室に残っている男子は少なかった。
それでも教室をくるっと見渡してみる。
居た。それも教室の隅の席で机にうつ伏せている。
暗い奴代表みたいな格好だ。
ちょっと不安になった。

ずかずかと教室に入って行った。
教室に残っている女子が何事かとばかりにこっちを見ているのが解ったが、そんな事も気にせず山田の前の席に座った。

「山田。」
名前を呼ぶと

「佐藤かぁ。」
と気の無い返事をする。

「どうした？あれから。もしかして何も言えなかったなんていうんじゃねえよな。」

「俺は、一俺は言うつもりだったんだ。でも、逃げられた。」

「はぁ？逃げられた？」
思考回路がついていかない。

「詳しく言ってみ。」
私の言葉に仕方なく頭を上げた山田は昨日の様子を話始めた。

千恵を捕まえ、一緒に帰るはずだったが、校門を出たところで千恵の母さんが車で待っていたらしい。何でも、千恵のおばあちゃんが倒れたそうで病院へ行くのだと。
ざわつく気持ちを抑えながら、家に戻り、夜、電話をしたのだけれど、繋がらなかった。と言った。

「何でそれで落ち込んでんだよ。そんなの逃げたんじゃねえだろ。しょうがねぇって。」

「違うんだよ、俺。昇降口に行くまでの間に何回も話があるって言ったんだ。でも千恵は”聞きたくない”の一点張りで。折角、勇気をだしたから千恵の家に着くまでには言おうとしたのに、このザマだよ。おまけに夜も繋がらないし。昨日で今日の分の俺のエネルギー使い果たしちゃったんだ。俺嫌われてるのかもしれない。」

それだけ言うとまた机にうつ伏せた。

私は頑張れよ。との意味を込めて山田の頭をポンポンと軽く叩いた。

どこからか、視線を感じたような気がした。

廊下をみると、間違いない！千恵の後ろ姿だった。

私は急いで立ち上がり

「千恵ーっ」

と叫んで追いかけた。

千恵を捕まえた。

振り向いた千恵は少し悲しそうな顔をしていた。

「梓、山田はいいの？」

千恵は視線を合わすことなく俯いている。

「それより、話があるんだ。」

「あんまり聞きたくないかな。それに今急いでいるんだ。あいつに聞いたかもしれないけど、おばあちゃん倒れちゃって。今はお母さんついてて落ち着いてるんだけど、年も年だから油断が出来ないって言われて・・・従兄弟の兄ちゃんも病院に来てたんだけどどうしても大学に用事があるからって戻ってくるのに着いてきたの。今日は先生に今週いっぱい休むって連絡と体操着とか取りにきただけだ

から。」
千恵は一気にそこまで言うとうっすら涙を浮かべた。
「嫌な事って重なっちゃうのかな。」
とぽつりと呟き涙が零れた。
千恵がおばあちゃんっこだっていうのは良く知っている。でも嫌な事が重なるって？
頭の中で？マークが回っていた。
そこへさっきの私の叫び声で気がついた山田がやって来た。
「お前、どうして泣いてる。」
さっきまでは山田だって泣きそうな顔してたのに。
「もう、あんたには関係ないから。」
そういって千恵は走り出しそうになったその時、山田が千恵の腕を掴んだ。
「俺、話があるって言ったよな。」
意を決したのだろう。普段では聞けない低い声だった。
「だから今は聞きたくないって。」
千恵からまた涙が零れた。
「おばあちゃんの事で大変なこんな時にいうのは間違ってるかもしれないって解ってるけど、俺、どうしようもないんだ。自分勝手で申し訳ないって思うけど。気になって、気になってしょうがないんだよ。」
山田の切羽詰まった声に千恵は顔を上げた。

少しの間を置いて、山田は千恵の腕を掴んだまま

「お前の事が気になるんだよ。健太や大和達と笑ってる顔が、俺の事をそっけなく見る顔が。
そんな風に泣いてるお前の事が気になってしょうがないんだ。」
山田の顔はそれ以上赤くならないんじゃないかって思う程赤くなっていた。

「梓じゃなくて？」

「はぁ？」
何で私なんだよ。

「それはちょっとあるかな。なんせ、お前と話す切欠が欲しくて佐藤に近づくチャンスを狙っていたから。」

そういって頭をポリポリと掻き出した。

「私と話す切欠？」
千恵は山田の顔を見上げた。

「あぁ。」
そこまで言うとまた黙ってしまった。

「だから違うだろ、山田。ここまできたらちゃんと言ってやらないと。千恵にはっきり言ってやれ。」
そこまでいうと私は2人から離れて教室に戻ることにした。

「梓。後で電話するから。」

とういう千恵の声に振り返りもせず手だけを挙げて返事をした。
「よう。」
声だけで解る。この声は康太だ。
「よう。」
私も短くこたえた。
「良かったな。機嫌が直りそうで。」
「そうだな。これでこじれるなんてありえないだろ。」
胸のつかえが下りたようだった。
「いい仕事したんじゃねえの。ちょっと迷惑被ったけど。」
と康太が言った。
「迷惑を被った？」
はぁ？って感じだ。康太も山田に相談でもされてたのだろうか？
「いや、こっちの話。」
康太はニヤリと笑った。
かっこいい。見惚れちゃうって。
「お前なぁ。その顔怖いって。」
口をはさんだのは大和だ。
「失礼な奴だよ、お前は。」
康太は笑っている。

「それにしても大胆だな、あの2人。いくら人が疎らだっていったってここ廊下だぜ。あっという間に広がるよ。」

そうだ。自分達っていうかあの2人の事でいっぱいだったから周りに目がいかなかったけど、見てる奴はみてるからなぁ。私はそんな程度にしか思わなかった。

「今野も山田も結構人気あるんだぜ。何ともなきゃいいけどなぁ。特にあのマネージャー山田に本気だったんじゃねえか？」
大和がいうと

「それをいうなら、誰だっけ？今野の事好きだった奴。あいつも相当しつこそうだけど。」
健太が言った。

私にはどっちの話も？？？だらけだった。

そんな私の顔を見て、梓もたまには女の子の中に入って会話した方がいいんじゃねえ
と2人はまた笑った。

そういうもんなのか？
中学入るとそんなもんなのかもな。

私は自分の事で精一杯なのに。

そして、放課後。
待ちに待った部活の時間だ。

いつものように鍵を開けに部室へと急いだ。

部室までくると、やっぱり健太は既に鍵を開けている。
全くうちの担任ときたら、たまには他のクラスより早く終わらないもんなのだろうか。

「相変わらずだな、お前のとこの担任は。」
健太が鼻で笑いやがった。

「何とかして欲しいよ全く。」

「そういや、山田今日、部活休んだらしいぞ。頭痛いとか言ってたからな。」
健太は面白そうに言った。

「たまにしか、使わない頭使って悩んだから知恵熱なんじゃないか？」
と私が言うといつの間にやら追いついた大和が

「それをいうなら”千恵熱”じゃねぇの」
と言った。

「上手い！座布団3枚やるよ！」
そういって私は今部室から出した、ファーストベース、セカンドベース、サードベースを大和の前に差し出した。
「ついでに運んでくれると嬉しいけど。」

そんな私に大和は
「悪いが、座布団没収してくれ。」
と。

久々に大笑いした。

報告

「梓、どうした？何かいいことでもあったか？」
父さんが私の顔を覗きこんだ。

「あったといえばあったかな？」
そういう私に今度は母さんが

「あら、テストでいい点取れたとか？」
なんていい始めた。

「母さん梓に限ってそれはないだろ。」
父さんの突っ込みが入った。
確かにそうなんだけど。
そんなことを笑っていう両親って。
私が言うのも何だけどそれでいいのだろうか？
まぁ、これで勉強しろだ何だ言われたらそっちの方が嫌なんだけどな。

それにしても千恵から電話まだかな？
そう思って電話をみると通話中のランプが点滅していた。
げっ家で使ってのか。
兄貴だな。
私が電話を見ていたのが解ったのだろう、母さんが

「梓、電話したかったの？全く、幸太郎はいつまで電話しているのやら。かれこれ３０分は話してるじゃないの？」

「３０分？！って事は私がお風呂に入ってる時からじゃない！ちょ

っといってくる。」
そういって兄貴の部屋に向かった。
私は軽くノックをして返事を待たずにドアを開けると、ひょいと振り返った兄貴。

「とうとう梓に見つかったよ。じゃあ代わるから」
そういって子機を渡された。
私は？？？だったが、受話器から聞こえる”梓”との呼び声に反応した。

「千恵！」
軽く兄貴を睨むと、悪い悪いといって部屋から出ていった。
私は子機を持ったまま自分の部屋に入りベットに腰掛けた。

「ごめんね、全然気がつかなかったよ。」
私が言うと

「丁度、お風呂に入っていたみたくて、お兄さんが相手してくれてたんだよ。まさか梓が出てたなんて思わなかったけど。」
と言って笑っていた。
兄貴の野郎！早く代われっつうの。

電話の向こうで一息ついたのがわかった。
「結果からいうと、彼氏ができました。」
千恵は一言そう言った。

「良かったじゃん。いつから好きだった？」
私の問いに

「もう思い出せない位前かな？」

と私の問いに答えた後、

「でもね、半分諦めてたのもあるんだ。ここ何年も話しなかったし、目だって合わなかったからさ。寂しくなるからあんまり見ないようにしてたし。でも、梓じゃないけど無意識に目で追ってることもあって。やっぱり同じ学校だと目に付くよね。」

「そうだったんだ。千恵何にも言わないから解らなかったよ。」

「ごめんね。何だかさ、想いが伝わるわけがないって思ってたから言えなかったんだ。だから、この前、梓とあいつが一緒に帰るって聞いた時、正直、梓に嫉妬したよ。あたっちゃってごめん。今日はこれが一番言いたかった」と千恵は言った。

「本当だよ。千恵、怖かったんだから。どうしようかと思ったって。」

と笑った。

今だから笑えるけどな。

「それと、あいつの背中押してくれたんだって？感謝してるってい ってたよ。」

あの情けない山田の顔を思い出した。

写真に撮っておきたかったと密かに思った。

「感謝の気持ちは”いちごブリック”でいいから伝えといて」

と私がいうと

「やっぱり梓だね」

と言った後

「今度は梓の番だからね。」
といわれたのだけれど。

「私はまだいいかな。この関係が気に入ってるんだ。」
そう言った。
このままの関係でいられるのならば。

「そっかぁ。」
千恵はそういうと、

「明日からまた病院に行かなくちゃだから、また後で電話するね。」
といった。

私は
「おばあちゃん、良くなるといいね。」
と言って電話を切った。

千恵嬉しそうだったなぁ。
これでおばあちゃんもよくなると最高なのにな。
ベットに寝転びながらそう思った。

ふと来週の花火大会はどうなったのだろう？
千恵はそれどこじゃないか。
行けるとしたって山田と上手くいったんだ、2人で行きたいだろうからな。
今年も家族で見に行くんだろうな。

そんな事を考えていたら電話が鳴った。

「もしもし、佐藤ですが。」
「夜分にすみません。山田と申しますが、」
山田か。
「おう、どうした？」
「佐藤か？今日は悪かったな。ってよかありがとな。俺としては急展開だったけどな。」
と山田は言った。
確かにそうだろう。
まずは友達としてやり直してから、その後動こうとしていたのだから。
急展開かぁ。おかげで花火はなくなっちまったけどな。
「良かったじゃん。そうそう、今千恵から電話きたぞ。嬉しそうだったよ。」
そういうと。
「マジで？嬉しそうだったか？俺にはそっけなかったけどな。そっか嬉しそうだったかぁ」
電話の向こうの顔がわかりそうだった。
にやけてるんだろうな。
ってかそれを聞きたかったんじゃないのか？
「だから、千恵にも言ったんだが、報酬としていちごブリックでいいから。」
そう言ったら

「いちごのブリックかよ！そんなんでいいのか？」
なんていいやがった。
昼間のこいつとはえらい違いだよ、全く。

「一個じゃなくて、夏休みに入ったら毎日買ってもらおうか。」
そういってやると。

「毎日は勘弁だよ。せめて1週間位なら・・・」
と。

「冗談だって。1個くれればいいって。どうしても1週間買いたいって言うんなら別だけどな。」

「じゃあ、3つで宜しく。」と山田は言った。

「了解。」
なんて会話してるんだ。
すると山田が

「それでな、花火大会の話なんだが、」
山田が話始めたが私は

「いいって、元々、お前らが話す切欠で誘おうとしたんだから、いけるとしたら2人でいけばいいじゃねえか、初めてのデートになるんじゃねか？」

「それもそうなんだが、実はもう健太と大和には話しちゃったんだよね。あいつら、行くって言ってんだけど、お前どうする？」
大和の奴、私が言った時は2人で行けって言ってた癖に、山田には行くって言ったのかよ。

っていうか、肝心の康太は行かないってか？

「康太は行かないのか？」
素直に聞いてみた。

「あぁ、何か康太はその日、用があるとかでパスって言われたぞ。」

「ふーん。そうなんだ。」
用事か。

「なになに？梓ちゃんは康太がいなくちゃ、行かないのかな？」
こ・こいつ

「お前なぁ、ちょっと調子にのりすぎだよ。そんな事言ってると今日のお前の様子、千恵に話ちゃおうかな」
どうだ！

「悪い、マジそれだけは勘弁してくれ。でもさ、どうだ？暇だったらあいつらと一緒に行ったらどうだ？」
山田は別に私達が花火に行ったって関係ないだろうに。

「そうだな、考えとくよ。」
別に康太が行かないんだったら、なんて思ったのは事実だけど。
大和と健太とかぁ。

その後他愛もない話をして電話を切った。

これでブリック3個ゲットだ。

私はこの時、追試の事をすっかり忘れていた。

その事に気がつくのは次の日だったりする。
部活解禁となった私に追試の嵐が待っていたのだった。

壊滅状態

テストが終わって5日も経つと大体、採点が終わって却ってくるのだけれど。
今回のテスト結果は酷いなんてもんじゃなかった。
案の定、体育と社会以外は殆ど壊滅状態だった。

「どれどれ、って梓お前これ酷すぎだろ。普通とろうと思ったってこんな点取れないぞ。」
大和談。
この会話、テストが却ってくる度にしている。
やっとこ部活が解禁それも梅雨明けになったというのに、既に私の追試スケジュールはいっぱいだった。

「梓、勉強しろとは言わないけど、授業位ちゃんと聞きなさいよね。全くあんた部長でしょ。只でさえ、千恵がいないっていうのにあんたまでいなくてどうすんのよ。」
わざわざ、隣のクラスからカンナがやってきて愚痴りにきた。

「尤もです。返す言葉もございません。」
本当にカンナには頭が上がらない。

「やれやれ」なんて年寄りじみた言葉を吐いてカンナは教室に戻って行った。

「相当怒ってるな、こりゃあ」
隣で大和が笑っている。私にとったら笑い事ではすまされない。
明後日から、毎日のように追試を受けなくてはならなかった。

「そういうあんたはどうなのよ。」
大和に詰め寄るも
「俺はセーフ。1教科も追試はありませんでした。因みに健太も康太もセーフだぞ。あぁ山田は1つ落としたみたいだけどな。あれだろ千恵ショックで落ち込んでた日。相当きてたもんなぁ。」なんて。

がーん皆追試ないってか。
あぁ、どうすっかなぁ。
仕方ない、兄貴に対策練ってもらわないとか。
今度はなんの報酬取られるんだろう。
とんでも無い事を言われそうでちょっと身震いした。

「いいじゃん、幸太郎あんちゃんに見てもらえば。梓とは頭の出来が違うんだからよ。」
面白そうにニヤリと笑った。

だからそう思ったんだって。
それにしても、こいつは私の心でも読めるのだろうか？
たまにこいつが怖くなるよ。
まるで私より私の事をしっていそうな気がして。

「それはそうと、お前今週末どうするんだ？」
大和が聞いてきた。

「今週末って？なんかあったっけ？」
と返す私に

「そういうもんだよな。お前は乗り気じゃないわけだ。」

大和の言葉で思い出した。
「花火大会か。別になあー。だって行くのはお前と健太だろ？」
そう言うと
「お前なぁ、両手に花じゃねえか。なーんてな。まあ俺もそんなに人ごみ好きじゃねえし。家でおとなしくしてるか。」
「そうかぁ？嫌いじゃないぞ。家は家族で行くと思うけど。父さんと一緒なら何でも買ってくれそうだしな。カキ氷にたこ焼きにとうもろこしだろ、それから・・・」
私が話しているのに大和は
「お前らしいよ。あんまり食いすぎるとデブっちまうぞ。」
と笑われた。
大きなお世話だっつうの。
それに、食べるものと同じ位消費してるか問題ないんだよーだ。
私はそう答えず、無言でアッカンベーをした。

「古っ」
大和にまた馬鹿にされた。

その前に追試かぁ。
英語だけは何とかしないと。
夏休みの補習だけは避けたいからな。
一番は自分が部活にでれなくなるのが嫌なのだが、それプラス、カンナにまたお説教されてしまう。
あの冷めた目でみられると恐怖なんだよ。
あー怖っ。
兄貴に頭さげて、過去問と単語のリストアップしてもらわないとだ

な。
今から頭が痛くなってきた。

ふと気になった。
「そういえば、山田が言ってたけど、康太用事があるんだって？お前知ってる？」

大和の視線が一瞬泳いだ。
「さあなっ。たいしたもんでもねえんじゃないの？」
ポーカーフェイスをしているつもりだろうが伊達に長年近くに居るわけではない。

こいつ知ってるな。
直感でそう思った。
隠すような事なんだろうか？
まあここで、しつこく言って突っ込まれても困るし、ここまでで止めておこう。
否、すでに突っ込まれるか？そう思って大和の顔をみるも。

大和は窓の外を見ていた。

助かったかな。単純にそう思った。
気になるかといえば気になる。
でも知ったところで来ないもんは来ないんだからしょうがないよな。

花火大会は家族で行こうそう決めた。

今日のところはまだ追試がない。
だから思いっきり部活が出来るのだが、やっぱり千恵のいない部活は寂しいもんだ。

カンナとキャッチボールをしようと思ったら、顧問の花井先生に
「たまには、やろうぜ。」
とボールを取られた。
「宜しくお願いします。」
そういって久し振りに先生と練習を始めた。
「球伸びてるじゃないか。それにちょっと前まであった癖も抜けてきたんじゃないか？」
嬉しい一言を貰った。
私は褒められて伸びるタイプなのだろうか、今日は絶好調だった。
問題はコントロールなのだが、先生は
「今の投げ方なら、心配いらないぞ。思いっきり放ってもいいぞ。」
と。
まだキャッチボールの最中なのに、先生はキャッチャーよろしくとばかりに座って構え始めた。
ちょっとだけなら、そんな気持ちでセットポジションに入りボールを投げた。
どうしてだろう？
今日は手から、といか指からボールが抜ける感覚がいつもと違った。
適度に引っかかりつつ中指の先から真っ直ぐボールが抜けたのだ。
最近で一番のボールだった。
初めに声をだしたのはカンナだった。
「梓、いつの間にそんなボール投げれるようになった？」

やっぱり、そうだよな。自分でもびっくりなんだから。
そう思って先生を見るとうんうんと頷きながら、ボールを返してきた。

「お前は気負いすぎなんだよ。闇雲にボールを投げても駄目なんだ。きっと梅雨の間のイメトレが効いたんじゃないか？ちゃんとビデオみてたんだろ？」
花井先生は言った。

確かに・・・梅雨の間校庭が使えなくて、体育館で筋トレなどで過ごしていた時。先生から貸してもらったオリンピックのビデオ、壊れるんじゃないかって程見てたのは事実だ。
そういや、この前大和も言ってたっけ。あれ、強ち冗談じゃなかったのかもな。

梅雨明け特有の強い日差しの中、思いっきりソフトボールを楽しんだ。
久し振りにみっちり動かした身体は心地よい疲労感があった。
今日はいつもよりぐっすり眠れそうだ。
そんなことを思いながら家に帰った。

家庭教師

「ただいまー。」
玄関をみると、いくつもの靴が転がっている。
兄貴帰ってるんだ。

キッチンにいる母さんに顔を見せると、手だけ洗って2階へ上がった。
そして、ノックをするも返事を待たずに兄貴の部屋のドアを開けた

頭を下げながら
「兄貴ー頼みがある。」
そういって顔を上げたら、目の前のは兄貴ではない人達が・・・

皆で一斉に笑い出した。

何がおきてるんだぁ。
きょとんとしていた私に後ろからコツンとお盆がぶつかった。
今度こそ兄貴だった。

「お前人の部屋で何笑い取ってんだよ。」

改めて部屋を見ると兄貴の友達が3人いた。
おっ、よく見ると小さい頃から遊んでいた”陸君”がいた。
そういやさっき玄関に靴があったけ、今更ながら思い出した。

「ども」
短く挨拶をした。
陸君以外はまだ肩を揺らしていた。

「よお、梓久し振りだな。しっかしお前変わってないな。そのおっちょこちょいなとこ。」
陸君は白い歯を見せニカッと笑った。
相変わらず胡散臭い顔だこと。
と思っていたら。

「さっすが、幸太郎の妹。こいつの笑顔に赤くもならず、騙されないなんてやるな。」
一緒に来ていた友達に言われた。
騙されるわけないっつうの。

「そうそう梓、幸太郎に頼みがあるんじゃないの？」
陸君に言われた。

「何、頼みって？」
兄貴が変な笑みを浮かべて聞いた。

「後でいいや。」
そういって部屋を出ようとしたら、折角だからと引き止められた。
嫌だと言ったんだが、結局私は、兄貴の部屋にしぶしぶ座った。

「んで？なんだって。」
面白そうな顔して陸君が聞いてくる。
しつこいなとも思ったけど、まあいっかと話をしてしまった。

「なるほどな、で、梓は英語の追試に受かりたいっていうんだな。」
黙って話を聞いていた陸君が言った。

「お前なあ、それは無理ってもんだろ。だって基礎が全くないんだぜ。俺はお手上げだ。」
兄貴の奴、可愛い妹になんて事をいうんだ。
こっちだって無理を承知で頼んでるっていうのに。
兄貴がみてくれないとしたら、補習は決定だって。

そんな私をみてこともあろうか陸君が
「俺がみてやろうか？」
と言った。

それを聞いて反応したのは、大樹という一緒にいた友達だった。
「それがいいんじゃねえの。確かに幸太郎も賢いけど、英語に限っては陸のが上だからな。」と。
思わぬ展開になってきた。
藁にもすがる思いとはこの事だ。
背に腹は変えられないって言うんだっけか？
ありったけの知ってることわざを思い出したりしてみて

「お願いします。」
ペコリと頭を下げた。

すると陸君は
「ただし、俺にも条件つけていい？」

「「条件？！」」
兄貴と声が重なった。

「そりゃあそうだよ。基礎も出来ない子をたった何日かで追試通るようにするなんて、至難の業だぜ。だから、もし通った時は１つ頼みを聞いてもらおうかな。」

意味深な笑いをした。

この際、そんな事は後回しだ。
私は２つ返事で了解した。
兄貴は呆れ顔だ。
そんな顔するんだったら、初めから兄貴がみてくれればいいのに。

「じゃあ、そうと決まれば、早速はじめようか。」
陸君はそういって私の背中を押して兄貴の部屋を出た。
唖然とする兄貴と友達の顔が見えた。

今からですか？と思ったものの、そんな余裕もない私。
言いなりに自分の部屋に戻ると、

「とりあえず、テスト見せてみな。」

私は、カバンから却ってきたテストを陸君に見せた。

陸君は
「はやまったかも」
と小さい声で呟いたが聞かなかったことにしておこう。

こうして、短期間限定の家庭教師が出来たのだった。

早速、机に着かされた。

「なあ、梓。英語の先生って誰だ？夏目？それとも服部？」

「服部。」

陸君は
「なるほどな、俺らの時と同じだ。これなら何とかなるかもだぞ。」
天使の一声が聞こえた。
”何とかなる”いい響きだ。
「っておい、かもって言っただろ。どっちにしろ梓はいっぱい覚えなくちゃならないんだから、覚悟しておけよ。」
そういって頭を小突かれた。
「はい先生。」
そういう私に満足そうに頷いた。
「先ずは、復習だ。取り合えずテストもう一回解いてみろ。」
そうは言うのだが、それが出来ないからこうなった訳で。
テスト用紙を見ながら、途方にくれてしまった。
「梓は何が解らないんだ？」
陸君が言った。
「全部。」
正直に答えた。
「単語は？」
「全く。」
最後の私の言葉を聞いてか陸君は大きなため息をついた。
そして。

「じゃあ、初めはこのテストに出てきた問題文から約すとしますか。
梓、辞書は？」

「無い。」という私に

「無い？」と聞く陸君。

「うん、学校に置いてある。」
そういうと、また頭を小突かれた。

「明日は持ってくる事。いいな。」

もはや、嫌とは言えなかった。
仕方なく頷いた。

陸君は、兄貴の部屋に行き兄貴の辞書を借りてきた。
兄貴の辞書は、使い込んだらしく、一枚一枚のページがハラリと捲れる。
私のお気に入りの漫画本のようだった。

「じゃあ、１０分あげるから、問題文１つ１つ単語を調べて。」
そういって腕時計をみると私のベットに腰掛けた。

始まって1分と経っていないのに、既に頭が痛いような気がするのは気のせいなんだろか。
何だか、後ろから無言のプレッシャーが・・・
私は今まで一番必死で辞書を捲った。

「はい、そこまで。」
どれどれなんて覗き込む陸君。

「まあ、はじめだからな、こんなもんか。」
そう言って、私の書いたノートをチェックした。
その後もひたすら、辞書とにらめっこだ。
休憩も入れず、みっちり1時間机に噛り付いていた。
学校の授業だって1時間もない。
私は産まれて初めてこんな長い時間を机で過ごした。
緊張していたのだろうか、やっと辞書から解放された時、一際大きくお腹が鳴った。
陸君は抑えることもせず、ゲラゲラと笑った。
「じゃあ、一旦ここまでにしよう。飯食っておいで。」
”やったー。”と思ったのだが、今何と言った？一旦っていったか？
もしかしてと陸君を見上げると、私の思ったことが通じたのか
「食事休憩だよ。」
と悪魔の微笑み。
丁度、その時部屋をノックする音が。
ドアを開けると超ご機嫌の母さんがいた。
「陸君、本当にありがとね。まさか梓が家で勉強する姿がみられるなんて！是非夕飯食べて行って。」
と。
ここは遠慮して”帰ります”って言うところだよな。
なんて思ったのに。

「では遠慮なく頂きます。久し振りにおばさんのご飯が食べれるのに、断るわけないじゃないですか、それに今、梓ちゃんノッてる所なんでもうちょっと進めておきたくて。」
と言いやがった！！！

何が梓ちゃんだ。

陸君をみるとしてやったりの笑顔。
あ～今日は疲れてるのに。
脳みそまで筋肉痛になりそうだと思った。

夕飯の後もそれが続いたわけでして、兄貴が顔出してくれたお陰で助かったのだが、奴は

「また明日も来るからな。」
とあの胡散臭い笑顔と共に帰って行った。

今日の夢はアルファベットに押しつぶされそうな気がする。
なんて思ったりもしたのだが、身体も頭もフル回転だった私は夢さえ見ずにぐっすり眠れた。

次の日、起きて仰天した。
朝練ぎりぎりの時間だ。
部室の鍵を持っているのは私だったりする。

兄貴としては、まだ出かけるにはえらく早い時間なのに頼み込んで自転車で送って貰った。
何か言われるかと思ったのだが、兄貴は以外にも何も要求してこなかった。

そっちの方がよっぽど怖い。

だけど、今は朝練の方が重要だ。

昨日のことはさておいて、兄貴の背中にありがとうとお礼を言った。

部室の前に着くと朝練開始時刻3分経過。

仁王立ちしたカンナがいた。

カンナや後輩達に平謝りの1日のスタートだった。

疲労感

今日の朝は散々なスタートだった。
ってより昨日からか？

身体はなんてことないのだが、頭の方がパンク状態だ。
こんなに使ったことないからな。

でも自分でも驚いたことなのだが、昨日の夜、必死で辞書を捲って書いた単語を全部でないにしろ、覚えていた事だった。
勉強すると、少しは違うのかもな。

きっと、兄貴だったら、私が適当に問題見繕ってもらってそれを見て終了、ってのだったからこんな風に辞書を捲ることもなかったと思う。
出来れば、やりたく無いことだから。
だけど兄貴ではない他の誰かに見てもらう訳だから、甘えも通用しないわけで。
やりたくないのは変わらないが、追試が終わるまでの辛抱だと自分に言い聞かせた。

「よう、梓。お前なんだか疲れてるみたいだな。」
大和が寄ってきた。

「もう、頭パンクしそうだ。」

「そういや、昨日お前にしては珍しく、机のスタンド点いてたもんな。どうせ漫画でも読んでたんだろ。」

「驚くなよ。実は昨日勉強してたんだ。」
私がそういうと大和は一歩後ろに仰け反った。
「またまた、他の誰かにありえてもお前だけにはありえないだろ。
テスト中だってやらなかったくせに、解り易い冗談だな。」
と。

返事をするのも面倒で、言ってろって感じで机にうつ伏せた。
今日もあれやるのかぁ。
結構しんどいな。

時間割を見ると次は、服部先生の英語だった。
またかよ。
アルファベットは家だけで十分だっつうの。
教科書を捲る手がいつもにも増して拒否反応起こしてるって。

しかし、今日はなんとなくだけど、本当になんとなくだけど、いつもより英語が耳に入ってきた気がした。
それも、先生の声は途中、昨日の陸君の声に変換されて。
おかしくなったかも。
勉強が解る方がおかしいと思う自分に笑えた。

珍しくきちんとノートもとった。
そうしないと、陸君の呆れた顔が浮かんでくるからだ。

隣の席の大和が不思議そうな顔をしていたのに気がついた。
そんな顔すんなよ、私だって不思議なんだから。

授業が終わると、服部先生が私のところにやってきた。

「初めてみたぞ、佐藤が俺の授業聞いてるの。やっとやる気になったんだな。」
そういって私の頭に手をおいた。

「はぁ。」
何だか気の抜けた返事をしてしまった。

「何が、はぁだ。見直したとこなのに。それより追試の日程決まったぞ。来週の火曜だ。反対の意味でのぶっちぎりのトップなんだ。ごぼう抜き楽しみにしてるからな。」
と豪快に笑って教室から去っていった。

それにしても、反対のぶっちぎりって。
単独ビリってのか。
解っていたけど、単独かぁ。
これは間違っても陸君には言えないな。

そんな英語の次は国語だ。
一番の楽しみな時間。
楽しみって言っても、国語じゃない。
隣のクラスの体育だ。
梅雨も終わって、男子は校庭でサッカーをする。

校庭をみていると、今日は最初っからゲームを始めるようだった。
私の自慢でもある、この２・０の視力。
父さん、母さんありがとう。こんな時は感謝の気持ちでいっぱいだ。

でも千恵に言わすと、テレビのあまり観ないし、細かい字の本も読まない、勉強もしないし、眼を酷使してないんだから、そういうもんなじゃないの、とのこと。

まあいい。
こやって離れたとこらからだってあいつがみれるのだから。
1組対2組かぁ。
康太と健太のチームだ。

康太を見る私の視線の端に向こうからの視線を感じたようなきがした。
ふとみると、健太と目が合ったきがした。
気のせいだよな。

体育のチームはクラス毎にランダムに組まれているせいか、クラス対抗であっても必ずしも康太と健太が戦うって事はなかった。
双子の対決って事で先生も楽しみにしてるみたいだけど、野球と違って、普段の体育ではあいつらが本気をだして戦うところは観られなかったのだが。

どうしてか、今日は違った。
周りのチームメートがひく程、熱くなっているように見えた。
健太の方が誘っているようにも見えたけど。

白熱した試合に夢中になっていた。
試合も終盤に近づいてきたその時

「「あっ」」

康太と山田が接触して、転倒した。

「どうしたんだ。佐藤、藤森。声をあげて。」

思わず声を出してしまったが、そういや確かに私の他にも声を出した奴がいたが藤森だったのか。
そんな事を思って、私は何も言えなかったが藤森は

「開いてる窓から、一瞬大きな蜂が入ってきて佐藤さんの頭に近づいたんです。」
そう言った。
勿論、蜂なんていないわけで。

先生は藤森の話を信じたようで
「佐藤、刺されなかったか？”さとう”だけに甘いものと間違えたのかもな。」
などど古典的なギャグをいってクラスの失笑をさそっていた。

もう一度校庭をみるともう2人は何事もなかったかのように、試合をしていた。
それにしても、藤森は何で？
そう思った瞬間この前言ってた大和と健太の話を思い出した。
山田に本気なバスケ部のマネージャー。

藤森のことだったんだ。

斜め前にある、開いたままの千恵の席。
あれから、連絡ないけどどうしたかな。

藤森のさっきの声は、まだ山田をみてる証拠だ。
いろいろ複雑だな。

ゲームが終わって休憩している山田を見つけ、微妙な気持ちになっ

たのだった。

放課後になった。
珍しく担任の話が早く終わった、重ねて言うが本当に珍しく。
何か用事があるようで、さっさとＨＲを終わらせて教室を出て行った。

早かったといっても、あまり他のクラスと変わらないっていうのが悲しいとこだ。
階段と下りる時に、思い出した。
今日は”辞書持って帰ってこい”って言われたんだっけ、階段ですれ違ったカンナに部室の鍵を預けると、教室へ戻った。

教室には、まだ大和が残っていた。
そして、隣には顔を赤くした同じクラスの本田比奈がいた。

「どうした？忘れ物か？」
大和が言う。

「あぁ、英語の辞書忘れた。」
ロッカーに向かって歩いていると

「お前が、辞書持って帰るって。まさか勉強でもするわけじゃなしに。」

「だから、今朝も言っただろ。その勉強するんだよ。」
と言い放ち、辞書をスポーツバックに詰め込んだ。

「マジかよ。明日雪じゃねえの。」

「馬鹿いってんじゃねえよ。っつうかお前、部活行かないのか？」
教室で突っ立っている大和に言った。

大和は
「あぁ、少ししたら行くよ。健太に会ったら言っといて。」

「了解！じゃあ先行ってるぞ。」
そういって教室をでたものの、本田と一緒にいた大和。
もしかして。
千恵に続いて、大和もか？！
なんて悠長に考えていた。

問題児？

辞書を持ち部室へと戻ると、すでに後輩達が道具を運び出した後だった。

自分のグローブを持ち、グランドへ出ると野球部の方をみた。
ストレッチをしていた健太と目が合った。
気のせいか最近こいつとよく目が合うんだよな。
そうだった。
私は大きな声で

「大和が遅れるってよー」
と叫ぶと

健太は了解の合図とばかり右手を突き上げた。
ちらっと康太を見るもあいつは黙々とストレッチをしていてこちらを振り返りもしなかった。
ちょっとくらい顔向けたっていいのに。

そんなことを思いつつソフト部のグランドまで駆けていく。
みんなはこれからランニングが始まるところだった。

「悪い遅れて、じゃあ始めますか。」
ランニングをしながら、明日から追試が始まる事を思い出してしまった。

「なあ、この中で追試受けるのいる？」
私の問いに誰もが無言だった。

「もしかしてあたしだけ？」
思わず声に出してしまったらしい。

「もしかしなくても、梓だけだって。」
隣を走るカンナに突っ込まれた。
後ろを振り返るも
みゆきも里美も華代も皆、首を縦に振った。

後ろでみゆきが
「ソフトにかける思いをもうちょっと勉強に向けたら、追試なんて受けずに済んだんじゃない？」
と言われた。

「ソフトに関しての思いは、増える事はあっても、減らす事なんか絶対ないからなぁ」
断言できるって。

「まあそれが梓なんだよね。」
今度は里美にそういわれた。

明日からは暫く、皆とアップ出来ないんだ。
2学期は少し頑張って追試の数減らそう。
ソフトの為に。
まあ、限りなく無理に近いかもな。

久し振りに、カンナとキャッチボールをした。

「昨日も思ったけど、梓、最近、球走ってるねぇこの調子なら、新人戦マジいいとこいくんじゃない？」
カンナは言った。

「いいとこって？私負ける気しないんですけど。狙うは優勝だって。」

「梓が言うと、本当にそうなりそうで怖いよ。でも一人で突っ走ったって駄目なんだからね。チームワークも大事なんだよ。解ってんの？」

とカンナに言われた。

カンナには敵わない。

まるで子供のように扱われてる気がするよ。

「勿論、解ってます。」

怒られた子供のように返事をした。

「良かった。」

カンナが小さく息を吐いた。

私って問題児なのか？

小さな疑問が渦巻いた。

今日の練習では、花井先生を相手に、ピッチングの投げ込みをした。

少しづつ慣らしながら、いつもより丁寧に投げた。

「お前にしては、珍しく慎重だな。」

先生が言った。

「ボールの感覚を大事にしてみました。」

折角いい感じだから、この感覚を味わいたいと思った。

「そっか、でもフォームも固まってきたようだからそんなに慎重にならなくても大丈夫じゃないか？この感じならいくら投げても崩れないと思うけどな。」

ちょっと前だったら、ボールが離れる時の手首がばらばらだ、とか足のつま先が定まっていないだの言われていたのに。

そんな花井先生に褒められるとおかしな感じだ。

「はい、じゃあいきます。」

先生の言葉で、少し早めにボールを投げた。

私はエンジンが掛かるのが遅くて、おまけに力んでしまうせいか、練習でも試合でも立ち上がりは酷い事になっていた。

特にコントロールが・・・

でも今日は思いっきり投げたにも関わらず、ボールは先生のミットの真ん中にボスっと納まった。

「よっしゃ！いい感じ」

思わず声にでた。

気がついたら、何十球も試合さながら、本気で投げていた。

たまに大分外れてしまうのもあったが、コントロールも先ず先ずだった。

「やっぱり、こんな風にガンガン突っ走るのが、佐藤らしくていいんじゃないか？」

先生、この前闇雲に突っ走るなって言ってたのに。

また顔に出ていたらしい。

「何だ？何か言いたそうだな。」
眼鏡の奥でキラッと目が光ったような・・・
何でもありません。
そういうしかなかった。

「それより、佐藤。お前テスト凄かったらしいなぁ。俺はお前の体育しか見てないから解らなかったが、職員室でもお前のテスト話題になってたぞ。これが高校だったら、留年だって。もうちょっと頑張れや。」

きつい一言を頂いた。
それにしても、職員室で話題って。
ちょっと後に、学校で私が追試の数が一番多かったと聞かされた。
普段、私のように授業聞かない奴も、テスト勉強はするんだな。
と今更ながら考えてしまった。

楽しい部活の時間の終了。
いつもだったら、お腹が空いて、汗を流しにシャワーを浴びて、と家に帰りたくなるのだが、やっぱり今日もやるんだよね。
いつもより、辞書1つ分重たいバックを掴み家へと向かった。
足取りは重たかった。

玄関について、まるで泥棒の様に、そーっとドアを開けた。
よし、まだ兄貴帰ってないな。
靴を確認して、家に入った。
リビングに着き、ソファーにどかっと座ったら、後ろから母さんが

「あら、梓おかえり気がつかなかったわ。いつもは凄い音だして入ってくるのに。」

なんて。

「ただいま、母さん。お腹空いてるんだけど何かない？」

夕飯までもちそうにないよ。

「そうそう、さっき陸君から電話があってね。途中で眠たくなったら億劫になるから先に用を済ませておいてくださいって言われたわよ。ということで、先にシャワー浴びてらっしゃいね～。」

鼻歌まじりにご機嫌な母さん。

それだけいうとキッチンへと消えていった。

だから、シャワーより何か食べたいっていってるのに。

終わったら、絶対何か食ってやる。

多少不本意ながらも、汗臭いのだからしょうがない、言われるがままシャワーを浴びに行くことにした。

家庭教師2

ふーさっぱりした。
ブルブルっと頭を振って水気を飛ばす。
前にこれを母さんに見られて、犬じゃないんだからと笑われたっけ。
バスタオルを巻いて、頭をタオルでガシガシっと拭いた。

とりあえず服着ないとか。
タオルを巻いたままクローゼットの中を見渡す。
手に取ったのは膝丈のジーンズに半そでのTシャツ。
いつもの格好だ。

次は腹ごしらえだな。
タオルを持って階段を下りようとしたら兄貴の部屋のドアが開いた。

「さぁ始めるか！」
陸君が立っていた。

何で～。

何でもういるんだ？さっきまではいなかったのに。
ドアの隙間からちらりと兄貴の顔が見えた。

「どっち向いてんだよ。お前はこっち。」
そういって陸君は私の頭に手を置き、ぐるっと私の部屋に方向転換させられた。

「ちょい待って、お腹空いて倒れそうだから、何か食べ物食べてからでも・・・」

と言ってみるも、陸君の顔を見てフェードアウトしていく私の声。

すると兄貴が

「まあ陸、只でさえ、頭の回らないこいつの事だ。ちょっとブドウ糖足してやった方が、いいんじゃねえの？」

ブドウ糖？何のこっちゃ解らなかったが、助け船をだしてくれたのは確かだ。

ありがと、兄貴と思ったものの。

「ブドウ糖ね。考えとくよ。」

そう言って、私を部屋に押し込み、ドアをパタンと閉めた。

小さい声で

”シスコンが”

という声が聞こえた。

兄貴がシスコン？！

そう思った私の顔をみて

「聞いたぞ、この朝の忙しい時間にお前だけを自転車で学校まで送って、家に引き返したんだって？これをシスコンといわず何というんだ。」

半ば呆れ顔で陸君はそう言った。

確かに、送ってもらったけど、だからってシスコンはないだろ。

普段の兄貴見てたってそんなことは微塵もないわけで。

「ほれ、いいからお前は勉強だ。今日は辞書持ってきたんだろうな。」

意地の悪い笑顔だ。

「持ってきました。はいっ。」
スポーツバックから英語の辞書を取り出した。
私の辞書は新品のようで、兄貴のそれとは全く違いページを捲っても何枚もくっついてくるような代物だ。
陸君は私から辞書を取り上げると、ペラペラーっと辞書を捲った。
最後のページの方で一旦手が止まり
「梓、誰かに辞書貸した事あるか？」
と。突然何を言ってるんだこの人は。
とり合えず
「貸した。」
と答えた。
「なるほどね。」
と呟くと
「じゃあ、昨日の続きから。１０分でここまでやって大丈夫だったら、間食許してやるよ。」
と言った。
これが、巷でいう”俺様”かもと密かに思った。
食べ物でつられる私って、思いつつ昨日の成果もあるのか私にしてはもの凄くスムーズに行ったのだけれど、陸君の出した答えは”不可”だった。
あと１０分とまた区切られ、辞書に格闘中。

兄貴の辞書がいかに引き易いかが一番の発見だった。
やっとこＯＫを貰い束の間の休息が。
母さんからどら焼きを２つ貰い
「陸君にもあげてね。」
と言われたけど私は２階へ持っていかず、１階のリビングで２つ食べてしまった。
ささやかな反抗ってやつだ。
何となく気も晴れ、また戦場へ向かう。
自分の部屋に行くのがこんなに苦痛になるとは２日前までは思いもしなかった。
大きなため息をつき部屋のドアを開けるも、そこに陸君はいなかった。
仕方なしに机に向かい、厭味を言われる前に続きをしようと思ったのだが辞書が無かった。
まあいっか。
私はいつの間にか机に伏せていたようで、
”ごつんっ”
と後頭部に衝撃が。
「痛ってー、何すんだよ。」
振り向くと辞書を片手に陸君が立っていた。
「お前にそんな余裕はないだろ。」

と。

「しようと思ったけど、辞書なかったし。」
そこまで言うと

「梓ぁ。辞書が無くたって昨日の復習だって何だって出来るだろっ」
と厳しいお言葉が。

どうもこの人には敵わない。
まるでカンナのようだと思った。

この後、昨日の復習も兼ねて単語の発音をした。

陸君の発音は先生よりも綺麗で、同じ日本人なのかよ？と疑う程だった。
（ちょっと大げさかぁ）

そんな陸君に
「はい、次言って。」
と言われても・・・

思いっきり日本人丸出しの発音しか出せない私。
しかも合ってるかさえ解らないときもんだ。

さすがにこれは駄目だと思ったようで、そうそうに発音の発声は切り上げ、発音記号による同音の発音の暗記に切り替わった。
ひたすら、同じ発音の単語を覚えると言った勉強は、さっき中途半端に眠ってしまった私の睡魔を呼び起こすのに十分だった。

コンコン

と窓がなった、大和だ。

立ち上がろうとした私の頭を陸君は押さえつけ、窓を開けた。

「よう！」

と言ったまま陸君をみて大和は固まってしまったようだ。

そんな大和をみて陸君はあの胡散臭い笑顔で

「何かな？大事な用じゃなかったら、今梓は勉強をしているところなので、邪魔しないでもらえるかな？」

と。

大和はぎこちなく

「解りました。」

と言うと私の顔をちらりと見て窓を閉めた。

外の空気を吸ったせいか、少しだけ眠気が遠のいた。

「ちょっといいか？」

このタイミングで兄貴が顔をだした。

「何だ？」

陸君が返事をすると

「母さんが夕飯ってだとよ。」
兄貴の言葉を聞いて陸君はやっと教科書を閉じた。
「今日は頑張っちゃったわよ。」
母さんはにっこり。
見ると今日はすき焼きだった。
最近すき焼きなんてやった事あったか？
「さあ、陸君も沢山食べてね。」
母さんは今日も超ご機嫌だった。
こいつって遠慮ってもんを知らないのだろうか？
大好物の肉がどんどん減っていく。
家の家族は平均より飛びぬけて背が大きい。
兄貴と父さんは勿論な事母さんも例外ではなかった。
だからなのか解らないが家族全員人の家の倍の量じゃないかって程食べる。
本音を言うと学校の給食美味しくって大好きなのだが、いつも大量に食べているせいか食べ終わっても満腹にならないところが欠点だったりするんだよな。
まあお替りはするけど。
そんなこんなで、すき焼きも戦争のようだった。
あれほどあった肉ももう残りわずかで。
母さんがぽつりと
「お兄ちゃんが双子じゃなくて助かったわ」

なんて小さい声で呟いたのが聞こえた。
何だかおかしかった。

食事が終わると、自分部屋に強制送還だ。
食後のコーヒーさえ飲ませて貰えなかった。

部屋へ着くと
「そういえば、追試いつになった？」
と聞かれた。

「火曜になった」
とこたえると。

「じゃあ、土日も1日中ゆっくりできるな。」
と悪魔の囁きが聞こえた。

「えーっ土日も？」
土日までやるなんて考えてもなかったぞ。

「当たり前だ。土日にやらなきゃ無理だろ。追試が金曜にならなかったのが助かった位だよ。」
と言われてしまった。

どっちにしろ無理なんじゃないだろうか。
だとしたらやらない方が・・・
そう思ったのがバレテしまったのか

「俺が、やると言ったらやるんだよ。おばさんに約束しちまったからな。」

とあの嫌ーな笑顔だ。

「でも土曜の午前中はパスしていいだろ？部活があるんだ。」
本当はいいだろなんて思ってもいない。駄目だと言われてもぶっちぎって行くつもりだった。

「部活ねぇ。それは今日、明日のお前次第だな。」
いつになく優しい顔がちょっと怖かった。

それから、ひたすら単語の暗記が始まった。
私のノートもアルファベットで埋め尽くされていった。
これだけやると、覚えようとしなくても、勝手に頭に入るらしくテストに出た長文や問題文はようやく訳せるようになってきた。
約すというのは言いすぎか、丸暗記ってのだからな。

「いい感じじゃん。そのまま続けて。」
そうは言ったもののもう１０時になっていた。

それに気がついた陸君がじゃあ今日はこれまでと言った。
長かった。長すぎだぞ。

それにしても、こいつは暇人だ。
そうとしか思えない。
そう思った。

千恵はモテモテ？！

何だろう。
やっぱり頭使うと体まで疲れるのだろうか。
こんなのだったら3倍動いた方がよっぽどいいのに。

重たい体を引き上げて目覚ましを止めた。

よし、今日は間に合いそうだぞ。

私は朝練の為いつもの時刻に支度を始めた。
昨日のこともあったので、念のためカンナに部室の鍵を預けたのだけど、また遅れてカンナに怒られるのも勘弁だ。

それより、昨日の陸君の
”シスコン”発言も気になったし、これ以上兄貴にも迷惑掛けられないからな。

おまけに今日から追試もあって只でさえ放課後の練習が減ってしまう。
朝練位は出ないとストレス倍増だ。

着替えを済ませると、いつものように立ちながらトーストをかじって、母さんに怒られて。

学校に着いたのは部活はじまりの5分前。
いい感じだ。

部室にカバンを置いてグローブを嵌める。

後輩達に挨拶をして、グランドに出ようとしたら大和に声掛けられた。

「おっす梓。今日は怒られなそうだな！」
いつもの事ながら、朝から一言多いんだよ。

「おっす、大和。」
大和に挨拶しながらも、もう目は康太を追っている。
早いなあいつら、もうアップしてるよ。
康太をみれば、健太も目に入る。
でも最近は健太も一緒に目に映ることが増えたような。
やっぱり、いつでも一緒に行動するからな。

「じゃあ、」
そういって今度こそグランドに駆け出した。

「今日はちゃんと来れたんだ。」
にやっとカンナが笑った。
ここにもいたよ、一言多いのが。

「おあいにく様、昨日だけです。」
憤慨だ。とばかりに軽く睨んでみた。
でもそれ以上は怖くて出来なかったけど。

やっぱいいよな。
朝からソフトできるなんて。
今日は天気も最高だ。
それなのに、放課後は・・・
毎日1教科づつ、それも5日連続だ。

それでもって、追試が終わったころあっという間に夏休みだもんな。
そういえば、昨日も千恵から電話は掛かってこなかった。
おばあちゃん大変なのかな。
山田には電話着てるのだろうか。
もしそうだとしたら。
山田に軽く嫉妬をしてしまいそうだ。

朝の楽しい時間は直ぐに過ぎてしまう。
キャッチボールの後、トスをして、軽くフリーをした。
ふと野球部をみると上がりのキャッチボールをしていた。
そろそろこっちも終わりにしないとか。
超名残惜しいがキャッチボールで朝練をしめた。
部室の鍵は当分カンナ持ちってことに。
教室へ戻る時、野球部連中と一緒になった。

「「お疲れ」」

そういって階段を昇っていると
「お前本当に勉強してたんだな。」
と大和に言われた。

「えーっ。それはありえないでしょ。」
大声をあげたのは、ソフト部の面々。

「俺が一番驚いたさ。」
そういう大和に里美が

「机で勉強するふりしてたんじゃないの。」
といって、みんなで笑い出した。
私だってそっちの方がよっぽどいいって、と自分で突っ込みたいほどだ。

「それがさぁ、昨日こいつの窓を叩いたら、超イケメンの男が出てきて”今、梓は勉強してるので邪魔しないで下さい”なんて言われてびびったのなんのって。」
大和の言葉に反応したのはカンナ達ソフト部。

「何、何。イケメンだって！梓いつの間に家庭教師なんて雇ってるのよ。今度紹介して！」
イケメンってあの腹黒おとこをね。

「イケメンかどうかは解らないけど、超ー性格最悪だぞ。頼んだのは頼んだけど、あれは雇ってるのかなぁ」

そういえば、あの暇人にいくら払ってるのだろう？
短期とはいえ、毎日うちに来て私の面倒みて。
時給に換算すると。
まあうちの財政じゃあ１０００円がいいとこかなぁ。

後ろでガヤガヤ言っている奴らを尻目に階段を駆け上がった。

「なぁ。」
健太の声に振り向くと、その先に山田の顔が見えた。

「健太、悪い後でな。」
そう言って山田に駆け寄った。

「おっす、あれから千恵連絡あったか？」
山田の顔を見ると言わずもがな。
「お前のとこも連絡なしかぁ」
「実は俺も今日お前に聞こうと思ってたんだ。」
落胆した顔の山田。
「明日だもんな。」
「あぁ、でも今年は千恵の家あんなだし、浮かれてる場合じゃないってのは解っているんだけど。声ぐらいは聞きたいかな。きっとこんなことを思うのは俺だけなんだろうけどな。」
少しだけ口角を上げた笑いはそれはそれは哀愁漂うもので。
「そのうち連絡くるって。」
自分だって落ち込んでたのに山田を励ましている私って。
案外私に連絡あるかも？って私に嫉妬してたりして。
山田も可哀相なやつかもなんて一人怪しく笑ってしまった。

千恵登場！

5時間目があと少しで終わるという頃

遠慮がちに開かれるドア。

「遅れました、すみません。」

そう言って何事もなかったかのように席に着く千恵。

先生も知っていたのか

「はい」と一言。

気にもせずに授業を進めた。

千恵ーっ。

大きな声で叫びたくなるもここは我慢だ。

振り返った千恵が私の顔を見て

ご・め・ん

と言ったのが解った。

私は少しだけ頬を膨らませ一瞬睨んで見せた後、精一杯の笑顔で深く頷いた。

心配したんだぞ、の意味を込めて。

千恵の顔を見てもやつれた様子もないし、きっとおばあちゃんも大丈夫だったのだろうと勝手に推測してみる。

もう少しで授業も終わりだから、聞かせてもらいましょ。

なーんて思っていたのに

授業が終わると千恵はそこにいなかった。
先生のところにでもいってるのか！とまた勝手に推測し、
そうだ！早速山田に知らせてやろうと廊下に出ると。
仲良さそうに2人で話す姿。
千恵。
親友より彼なのかよ。
私の方が付き合い長いのに・・・
???短いのか？
まあどっちにしろ嫉妬するのは私の方だった。
仕方なく自分の席に戻っていると、少しして千恵が前に座った。
「ごめんね、連絡しなくて。いろいろ揉めててどう転ぶか解らなかったんだよ。」
揉めてる？
どう転ぶか？
もしかして、引っ越しとかか？
慌てて顔を上げ千恵の顔を見た。
千恵はにっこり笑って私の思っていることが解ったのだろう。
「おばあちゃんも大丈夫、退院したんだよ。ただね、一人暮らしはまだ駄目って親戚一同反対で。お母さんが残る事になったんだ。とりあえず私は1学期が終わるまで従兄弟の家に居候になりました。」
「そっかぁ。おばあちゃん良かったな。それで従兄弟の家かぁ一緒

に帰れなくなるな。」
ちょっと寂しかった。

「うん、さっき山田にも話してきた。」
少し顔を赤らめた千恵。

「うん、さっき見た。」
私が言うと

「だったら、声かけてくれれば良かったのにー」
なんていう千恵。

誰があそこに入れるかっての！
そんな図々しいのは大和くらいなもんだ。
ちょっとムッとした。

千恵はそんな私に気づきもせず、明日のことを話していた。

そう明日は花火大会の日だった。

私は、その前に今日の追試だ。
何となくだけど、やらなきゃかなと思い、テストを見直してみたりした。
公式だけはなんとなくだけど覚えた気がする。
今までだったら何もやらなかったんだから私にしては頑張った方かも。
陸君の怖い顔が浮かんできそうだったから。
英語じゃないんだからそんなことないって思うけど。

あーこんな事より部活してーぇ。

ちょっと憂鬱な気分になった。

追試！

追試のことが頭にあったせいかあっという間に６時間目も終了。
クラスメートはそれぞれカバンに教科書を詰め教室を出て行く。

千恵もその一人

「待ってるからねー」
なんて言って出て行った。

「まあ精々頑張れや」
馬鹿にした笑いと共に去って行こうとするのは大和。

「うるせえ」
とばかりに尻を蹴っ飛ばしてやった。

「まじ、痛いから」
本当に痛かったのだろう、うっすら涙を溜めて尻を擦って教室を出て行った。

佐藤さんが羨ましいー

ん？私が羨ましい？！後ろの方から声が聞こえた。
振り返るとばっちり本田と目が合った。

慌てて目をそらす本田。
周りにいた子達がとってつけたように違う話題を振っていた。

追試のないあんた達の方がよっぽど羨ましいって。

何だか感じ悪と思いながらも、身体を前に向き直す。
そして、一応教科書を開いてみた。

早く終わりにしたいもんだ。
校庭では部活が始まったのだろう、大きな声が聞こえてくる。

男子の声に混じって、一際大きな甲高い声。
カンナだ。

くっそー。
この暑い日、教室の窓も全開で聞きたくもないのに声が聞こえてくる。
よーく耳をすませば康太の声も、健太の声も。

まだ先生も来ていなかったので、思わず教室の窓から顔を出した。
一目で解る、あいつ。
キャッチボールをしていた。
なんで、背中向けてんだよ。
健太と交代してくれればいいのに。

健太の顔はよく見えるのに、康太は背中しか見えなかった。

顔が似てるから、見てるだけなら健太だっていいじゃん。

いつか千恵がこんな事言ってたけど。
それ違うから。
誰だってそうだろ？

不思議とこうやって離れてみているにも関わらず、どうしてだか健太がこっちを見てるように見えるんだよなぁ。

もしかしたら、あいつも目が良いのかも。
追試で一人教室にいる私を笑っていたりして。
もしそうだったら、嫌な奴だよな。
その時
「佐藤、誰みてるんだ？」
そこにいたのは花井先生だった。
「もしかして、先生が試験監督？」
だとしたら、教えてくれたりする？ちょっとにやっと笑ってしまった。
「おう、もしかしなくても俺だ。それにしてもなんだその顔は俺は監視に来たんだからな。答え教えるわけないだろ全く、知ってるか？この学年でこの教科追試受けるのお前だけだって。俺だってこんなとこいたくないんだよ。とっとと終わらせて部活行くぞ。今日のお前はスペシャルメニュー用意してやるから覚悟しとけよ。」
そういってにやっと笑った先生。
私と同じだから、その顔。
先生の
「はじめ！」
という声で始まった追試。
確かに本番のテストよりかは解ったが、半分も埋めないうちにもうギブアーップ。
先生の顔を見ると口を大きく開けて固まった。

「出来ないって聞いてはいたけど、これ程とはお前は大物だよ。」
「先生、私これ以上やっても解らないから終わりにしよう」
なんて言ってしまった。
花井先生は呆れ顔で、お前が言うのなら仕方ないか。
そういって追試はあっという間に終了した。
先生と廊下を歩いていたら、隣のクラスの担任の磯部先生が
「もう終わったんですか？まさか花井先生教えたりしてないでしょうね？」
なんて意地の悪い笑いをした。
「ちょっと先生、それは花井先生に失礼でしょう。」
ムッとした顔で先生に迫った。
磯部先生は
「冗談に決まってるじゃないですか？」
と引きつった顔。
そこで花井先生が
「これをみれば明らかでしょ。」
と今やったばかりの私の答案用紙をひらひらさせた。
近くで見るそれは”すかすかで”誰の目にもカンニングの疑いようがない答案用紙だった。
「お前ここまできたら、凄いぞ。悪ふざけして悪かったな。そして花井先生も。」

深くお辞儀をした先生。

「いやいや、監視役をすると聞いた時点で予測できるはんちゅうでしたから。」

花井先生は豪快に笑った。

つられて私も笑ってしまう。

「お前は全くもう、普通はここで恥ずかしいって思うとこだぞ！」

そういって私の頭をゴリゴリ押した。

ちょっと痛かった。

スペシャルメニュー！

やっと、終わった。
まず1教科、終了。

「お待たせー」
グラウンドに行くともうみんなはバッティング練習に入っていた。

「お疲れ！」
千恵がひょいっとボールを投げてきた。

千恵がいるよ～

「しょうがないから私が相手してあげるよ。」
そういってキャッチボールの相手をしてくれた。

先生もカンナもいいけど、やっぱ千恵なんだよねぇ。
ウキウキ気分でボールを投げた。

キャッチボールを終えると先生がやってきた。

「さっきはありがとうございました。」
そういうと

「全くだよ、お前は。」
と呆れ顔の先生。

何々？と集まってきたみんなに先生は
「お前達の思ってる通りだよ。後でてるプリント手伝わなくてもい

いからな。」
なんて余計な事を。
後輩達まで笑っていた。

折角、部活やり始めていい気分だったのに台無しだよ。

「それより、お前は別メニューって言ったよな。」
先生はしてやったりの顔。

「はい。」
返事をすると

足を中心の強化メニューが待っていた。
走りこみ、スクワット、モモ上げーっ、その他いろいろ。
ってボールもバットも使わないの？

最悪だ。

私は投げ込みとか素振りとかそんなことを考えていたのに全く違うものだった。
つまらない。
つまらない。

すると
「嫌なのか？」
と花井先生。

勿論答えは
「はい」
と言いたいところなのだが・・・

「やります。」
そう言ってしまう自分が恨めしい。
じゃあ早速行って来い！
とお達しを受けてしまった。

「梓、一人じゃ嫌なのか？」

「そう言う訳ではないのですが。」
と言いつつ語尾がフェードアウトしていく。

部活のみんなを見渡すと誰も視線を合わせなかった。
千恵は笑ってるし、カンナなんてベロ出してやがる。

只でさえボールに触れる時間が少ないっていうのに、誰も私に同情してくれないってか！

「行ってきます。」
と学校の周りを走ることに。

これ何週走るんだ？
元々身体を動かす事は好きなので走る事は全然苦にはならないのだが、グラウンドではボールを打つ音が響いている。
やっぱりあっちの方が楽しそうなんですけど。

ちょっとむっとしながらも5週走った。
確か、学校の外周は８００メートルだったような。
４kか、いいとこだな。

「戻りました！」
そういうと花井先生は顔だけこちらに向けて、
「じゃあ後はさっき言ったメニューを端っこでして来い」
そういって再びノックを始めた。
端っこって…酷すぎじゃん。
そうは思いつつも反論することも出来ず、黙々とメニューをこなしていく。
お陰で太ももがつりそうだ。
明日の朝起き上がれるか心配になってきた。
今日だけってことはないだろうからなぁ。
いつまで続けるか解らないこのメニュー、ちょっと恐怖だ。
ブルブルと頭を震わせて雑念を払った。
集中集中。

すると、陸上部の顧問、山形先生が話し掛けてきた。
「よう、佐藤。陸上部に入る気になったか？」
そう私は以前からこの山形先生に陸上部にも誘われていた、１００ｍも幅跳びも私の方が成績が良かったから。
体育祭でのリレーで陸上部のスプリンターを追い越してしまったから。
プライドもあるのかなぁ。
その時はそんなことを思っていたのだけれど、どうやら違ったらしい。
本気で私が記録を狙えると思っていると花井先生から聞いたことがあった。
私だけでなく花井先生にもアプローチをしていたらしい。

大きなお世話だっつうの。

「全くその気はありませんが」

疲れが溜まってきてろくな返事も出来ない。

山形先生が去った後も一人練習を黙々とこなし、やっと終わった頃にはソフト部の皆も道具を片付けているところだった。

結局バットも触らせてもらえなかった。

ちょっと恨みがこもった目で花井先生をみると

「いいねぇその目。試合で欲しいもんだよ」

と一蹴されてしまった。おまけに

「バットを触りたいのだったら、明日からはそのメニューをもっと早く終わらせればいいことだ。」

と高笑いを始める始末。

鬼だ。

ちょっとしたいじめじゃないかと思うのは私だけなんだろうか？

挨拶だけはみんなと一緒にさせてもらったのだけれど、どうも納得がいかない。

しぶしぶグローブを抱えて部室へ戻ってきた。

「「お疲れ」」

みんなが私に同情の目を向けた。

そんな顔するんだったら一人位付き合ってくれてもいいものだけど……

そそくさと帰り支度を始めて帰ってしまった。
私はいつものように
「千恵ー帰ろうぜ」
というと

「ごめん。今日から帰り迎えなんだ」
と千恵が言った。

そうだった、千恵は従兄弟の家から通うのだっけ。
忘れていたよ。
疲労が溜まった体に頭もついていかなかったらしい。
千恵は

「従兄弟が大学帰りに迎いにくるからそれまで少し話をしない？」
と誘ってきた。

「おう」
私はそう返事をすると、カンナに部室の鍵を預けたのを確認して、
部室を出た。
そして校門の前のガードレールに腰掛て一息ついた。

「大変そうだったね。」
人事だと思って、千恵は私の方を向いてクスクスと笑い出す。

「そうだったじゃなくて、大変だよ、全く。」
既に張り出した太ももをさすりながらあの先生の顔を思い出した。

「梓ー私先生から聞いたんだけどね」
と千恵は話出した。

「花井先生、すっごく梓に期待しているみたくてあっちこっちのソフトしてる人にピッチングについて聞いて回ってるんだって。」
一回そこで区切り、私の顔を見つめる。

「ふーん」
さもあんまり興味がありませんとばかりに返事をした。

「またまた強がっちゃって。それでね、ピッチングには腕の筋肉より足、それも太ももの内側の筋肉が重要だっていう結論に達したらしいよ。ボールが手から離れる瞬間の瞬発力っていうの？あれが重要なんだってさ。梓ならきっとどこまでもいけるって思ってるんじゃないのかな？」

確かに、今日のメニューは足中心だったけど、陸上部より厳しかったんじゃないだろうか？初日から飛ばしすぎじゃない？
心の中で悪態をつく。

そんな私の顔を見越して
「多分新人戦だって、狙ってるんじゃないのかな？それまでに梓が仕上げてくるって。だからのんびりしてる間場合じゃないのかもね。梓解らなかっただろうけど、私達だって今日の練習いつもの3割増しだったんだから、私は腕がパンパンだよ。」
そういって私の前に腕を差し出した。

そうだったんだ、そういやあんまりムカついてソフトの練習してるとこ見ないようにしていたからな。

「頑張ろうね」
丁度そう千恵が言った時に、校門から少し離れた場所に青いクーペ

が止まった。

「あっ暁兄ちゃんだ。じゃぁまたね」
と千恵は駆けていった。

「またなぁ」
と手を振り、ガードレールから腰を上げる。

「うおっ」
太ももが……

家まで歩くの一苦労だよ。
私も乗せていって欲しかった。
本気でそう思ったのだった。

毒気

やっとの思いで家まで辿り着いた。
本当に辿り着いたって表現がぴったりな位私の足はパンパンだ。

こんな日に限って大和にも会わなかったしな。
そういや、今日は野球部やけに遅かったな。
私達が帰る頃でもまだ練習してたからなぁ。

今日は母さんに言われるまでもなく、自分からお風呂に入った。
本当は寝る前の方がいいんだろうけど、取り合えず汗を流してしっかり湯船でマッサージしない事には明日の朝どうなることやら。

いつもより長めの湯につかり、悲鳴をあげる足を丹念にマッサージした。
湯船を出る頃にはどっと疲れが押し寄せてお腹も空き具合も最高潮で。

「ねえ母さん、今日は先になんか口に入れてもいいかな？」
服を着て一番にキッチンにいる母さんに話かけた。

「今日はまだ何にも出来てないからねぇ、あっご飯ならあるからおにぎりでも作ったら？」

「それがいいや。」
陸君が来る前にと、握る時間も惜しくて、どんぶりにご飯をいれふりかけをかけて食いついた。勿論母さんに背を向けて。
見られた日には取り上げられそうだったから。

一気にかきいれ小さな声でご馳走さまといい部屋に戻った。
兄貴も陸君もまだだった。
教科書を開かなくちゃと思ったのだけど、お腹もいっぱいになった
私はいつの間にか瞼が閉じていたようで……

「ごつんっ」
と頭に衝撃がはしった。

「痛ってー」
一気に目が覚めた。
覚めた?!私寝ちゃったんだ。
今更ながらに気づいてしまった。
時計を見るともう8時だった。

私の隣には顔を顰めた陸君が立っていた。

「寝すぎ。」
そういってもう一度私の頭を小突いた。

今日は全面的に私が悪いよなぁ。
「ごめんなさい」
素直に謝ってみた。
何か言われるかと思ったけれど陸君は何も言わず、静かに教科書を
開いただけだった。

思わず構えた私は拍子抜けだった。
その後も淡々と進み、

「今日はこれまでにしようと。」
といつもより早くに勉強が終わった。

「お前さぁ、俺の事呼ばないのな。」
と突然言われた。

そう言われればそうだった。
小さい頃は
「りく君」とは舌っ足らずの私には呼びづらくて、縮めて

「りっくん」
と呼んでいた。
流石にこの年じゃ”りっくん”はないだろう。さほど会ってもいなかったのだから。

私が考え込んでいると

「まあいいや。それにお前疲れているみたいだから、明日休みにするから。でも1回位は教科書でもノートでも開くんだぞ。」
と言った。

毒のない陸君は始めてだった。
私の寝ている最中に夕飯も済ませたらしく、9時半には帰っていった。

いつもと違う陸君に戸惑ってしまった。
玄関で陸君を見送り、キッチンへ。食べ損なった夕飯を食べる為に。

「私の分あるよね。」
半分くつろぎモードの母さんに声掛ける。

「勿論あるわよ。梓のご飯がなかったら後で何言われるか解ったも

んじゃない。」
そういう母さんに、私の隣でコーヒーを飲んでいる兄貴も大きく頷いた。
まあ確かに、きっと暴れるだろうからな、私。
「はい」
そういって出されたのは”麻婆豆腐”だった。
「美味しそう！いっただきまーす。」
食べ始めた私に
「そうそう、あんたさっきどの位ご飯食べたのよ。母さん炊飯器開けてびっくりしちゃったわよ。」
なんて笑っている。
そういや結構食べたかも。
一眠りしてしまったのでそんな事はすっかり忘れていた。
「まあいいじゃん。」
そういって楽しい食事の時間だったのに、食べ終わった後の私に一言からその様子は一遍してしまった。

妹

「そういえば、母さん陸君にいくら報酬だしてるの？」
ほんの好奇心だった。
だって気になるだろ、こんなに毎日うちに通って。
相当もらってんじゃないの？って思ってた。

「それが、夕飯頂いてるからいいです。って聞かないのよ、流石に
それは気が引けたから何度も言ったらやっと、”梓ちゃんの追試が
終わってから考えます”っていうのよ。」
とちょっと遠い目をした。

すると兄貴が
「やっぱ、あれかなぁ」
とぽつりと言った。

母さんも
「私もそうだと思うんだ。」
と。

ちょっと待った全然意味わからないから。
2人の会話は全く私には理解が出来なくて。
そんな私の顔をみて兄貴が話しだした。

「あいつさぁ妹がいたんだよ。」
と。

妹がいた？過去系？

「そう、妹。お前の1つ下でアユちゃんって言ってさ。お前とも何度か遊んだんだけど覚えてないか？お前みたいにショートカットでお転婆な女の子。」

そういわれてみたらいたような気がする。

とっても気の合う女の子が。

「何となく。」

確か幼稚園くらいだったんじゃないかな。

それ位前だった。

「交通事故だったんだ。あんなに元気だったのに、一瞬だったらしい。何かを追いかけて歩道に飛び出してそのまま。」

兄貴の話を聞いて、母さんの目には涙が浮かんでいた。

私も何か熱いものがこみ上げてきた。

「確かあの頃は、お前よく解っていないだろうからって内緒にしていたんだと思う。俺にしつこくアユちゃんは？って聞いてきたから。」

そうだったんだ、そんなことがあったんだ。

「陸もお前を見ると思い出しちゃうからって、何年もうちに来なかったしな。またうちに来るようになったのは3年位たってからだと思うから。その頃には落ち着いてお前とも遊んでたけど、内心どう思っていたんだか、それは俺にもわからない。」

兄貴は1つ1つ言葉を選ぶように慎重になって話を続けた。

「で、この前偶然お前が俺の部屋のドアを開けただろ、きっと陸はまたお前を見てアユちゃんを重ねてみたんだと思う。きっとアユが大きくなったらって。アユちゃんお前に懐いてたから。お前と遊ぶ前は陸兄、陸兄って呼んでたのに、お前が”りっくんりっくん”って呼ぶからりっくんって呼ぶようになったって話してたことあった位だし」

とうとう私の目からも涙が零れてしまった。
そうだったんだ。
だからさっき、ああ言ったんだ。

「だからって、今更気をつかうんじゃないぞ。あいつそういうの敏感だから。今まで通りにしてたらそれでいいんだぞ。」

兄貴は言ったけどこんな話を聞いて私は今まで通りにできるのだろうか？

「ほら、そんな顔しない。忘れろとは言わないけど、今まで通りが一番陸にとってもいいんだから、そうしてくれよな。」

そういって兄貴は自分の部屋に戻っていった。

そのあとは母さんと無言でコーヒーを飲んで私も自分の部屋に戻ってきた。
アユちゃんかぁ。
幼くして逝ってしまった彼女を思って眠りについた。

その晩は私と、もう一人女の子と元気に公園で遊ぶ夢をみた。
朝起きて私は

「思い出したよ、アユちゃん。」
と独り言を呟いた。

過保護な従兄弟

何とも不思議な夢をみた。
でもそれはまぎれもなくアユちゃんだった。
同じような身長で髪型も似た感じだった私達はよく公園で双子？なんて聞かれてたっけ。
そんなことまで思い出した。

そっかぁアユちゃん……

いつもだったら土曜の朝練、ウキウキしながら出かけていくんだけど、今日はしんみりムードで玄関をでた。

グラウンドに着くともう花井先生は身体を伸ばしている最中で、やっぱり今日もだよね。
意味ありげな視線で先生をみるも、ニヤついたあの顔は。
そうですね、頑張ってスペシャルメニューやらせてもらいますから。
少しだけ膨れた顔で挨拶をした。

今日もキャッチボールまで済ませると外周のランニングに走り込み。
ベットから立ち上がるのも一苦労で、やっとの思いで学校まで歩いて来たのに。
それ程足は張っていて。
ここまで酷い筋肉痛は経験したことがなかった。

ロボットのようにギコチナク一人で黙々と走っているとどうもあの夢を思い出してしまったりして。
ちょっとどころかかなり衝撃的な話だっただけに暫くは頭から離れていかなそうな気がした。

昨日と同じようにメニューなのだが足が痛くて思うように進まない。
外周を走り終えグラウンドに戻ってくると、花井先生がやってきた。

「辛いか？」
そう聞く先生。素直に

「限界近そうです。」
と答えた。

先生は満足そうに頷くと

「これは提案なんだが、２週間ピッチング練習休んでみないか？」
と言った。

はーっ？２週間もですか？折角いい感じになってきたところなだけに私としては納得いかない。

「それは拒否権があるって事ですか？」
先生を真っ直ぐ見つめ聞いてみる。

「あるぞ、でも少し今のメニューで足の強化をはかってから投げてみると違いが解ると思ってな。」
ここで昨日の千恵の言葉を思い出した。

先生いろんな人に聞いてるって。
私のためだよな。

投げたい衝動に駆られる。
新人戦まであと１ヶ月しかない。

コントロールも気になるし、２週間も投げれないとすると不安が付きまとう。

「無理にとは言わないけどな、ちょっと考えてみろ。後頭の中のイメトレが大事だから例えボールを持っていなくても常にイメージする事は大事だからそれを忘れるなよ。」

そこまで言うと私の返事を待たないまま、練習へと戻っていった。

これだけの練習でそれも２週間で何が変わるのか正直解らないけど。

一生懸命考えてくれるだろう先生を信じてみようと思った。

太ももを上げる度に激痛が走る。

だけどやるからには負けたくないからな。

痛みを堪え必死にメニューをこなした。

追試がなかっただけにメニューをこなし終えた時はまだみんな守備練習をしているところだった。

先生の顔を見ると”よし”とばかりに頷いた。

ノックは受けてもいいんだな。

ちょっとだけ安心したりして。

足は相変わらず痛かったけど、グローブを嵌めてボールを追うのはやっぱり楽しかった。

そして練習が終わった。

挨拶をして部室へ戻ってくると、片隅にボストンバックが置いてある。

「誰の？」

周りを見渡すと

「あたし」
そういって千恵がバックを持ち上げた。
そして
「お願い！今日泊まらせて。」
バックを腕に引っ掛け両手をあわせる千恵。

「いいけど、どうした急に。」
話は帰りながらねっと、いう千恵。

千恵にせかされ部室を後にした。
「それで？」

「今日、花火大会じゃない？山田に誘われたんだけど、叔父さんと従兄弟がうるさくて……思わず梓と行くって言っちゃたんだ。それでも迎えに来るっていうから泊まってくるのーって言っちゃった。」
そういって舌を出した。

「それで、家はカモフラージュじゃなくて本当に泊まりに来る？」
カモフラージュはないと思いつつも聞いてみた。

「当ったり前じゃない！ちゃんと花火が終わる時間に戻ってくるから。ってそれより梓は？行かないの？」

「多分、家族で行くと思うけど。じゃあ時間を決めて待ち合わせしようぜ。」

「了解」
そういって、ふんわり笑う千恵は私からみてもとても可愛かった。

「げっ」

突然千恵が声を詰まらせた。
千恵の視線を追うと、そこにはスポーツワゴンが止まっていた。

「暁にい、どうして？」
近寄ってきた従兄弟に疑問を投げる。

「どうしてって、そんな荷物持って歩くの大変だろうから送ってやろうかと思ってね。それに千恵がお世話になるんだ、挨拶くらいしなくちゃ駄目だろ。」
そういって私にお辞儀をした。

牽制か？それとも疑われてるのか？
多分疑われてるんだろうなぁ。
助けてやらないとか。

「初めまして、佐藤です。今日は千恵が久し振りにうちに泊まりに来ることになってるんで母が張り切っちゃって。」
そういってお辞儀をした。

暁にいと呼ばれたその従兄弟は安心したのか
「宜しく」
と笑顔を見せた。

これで母さんに会わせたらバッチリだろう。そう思って千恵をみると小さくため息をついたところだった。
知らないぞ、そんなあからさまに安心しましたみたいな顔していると。
そう思ったのだが、肝心の従兄弟は真っ直ぐ前を向いていた。視線を辿るとそこには康太と健太と大和がいた。

「あの子たち知り合い？」
と千恵を見る。

「うん、梓の幼馴染とその友達。野球部だから同じ時間に練習してたんだ。」
千恵の言っていることに嘘はない。

「もしかして、あいつらも一緒に行くのか？」
と聞かれた。

今度はこいつらを疑ってるんだ。
「行くわけないです。私の父と母は一緒に行きますけど」
そうはっきりと断言した。

千恵は小声でそんなに断言しなくても、と笑った。

「そっかぁ。じゃあ佐藤さん家に送っていくよ。」
暁にいの言葉で私達は車に乗って家へと向かった。

彼らの前を通りすぎると、
「千恵、ほんとにあいつらと行かないよな。」
といい始めた。
しつこい男だ、何だか感じ悪いぞ。

すると、千恵は後ろの席から身を乗り出し何かを従兄弟の耳に囁いた。

「なるほど。」
暁にいは一言そういうとその後は何も話さずに私の家へと向かった。

家へ着くとすぐさま車を飛び降り、
「ただいまー」と大きな声で声をかける。
母さん、千恵着いたよーと。
ここまで言わないと最近母さん出てこないから。
母さんは直ぐに顔を出した。
その隙に母さんにウインクしてみる。
（お願い気がついて、話を合わせて！と）
速いもので私の後ろには既に千恵と従兄弟が立っていた。
すると母さん、一瞬私のウインクにひるんだものの。
「あらー千恵ちゃん久し振り、待ってたわよ。今日は美味しいもの作らなくちゃね。」
と言ってくれた。
千恵も
「嬉しいー、お世話になります。」
と。
後ろで千恵の荷物を持っていた従兄弟も
「宜しくお願いします。」
と笑顔で挨拶して
「明日は部活がないみたいですけど、何時に迎えにくればいいですか？」
と聞いてきた。
正直そこまで突っ込まれるとは思わなかった。

緊張の一瞬。
母さん頼むよ。

「明日のことは明日にならないとね。千恵ちゃんはうちの娘同然ですから、お天気が良かったらみんなでお出かけしたいし。帰りは任せてくれないかしら、勿論お家まで送りしますので。」
そういって深々とお辞儀をする母さん。
そこまで言われたら断れないだろう。
そう思ったのに相手はツワモノだった。

「そこまでお世話になるわけには。」
そういって千恵を見る。

「お願い、久し振りなの。」
そういって従兄弟を見上げると

「じゃあ、5時には帰ってくるんだぞ。佐藤さん宜しくお願いします。」
といってお辞儀をしてやっと帰っていった。

車が発進するのを見届けると3人でため息をついた。

「あれじゃ、夏休み大変そうだな。」
ぽつり私が呟くと、大きく頷く母さん。

「そうなんです、うちの両親よりも過保護で。困っちゃいますよ。5時が門限なんて小学生じゃないんだからね。」
と苦笑した。

過保護なだけか？

きっと母さんは私と同じ疑問を持ったと思う。
視線を合わせ私は母さんとまたまた大きく頷いたのだった。

花火大会（前編）

家に入り、荷物を置くと千恵とリビングへ下りてきた。
母さんにざっと事情を説明すると。

「青春真っ盛りね。じゃあ、夕飯は軽めにしておきましょう。それにしても梓ときたら。あんたもそういう人はいないのかしら？」
横目でちらっと私を見た。

千恵は必死に笑いを堪えてるようで。
なんとなくむっとして、隣に座る千恵の膝をつねってやった。
全く誰のお陰で山田と花火にいけると思ってるのだか。
まぁ一先ず余計な事は言わなかったからよしとするけど、結構母さん人の話に敏感だからな。

その後本当に軽めに夕飯を食べ、山田に電話を掛けて家まで来てもらう事にした。
山田はといとまだ予定より３０分も早い時間に迎えに来たよ。

うちの玄関で千恵の顔をみると
小さい声で
「待ちきれなくて。」
と耳打ちしていた。
瞬間２人の顔は真っ赤になって。
全く人の家の玄関で何やってんだか。

すると奥から母さんの声がした。
「千恵ちゃんの支度が済むまで上がってもらったら？」
と。

山田もたいしたもんで、普通遠慮するだろうに一度来ているせいか、何の抵抗も見せずに
「じゃあ、お邪魔します。」
と上がってきた。

千恵が2階の私の部屋で支度をしている最中、キッチンにいた母さんの顔を見ると
「先日は、どうも。」
と頭を下げる山田。

母さんはこれまた大きな声で
「あら、山田君じゃないの！そっか、千恵ちゃんの相手って山田君なのね。じゃあ安心だわ。」
とにっこり笑った。
安心って意味が解らないから母さん。

準備が整った千恵がおりてきた。
押し込んできたからちょっと皺になっちゃったかな？
とおどけてみせたが、夏らしい薄手のグリーンのワンピースは日焼けした肌によく似合っていた。
山田は一瞬固まった後、
一度大きく頷くと
「じゃあ行こうか。9時には戻りますから」
と千恵と仲良く出かけていった。

玄関の外まで見送って2人の後ろ姿をみていたら、角を曲がるその瞬間に山田の手が伸びて、千恵の手を掴んだ。
直ぐに見えなくなってしまったのだけれども、その光景が頭に焼き付いて、ちょっと羨ましいと思ってしまった。

再びリビングへ。
「ねえ、父さんまだかなぁ」
時計をみると花火打ち上げまで後１０分。
「そうね、こんな日だから車の渋滞に嵌ってるんじゃない？さっき電話があったからもう直ぐ帰って来るわよ。」
と呑気な話。
さっき夕飯たべたばかりだけど、本当に軽く済ませたので、さっきの食事がさらに胃を刺激したのか、無性におなかが空いてきたみたいだった。
その時

ピーンポーン

とチャイムがなった、やっと父さんが帰ってきた！と思い玄関に向かうとそこには、総司が泣きながら立っていた。その後ろに大和の姿だ。

「梓ねえ～」
そういって私に抱きつく総司。

総司といのは大和の弟で今年小学3年生になったばかりだ。
赤ん坊の頃から知っているだけに私を梓ねえと呼ぶ。
私にとっても可愛い弟だ。

「どうした？そんなに泣いて、男の子は泣かないんじゃなかったけ？」
そういって頭を撫でてやると、必死になって泣くのを止めようと歯を食いしばって。

手でごしごしと顔をこすった。

「悪い、今日母ちゃんと花火見に行くって言ってたんだけど、急に仕事入っちゃってさっき行っちゃったんだよ。おれが連れて行くっていってるのに、母さんが行かないのだったら梓と行くって聞かなくて。」

と困った顔をする大和。

大和の家は父さんが出張中。

おばさんは総司が3年生になったときから、以前やっていた看護士の仕事に復帰したんだ。

今日は何かあったのか普段こんな時間に呼び出される事は少ないのに……

楽しみにしてたもんな。

総司の泣き声が聞こえたようで母さんがやってきた。

大和が事の経緯を説明すると

「あんた、行ってあげればいいじゃない？ほら、さっさっと支度して。」と私の背中を押す母さん。

そうだよね、他でもない総司の頼みじゃ喜んで行ってあげますか。

「ちょっと待ってて」と2人にいうと2階へ駆け上がる。

千恵と違っていく相手は大和と総司だから洋服も気にすることなく財布だけ掴んで

「待たせたな」

と戻ってきた。

「早っ」

と大和が呟いた。

母さんは

「じゃあこれ。」
と言ってお小遣いをくれた。
あんまり食べ過ぎないのよ
との言葉を添えて。

花火大会（後編）

「じゃあ総司行くぞ！」

すっかり泣き止んだ総司の手を引いて先程千恵達が通った路を歩き始めた。
歩いていてふと感じる違和感。
総司を見て納得がいった。

「お前、背伸びたなあ～」
ここのとこ会っていなかったからなおの事、私と繋ぐ手の位置は以前よりも高い場所にあった。

「そうだよ、毎日牛乳飲んでるもん。あっという間に梓ねえに追いつくんだから。」
とご機嫌な総司。
さっきまでの泣き顔はどこへいったのやら。

「全く、何言ってんだか。お前が梓を抜かすなんて先も先、ずーっと先だよ。」
大和が総司をからかった。

私は足を振り上げ大和の背中に蹴りを一発。
その場で立ち止る大和を無視して、総司と2人花火大会の会場へと急いだ。

「梓～、痛いんだよ、お前に蹴りは！ちょっとは手加減してくれって。」
情けない声をだしながらまた隣に並んで歩き出した。

会場まで後少しというところまで来たのだが中々先に進めない。
既に土手の上は人が溢れていて、上に行こうとも上がれないのだ。
私と大和はまだいいが背の小さい総司や周りの子供達は人に埋もれて苦しそうだった。

「もうちょっとだから頑張れな。」
そう声を掛けながら、ありの行列みたいに連なる人の波にのってゆっくりと歩いていた。
総司は私の手をしっかり握り、必死についてくる。
こんなことならもっと早くに声を掛ければよかったものを。
横目で大和を睨んでやった。
すると、遠くを見ていた大和は視線を感じたのか私に気が付いて慌てて

「総司、あっちにたこ焼きあったぞ！後で買ってやるからな。」
などと言い出した。

その時

「ドーン」

お腹までダイレクトに響く大きな音と共に夜空に大輪の花が咲いた。
花火大会の幕開けだった。
人の波は皆立ち止まり夜空を見上げてる。
しかし、そんな中お構いないし後ろから押してくる奴もいて、危うく総司の手が離れそうになった。

こんなところではぐれてしまったら、捜すのは一苦労だ。
より一層総司の手をしっかり繋いだ。

すると、突然反対の手が……

大和に握られた

大和は

「俺だけはぐれたらしゃれにならないから。」

そう言って黙々と歩き始めた。

久し振りに繋いだ大和の手。

ふざけて腕を組んだりした事はあるのだが、最後に手を繋いだのはいつだろう。

大和の外見とは違う、ごつごつとした大きな手に少しだけ妙な気分になった。

こんなにマメ作って、意外と見てないところでも練習してるのかもなんて思ったりしてしまった。

その間にも、花火はどんどん上がっていく。

やっとの事で土手に着き、辺りを見回し開いているスペースを捜す。

それからどれ位歩いただろうか？正面から外れているもののぽっかり開いている土手の斜面を見つけ3人並んで座った。

総司は疲れたのか、どかっと座ると無言で夜空を見上げていた。

私はというと――

その座った場所は”いか焼き”の屋台の真上にあって、焦げた醤油の匂いがお腹をくすぐる。

ちょっと行って来ると早速1品めのいか焼きを購入してしまった。

本当に、お前って奴は。

大和の独り言が聞こえた。
だってしょうがないだろ、食べたくなったんだから。
心の優しい私はちゃんと総司と大和の分も買って来たっていうのに。
そんな私に大和の言葉は、ありがとうでもご馳走様でもなく

「梓は花より団子だな」

だった。
本気で返してもらうぞと思ってしまった。

「ねえ、梓ねえ。花火って下から見ても丸いんだね。」
総司に話掛けられた。

ん？下から見ても？
今まで考えた事なかったぞ。
言われてみればそうかもしれない。
遠くから見ても、こんな風に寝転がっても丸だもんな。

「総司、お前って凄い事、気がつくなぁ」
そういって総司の頭を撫でてやると

「それはな、花火が球体になってるからなんだぞ。球体ってのはサッカーボールみたいな形だ。だから上から見ても下からみても横から見ても同じ形なんだぞ。」
と、勝ち誇った顔をした大和。
実際に”へえ～”などと感心したりしていたのだが。

「じゃあさ、あれはどうなっているの？」
総司が指差した先には

夜空に浮かぶ大きなハートだった。

「あれはだな……」

とたんに口篭る大和。

さっきの顔はどこえやら。

だけどそこで終わる大和ではない。

「お前、夏休みの自由研究まだ決まってなかっただろう。花火について自分で調べてみればいいんじゃないか？花火の形の事だったり、花火って一つ一つに名前があるんだ。例えばさっき上がった大きな丸いのは”菊”だったり、打ちあがった後に花火が下まで垂れ下がってくるのは”柳”だったりな。自分で調べたら忘れないし来年の花火大会はまた楽しみになるんじゃないか？」

と。

総司は

「それいいかも！」

なんて嬉しそうに言っている。

上手く切り抜けたもんだ。

これだから、私はいつまでたってもこいつには敵わないんだ。

ドーン、ドーンとその間も絶え間なく上がる花火。

夜とはいえど今日は蒸し暑いのなんのって、おまけにさっき食べたイカ焼きのせいか喉が渇いてきた。

こんな時は、あれだな。

カキ氷、カキ氷っと。

土手の下に並んでいる屋台を見回していると――
今のは！！
「なあ、あれ康太じゃねえ？」
大和を突っついて指をさす。
「どれ？」
と大和は解らないみたいで
「だから、あそこだよ、あそこ。」
そう言って見るものの、あっという間に人ごみに紛れてみえなくなってしまった。
「人違いじゃねえの？」
なんて大和はいうが、私があいつを見間違えるなんてありっこない。
……と思う。
「それより、カキ氷探してたんじゃないのか？来る途中、機械じゃない”手かき”のカキ氷屋あったじゃねえか。そこが旨そうだったぞ。」
と言う大和。
そこはさっき見た康太らしい人が行ったのとは反対方向
「それって、土手の登り口だろ、嫌だね、人が溢れてるところは。」
そう言って私は康太を捜したくて彼らしき人の向かった先のカキ氷屋台に行くことにした。
「おい、待ててって。」

屋台に向かう私に大和が話しかけたが、早くしないと追いつけない。
大和の声に気づかない振りをして、私は駆け出した。

会場の中ほどへ向かう大勢の人で、思うように前に進まない。
暫く頑張ってみたが、あまりの人の多さに断念した。
確か、一緒にこれないって言ったのに……

仕方なしに座っている場所から一番近い屋台でカキ氷を2つ買った。
両手でカキ氷を持ち、大和と総司の待つところに行こうとしたら

「お前、2つも食うのか？」
と聞きなれた声。

「違うって、そりゃあ食べられないこともないけどな。」
私の後ろに立つ健太にそういった。

さっきのは健太だったのだろうか？
夜とはいえど、立ち並ぶ屋台の明かりで歩く人はライトアップされて顔まで良く見える。
さっき見たあいつは後ろ姿だったけどな。

「康太と一緒だった？」
私の問いに

「いや、今日は近藤達と来てたんだけどはぐれたみたいだ。」
野球部の連中か。だけそうなら尚更康太がいてもいいんじゃないか？
気になる気持ちを押しとどめ

「迷子になってやんの、仕方ないから一緒に見るか？あっちに大和がいるぞ。」

と誘ってやった。

「大和と一緒なのか？」

健太の独り言とも取れる小さなつぶやきが聞えた。

「近藤たちは、大丈夫だよな。」

そういや、大和がこいつらとつるまなかったのはきっと総司の為だったんだろうな、なんて覆ってちょっと見直してしまった。

「こっちこっち」と健太と2人が待つ場所へと戻ると

「げっ」

というカエルを轢き殺したような大和の声。

「悪いけど、一緒に見させてもらうぞ。」

とドカッと私の隣に座った健太。

「よう、総司久しぶりだな。」

ようやく存在に気が付いただろう総司に声を掛ける。

「なんで、お前が来るんだよ。俺の梓ねえの隣に座るな～」

という総司。

俺のって……

同じ事を思ったのだろう、今度は大和が

「何だよお前、俺のって。」

と総司の頭を小突いた。

「だって、梓ねえと約束したんだ。大きくなったら結婚してくれるって。ねえ言ったよね。」

そう言い切った総司。
私は思わず食べていたカキ氷を吹いてしまった。
「「お前、汚ね～よ。」」
大和と健太の声が重なった。

だって、あれは総司が幼稚園位の時だぞ！
まあ、確かに言ったことは言ったよなぁ。

「確かに、約束したよな。」
私は総司の頭を撫でながら頷いた。

総司は嬉しそうに頷くと健太に向って
「だから、梓ねえに近づくなよ」
といっちょまえの口をきいたりして。

何だか、初めてのプロポーズだったりして。
そう考えるとおかしかった。

その後も4人並んで夜空を見上げていた。
次々に上がる花火に食べることも忘れて。
総司はというと私のひざに頭を乗っけて半分目を閉じかけている。
今日も一日暑かったからなぁ。外でめいいっぱい遊んでいたから疲れたのだろう。

「よくそんな筋肉の塊の硬い枕で寝れるもんだ」
と大和が悪態をついた。

「安心しろって、いくら頼まれてもお前だけはしてやらないから。」
と後頭部にチョップしてやった。

花火大会も終盤に近づいてきた。
「そろそろ行くか。」
大和が立ち上がった。

「えーまだ終わってないじゃん。」
と今まで半分寝ていた総司が口をすぼめた。

「我侭言うんじゃないぞ。もう直ぐ帰り道は込んでくるし、それに千恵もそろそろ戻るんじゃないか？」

大和の言葉にはっと気づいた。
すっかり千恵のことを忘れていた。

「そうだな、帰るか。健太はどうするんだ？近藤たち捜すか？」
ちらっと見ると

「こんな人ごみの中捜せるわけないだろ。俺も帰るよ」
と。

本当はクライマックスの花火見たかったけど総司もいるしな。
きっと帰りは一気に押し寄せる人で行きなんて問題ないほどの込みようだからな。
後ろ髪をひかれながらも花火大会の会場をあとにしたのだった。

帰り道、相当頑張った総司を健太がオブっていた。
大和が背負うといったのだが、誰がみても健太が適任だろう。
どういうわけか、健太を敵視していた総司も眠気には勝てずにおとなしく負ぶわれて家路についたのだった。

花火大会の後で（大和と健太）

「すっかり寝ちまったなぁ」

「あぁ」

総司を負ぶってきてくれた健太と2人俺の部屋にいる。
成り行きじょう、抜け駆けみたいな事しちまったけど、直接健太から梓の事を聞いた事はないわけだし、あんまり変に言い訳するのも何だしな。

この部屋の温度はすこぶる低いのではないだろうか。
無言で男2人向かい合ってるのだから。
俺は沈黙が痛かった。

「この家、今誰もいないのか？」
タイミングよく健太が話しを振ってくれた。

「そうなんだよ、お袋がいるはずだったんだけど急に仕事になってまってよ。花火大会も直前までは健太や近藤達と行くつもりだったんだけど、お袋と行けなくなった総司がどうしても梓と行きたいって泣き出しちまって。」
うまいタイミングで言い訳ができたようだ。
ほっとした俺にとうとうこいつ言いやがった。

「本当はお前が一緒に行きたかったんじゃねえの？」
顔が本気だった。

俺は言うつもりなんてこれぽっちもなかったはずなのに思わず

「かもな」

って言っちまった。

「かも？かよ。」

直ぐに健太に突っ込まれた。

「そういうお前だってそうだろ？」

俺がそう言うと健太は不意を疲れたように、一瞬息を呑んだ。

「かもな」

健太は俺の顔を見て噴出した。

2人で笑った後、また沈黙が…

「「虚しいよな」」

どちらとも無く言葉が出た。

2人が梓を見ているから解っていることだった。

「んで、康太は結局、あいつと？」

俺の問いに

「ああ、正確にはあいつらと。だけどな。」

健太はそう言った。

まだ、山田が千恵の事で頑張っていた頃に今日の話をした。
てっきり康太も来ると思いきや返ってきた返事は意外なものだった。

「悪い、先約があるんだよ。」
と。
その顔は少し嬉しそうに見えたんだ。
渋る康太を問い詰めると

「琴音がさ、友達と一緒に見に行きたいっていってたんだけど、あいつの親が女の子達だけなんて危ないって反対して。んで俺に白羽の矢が立ったってわけだ。」
と。
だったら健太でもいいんじゃねえの？
そう思った俺の疑問に答えたのは健太だった。

「琴音はわかってるんだよ。康太だったら断れないの。こいつ昔から琴音の頼みは聞かなかった事はなかったからな。」
康太を見ると気のせいだろうか少しだけ赤くなった気がした。

「ふーんそうなんだ。」
俺は何となくだけどそれ以上突っ込んではいけない気がして。
後は今の通り。
俺達は野球部の連中と行く事になったんだけど。
総司の我侭でこうなってしまった訳だ。

俺は康太の事を梓に言ってはいけない気がして黙っていた。
それは健太も同じだったようだ。
いくら最大のライバルが減ると思ったってあいつの悲しそうな顔はみたくないからな。

ふと2人で窓の向こうの梓の部屋をみた。
千恵と話込んでいるのだろう、部屋の明かりは煌々と点いていて、時折楽しそうな笑い声が聞えた。

突然健太が口を開いた。
「マジ驚いた、梓が見えたとき。あんだけ人がいても解るんだよな。近藤達には悪かったけど気がついたら梓の後ろに立ってたよ。それで今日いけないって言われてたお前と一緒だって聞かされて凄い凹んだよ。」

さっきは”かもな”なんて言ってたくせに堂々と戦線布告ってか。今までは、探り合ってたみたいっていうか、気がつかない振りをしていただけになんとなくこの先が変なことにならなきゃいいな、なんて思ってしまった。

「そっか、悪かったな。でも自分で言って虚しくなるけど、きっと俺だけが誘ったんじゃあいつは来なかったと思うぜ。総司の活躍大だからな。」
乾いた笑いと共に出た言葉だった。

「そういえば、総司のやつ、ませたガキだ。梓と結婚の約束するなんてな。」
健太が言った。

「案外ダークホースだったりして。」
自分の弟ながら……抜け目の無いやつだ。

「お前だけで結構だよ。」
健太にライバルだと思われている事自体驚きだ。

すると健太は
「なんて顔してるんだよ。幼馴染は脅威だろ。今だってこんなに近くにいるんだからな。羨ましいって。」
そう言って俺の肩を叩いた。

どうして、俺の周りはこう暴力的なやつが多いんだ。
健太に叩かれた肩がなんとなく健太の想いを表しているようでむず痒かった。

俺は思わず
「しかし、まあ何だ。俺はとりあえず暴れ姫の恋を見守っていくよ。例え誰にその想いが向かっていたとしてもな。まあ、俺に向いてくれてたら遠慮はしないけどな。」
と言ってしまった。

「誰に向かっていたとしてもか。自分じゃ動かないってことか？」
健太が痛いところを突いてきた。
そりゃ、動きたいさ。
あいつを俺だけのものにしたいって。
だけど、それじゃ駄目なんだ。
あいつが、自分から動かないと、きっといつか駄目になる。
だから、あいつが俺の事をそういう対象に見られるようにそれだけの努力はするつもりだ。
あいつを振り向かせたい。

漠然とそんな事を思った。

「なるほどな。」
健太が呟いた。

あー、もしかして俺口に出してたってか?!
恥ずかしいんだけど……

ちらりと健太を見てみると
「お前らしいよ。でも俺は動いちまうかもしれないな。きっと。」

多分俺達は知っている。
そう遠くない日に梓が悲しんでしまうことを。
その時健太はどんな風に思うだろう?
自分と同じ顔をした弟を好きなあいつの事を。
きっと健太は、梓にとってその日がきたら一番会いたくなくなる顔なのではないだろうか?
否応なしに思い出してしまうその顔をした健太を。

一番辛いのは、梓か健太か。
それとも俺か?

できるなら、ずーっとこのままでもいいのかも知れないな。
無邪気に笑うあいつの笑顔を見ていられるのならばな。

俺達は知らないうちに話込んでいたようで…結局健太は泊まっていったんだ。
いつまでも明かりの点いた隣の部屋を見つめながら。

苦悩？！

ごめんちょっと失礼！

そういって何度目だろう？

この家で一番狭い個室に行くのは…

いくら何だって飲みすぎだ。

私の部屋に転がるジュースの空き缶&ペットボトル

蒸し暑い夜にしゃべり通しだから喉が渇く渇く。

そういった訳で2人して代わる代わりに席を立つ私達。

はっきり言ってお腹も限界だ。

久しぶりの千恵との長話しだ。

千恵のおばあちゃんの話は勿論、山田の話や従兄弟の話までいろいろな話が出てくる出てくる。ずーっと笑いっぱなしだ。

中でも面白いのは従兄弟の話だったりする。

家族の中に女性は母親だけだったからか、千恵に対する過保護加減といったらない。———千恵はそう言うのだが私にはそれが違う風に見えなくもないのだが。

否、あの眼は違うね。

きっと”ただの”従兄弟だなんて思ってないね。

確信があったりして。

当の本人は全く気が付いていなそうなんだけど。

まあだからこそこうやって話も出来るんだろうけどね。

しかし、不思議と今夜は眠くならないもんで時計を見るともう夜中

の3時を回っていた。
明日は部活も休みだしゆっくり寝てればいいからなぁ。
そんなことを思いながら部屋に戻ると

「ねえ、今まで気が付かなかったけれど、隣もまだ電気がついているよ。大和まだ起きているのかな？」
そういわれて隣部屋をみると確かに明かりがついていた。

「さぁどうだろう？私はいつも早く寝るし隣の部屋の明かりなんて気にした事なかったからな。大和のことだからつけっぱなしで寝てるんじゃないの？」
私の言葉に妙に納得したらしい千恵は
「それもそうね」
と相槌をうった。

「そういえば、明日は家庭教師くるの？」
何の前触れもなく触れられたその話題。

すっかり忘れていた陸君の存在を！

「来ると思う……」
さっきまでの勢いがすっかりなくなりいきなりトーンダウンする私。

「まあまあ、あと2日の辛抱だよ。火曜でしょ追試は。」
千恵の言葉に更に落ち込む。
忘れていた英語の恐怖が蘇った。

「そうといえばそうなんだけど…」
この1日サボっただけで私の頭は空っぽになってしまったのではないだろうかと一抹の不安を感じる。

よっぽど顔にでていたのだろう千恵は
「ごめん」
と呟いた。

「謝る事じゃないじゃん。私の方がごめんだって。元はといえば私が追試なんてなるからなんだし。」
ほんとに今更ながらの言葉だったりして。

雰囲気が一気に悪くなりあれだけ弾んでいた会話も途切れ途切れになってしまった。

そのうちにどちらも大きなあくびをするようになり、寝ることにした。

明日はゆっくり起きようね。
そう言ったのに、朝っぱらからの電話で私たちは起こされてしまうのだった。

「何だか慌しくてすみません。」
そう頭を下げる千恵。

「いいのよ。それより大丈夫だといいわね。」
母さんの言葉に私も頷く。

「はい、電話の様子だとそんなにたいした事はないみたいですから。」
そう言って靴を履く千恵。

もう一度深くお辞儀をすると
「あとで電話入れるね。」

と玄関を出て行った。
門の先には先ほど丁寧に千恵のお礼をいった従兄弟君が立っている。
千恵から荷物を受け取りトランクに入れてこちらに会釈すると千恵と共に去っていった。

何だか略奪された気分だよ。
そう口に出すと隣で母さんが
「それもそうね。」
と呟いた。

千恵のおばあさんが風邪を引いてしまったらしい。何でも病院へ逆戻りらしく、お見舞いに行くとの事だった。
千恵は知らなかったそうだが、元々おばさんの所に行く予定だったらしいけど。
私はほんの少しだけ寝た千恵の布団を干すために2階へと上がっていった。

今日も天気はいいらしい。
むき出しになった腕はじりじりと刺すような日差しに汗が噴出していた。

プール行きたいなぁ。

そんなことを思っていると視線を感じた。
大和も布団を干していた。

「はよ。」

「はよ。」

かわす言葉は短くて。
おんなじ外の暑さでもソフトをしているときはいくらだって声が出るのに不思議なもんだ。

「プール行きたいって？」
大和がベランダに寄りかかって話掛けてきた。

「あくまでも願望。今日は最後の追い込みで忙しそうだから。」
そういや何時に来るのだろう。
いつもふらりと現れるから気にもしなかったのだが。

「ご愁傷様。」
横目でこちらをちらりとみながら思ってもないだろう言葉を投げかけてきた。

「そりゃ、どうも。」
負けじと軽く睨みながらそう言うと

「ああおっかねえ～」
と首をすくめながら大和は部屋に入っていった。

何が”ご愁傷様”だっていうんだ、思ってもない癖に。
右ストレートがカーテンに吸い込まれていく。
思いっきりカーテンに当たってしまった。

結局、午前中は陸君は顔を出さずにお昼となった。
朝食は急いでいた千恵に合せてトースト1枚で終わってしまったから、お昼はがっつり食べたかった。
茶碗にこれでもかって言うほどご飯を盛って、天麩羅をおかずに2

杯食べた。
他の家族はそうめんと天麩羅をゆっくりと食べている。
兄貴に至っては
「梓が食わないとゆっくり食えて平和だなぁ」
なんていいながら、器からそうめんを取っていた。

確かに。
大きな器に入っているそうめん。
普段だったらわれ先にと兄貴と奪いあいながら食べてるもんな。

「それはそれは、失礼しました。」
あっかんべーをしながらキッチンを後にした。

陸君が来る前にちょっとだけでもページを開いてみますか。
一日しなかっただけでこんなにも不安になってしまう私って。
それより、自分から教科書を広げているのにはびっくりしてるんだけど。
これも、陸君効果なんだろうか。
はじめは机にいたのだが、居の寝不足と英語の文字そしてお腹もいっぱいというかなりの条件で私は無意識にベットに行ったようで……

気がついた時にはあたりは夕焼け？！
時計を見ると既に６時を過ぎていて！！！

こうなったら、もう一度夜中まで寝てしまった方が懸命かも。
そこまで思ってしまった。

はて、どうしたものか。
ベットの上で胡坐をかくこと２０分。
意を決して部屋のドアを開けたのだった。

そして、陸君がいるだろう兄貴の部屋をノックすると
「なんだ～」
と緊張している私とはうってかわったのん気な声。

そおっとドアを開けると陸上の雑誌を見ている兄貴がいた。
狭い部屋は見渡さずとしても全てが目に入る。
肝心な陸君は部屋にいなかった。

「あの……」
罰が悪そうに話掛けると

「それにしてもお前欲寝てたな。そうそう、陸なら今日はこれないって。言ってなかったっけ？」
これまた非常にのん気な声で。

私の苦悩を返してくれ！！
本気でそう思ったのだった。

予想問題

明日はとうとう追試の日。
けれども、陸君は今日も現れなかった。

私の目の前には

対策

と書かれた2枚の用紙。
そこには追試に出されるだろう予想問題と1枚と、もう1枚は今までの復習が事細かに書いてあった。
最後には

「これで駄目だったら、覚えてろよ！頑張れ」
と締めくくられていた。

この紙は兄貴から受け取った。
今までのスパルタを思うとほっとするとこなのだが、少しだけ、ほんの少しだけど物足りないような気がするのは気のせいだろうか。

びっしりと書き込まれた用紙を見つめ思わずため息をついてしまった。
本当にこれで大丈夫なのだろうかと。

でもやるしかないからな。
英語の辞書を手に取り、復習から始める。
１０分もやっていると、背中やお尻がむずむずしてきて、おまけにサボってしまえと頭からの命令も出されてくるから困ったものだ。

でも、これも今日が最後だから。
明日になれば、またソフト漬けの毎日が始まるんだ。
そう思い直し、自ら頭に指令を出す。
もうちょっとだから、頑張れ自分、と。

ここ何日かで、コツというものを覚えたのも事実だった。
先週までには考えもつかなったほど、単語も頭に入っている。
だけど、これは梓を基準にしたもので極一般の生徒からは程遠いものだったりすんだけれど。

一通り、復習を終えた後、陸君が作った予想問題を解いてみた。
それは、今まで嫌というほどやらされたあの試験問題を少し変えたものだった。

カッコの場所を隣にしたり、選択肢を変えたその予想問題は、梓は自分が信じられない程の書き込みが出来た。
それが終わると嬉しくなって兄貴の所へ飛んでいった。

ノックもせずに兄貴のドアを開け放つ。
兄貴はギョっとしてこちらを振り返った。

「何だよ突然。」
憮然とする兄貴を尻目に予想問題をヒラヒラさせた。

「見てくれ、これ。こんなに書けた！」
そう言って今解いたばかりの問題用紙を兄貴に渡した。

「どれどれ、でも書いただけじゃ駄目なんだぞ。まあお前にしたらこんだけ書けたら快挙だろうけどな。」
そういいながら兄貴は採点を始めた。

時々”ほーっ”と声を出しながら、赤鉛筆を滑らせていく。
時折何やら書き込んでいるのが気になるところだ。
テストの採点でこんなにそわそわしたのは初めてだった。

兄貴が赤鉛筆を置いた。

「まじ。すげーよ陸は。こんな短期間でよくもまあ。」
もう一度採点の終わった用紙をみながらそう呟いた。

「で、どうだった？」
テスト用紙を覗きこんだ。
思ったよりも書き込みが多かった。

やっぱそんなに上手くはいかないか。
はーっと大きくため息をついた。
そんな私の頭に兄貴は手を置いた。

「そんなため息付くなって。ほれよく見てみろ。」
兄貴から用紙を受け取り、マジマジと見てみると。

「ここも、ここも、ここもケアレスミスだ。スペルが一個抜けていたり、多分ここは一段間違えたんじゃないか？これさえなければ合格点だぞ。書いて終わりじゃないんだ。良く見直してみる事も大事なんだぞ。」
そう言って、最後にもう一度単語を書いて完璧に覚えるんだぞ。と付け加えた。

驚いたことに発音記号はみんな当たっていた。
兄貴にサンキュウーとお礼をしてもう一度机に向かった。

これなら、上手くいくかも。
俄然やる気が出てきた。

そうして、今は追試の真っ最中だったりする。
教室では私と同様追試を受けている者数名。
カリカリと鉛筆の走る音が聞える。

私はテスト用紙を目の前に、思わず”おおっ”と声を上げてしまった。
監督の先生がチラリと私を見た。
そんなことはお構い無しに私は、もう一度テスト用紙を確認してみた。
そこには、昨日の予想問題と良く似た問題が。

私は鉛筆を握り、一つ一つ問題を解いていった。
中にはやっぱり答えられない問題もちらほらあったのだが、何とか解答欄を埋めることが出来たのだった。
兄貴の言葉を思い出し、見直しもやってみた。
そして追試は終わった。

監督の先生が、結果は終業式だから、覚悟しておけよと意地悪く笑った。
それも私を見てだ！嫌味な先生だった。

ふと、家庭教師を始めた日の陸君の言葉を思い出す。

「何とかなるかもな」

の一言を。

本当に何とかなりそうだよ。
まだ結果はでていないけれど、これが私の限界だ。
これで思いっきりソフトが出来る！
足取り軽く廊下を走って部室へ直行していたら

「廊下を走るんじゃない！さっきのテストから減点するぞ。まあ引ける点があるかは疑問だけれどな。」
と、さっきの試験監督の先生だった。

「すみませんでした。気をつけます。」
悔しいけれど頭を下げた。

先生はスキップしそうな位、嬉しそうな顔をした。
どこまでいっても嫌な奴だ。
後で兄貴に聞いてみよう！
きっと、とてつもなく嫌な奴だったに違いない。
っと下らぬ妄想は止めにして。
先生の目に入らないように小走りしながら部活に向かったのだった。

結果発表

「それにしても、まさか梓が追試に通るとは思わなかったよ。」
里美だけでなく、千恵までもが大きく頷いた。

私だって、そう思いはしたけれど。
でもちょっとは自信あったんだよね。

「格好いいだけじゃなくて、勉強も出来るなんて。これで運動も出来るなんて言ったら相当な人だね。」
カナエはいささか興奮気味だ。

「だって、この梓を短期間で追試通すなんて、学校の先生だってお手上げ状態のこの梓をだよ。」
みんな好き勝手に言い放題だ。
本当に当たっているだけに何も言えない。

でもこれで心起きなく部活が出来るんだからマジ御礼の一つもしなくちゃだよな。
そういえば、家庭教師は追試までの間だったんだっけ。
取り合えず報告だけはしなくちゃだよな。

隣を千恵が歩いている。
先日、千恵のおばあちゃんの具合が悪くなってしまったのだが、幸いにも回復して今は落着いたらしい。とは言っても季節の変わり目、気温の差の激しい今の季節は引き続き注意が必要なのらしいが。
取りあえず一安心なのかな。
今日から4日は親戚の人が付き合うらしく、久しぶりに千恵のお母さんが帰ってくるので、あの嫌味な従兄弟の登場はお休みらしい。

朝から山田もテンション高かったからな。

「梓、ぼーっとしてないで、早く鍵だしなって。待ってんだから。」
千恵に言われていつの間にか部室の前に来ていたことに気づいた。

「おう、悪い。」
カチャリと鍵を開け、一歩踏み入れて気合を入れる。
この後待っている私だけのスペシャルメニューの為に。

相変わらず野球部は素早い事で、もうランニングをしている。
直ぐにあいつの背中を見つけ、一人にやけてみたりして。
やっぱいいよな。初めから出れるのは。
追試漬けだった私は久しぶりの感覚だった。
十分ソフトをいや違うな、スペシャルメニューを堪能した。
全てが終わり何とも言えぬ爽快感だ。

そこに水差さす一言を言った奴1名。

「そういえば、通知表どうだった？」
誰だかわからなかったが背中でそう声が聞えた。
そう言うことを言う奴は良かった奴に決まっている。
全く嫌味な奴だ。って相手はあいつだ。
後ろを振り向くとやっぱり大和だった。

「別に、お前に言うほどのもんでもねえって。」
思いっきり睨んでやった。

「どうせ、いつものだろ。お前好きもんな走るの。通知表まで走ってるんだろ？1，2，1，2、って！で最後に5（ｇｏ！）って体育で締めるんだよな。」

大和の言葉に思わず拳を握り締めた。
「ある意味凄いな。」
康太が笑い始めた。
ますます拳に力が入る私。
「俺も似たようなもんだぞ。」
健太がそう言った。
「そうか、仲間か！」
何だか嬉しくなったのに
3，4，3，4だけどな
と康太が呟いた。
えらい違いだよ！
ここまで聞いて千恵が堪えきれずに噴出した。
千恵それも失礼だから。
千恵の隣を歩く山田が千恵の頭に手を乗せて私の顔を伺った。
思わず首をすくめて笑ってみせた。
山田は
「いいじゃん体育は良かったんだろ？俺なんて全部が平凡な数字だよ。」
とフォローになっていない一言を。
みんなが黙った瞬間だった。
でもまあ、これで夏休みなわけだし。

学校で康太の顔を見れなくなるのは寂しいのだが、部活で会えるしな。
健太と大和と何かの話で盛り上がっている、康太を横目でちらりと盗み見た。
それにしても花井先生私をいじめすぎじゃないのか？肩甲骨まで悲鳴を上げている梓だった。

その後、家に着いて。
母さんに通知表を要求される。
「またなのね。」
渡された通知表を見て小さく呟いた。
そして、ジャッジャジャーンと返ってきた追試のテスト用紙をひらひらさせた。

母さんは、さっきの顔は何処へやら急に顔が変わり

「これ梓のテストなの？」
とこれまた疑いの眼差しで――

「当たり前だろ！」
思わず大声を上げた。一体何なんだよ。一人むっとしている私をさておき

「本格的にお願いしなくちゃだわ。」
と嬉しそうな顔をした。

嫌な予感が……

「もしかして。」

「あら、梓、分かってるじゃない！週２くらいでお願いしようかしら。　家庭教師♪」

なんだその間は。

「それはちょっと……」

「あら、梓に拒否権はないのよ。あるんだったら陸君のほうかしら。」

パタパタとスリッパの音を響かせながら、母さんは消えていった。

マジですか！？

断って欲しい切にそう思う梓だった。

報酬

家庭教師なんて、もうこりごりだよ。
カバンを下ろしベットに座り込んだ。

でも、陸君のおかげで追試も通ったことだし、お礼はしなくっちゃか？
といいつつ、もう臨時の家庭教師は終わったんだから兄貴が呼ばない限りはこないんだよな。

そういえば、あれほどしつこくきてたのにピタッとこなくなったのはどうしてなのだろうか？
気になる事は気になる。
兄貴が帰って来たら聞いてみますか。

しかし、今日も疲れたな、背中が固まりそうだよ。
お腹も……腹筋が６つに割れるのも、そう遠くはないような気がする。
明日からは夏休み、勉強しなくてもいいかと思うとそれだけで心が躍ってくる。
夏休みがあけたら、直ぐに新人戦だ。
きっと、投げ勝ってやる。
部屋に転がっていたボールを握ってそう自分に誓った。

カタンと隣の部屋のドアが開く音がした。
兄貴だ。
すぐさまノックすると返事を待たずにドアを開けた。
其処には、一人立っている陸君がいた。

「よう、追試通ったって？頑張ったじゃん」
勉強中には決して見せなかった笑顔だった。
それは、そうあの時兄貴の部屋で会って以来の笑顔だった。
何だか、一瞬呆けてしまった。

「おぉ、ちょっと待ってて。」
そう言って自分の部屋に今日返ってきたばかりのテスト用紙を取り出した。
まさか今日会えるとは思ってなかったらちょっとびびった。

「はい」
おもむろにテスト用紙を差し出し、陸君がそれを手に取った。

「こんだけ出来れば上等だよ。発音記号がみんな合ってるとは、よっぽど勘がいいんだな。」
と。

「勘？勘なわけないだろ！あれだけシツコクやってたから、解ったんだよ！」
息を撒いた私に

「冗談だよ。そんなにムキになるなよ、そういえばお前覚えてるか？」
私の目をじっと見て陸君はそう言った。

「は？」
何をだ？英語の単語か、文法か？

私の顔を伺って
「報酬だよ、報酬。」

にやりと笑った陸君。

あっ、あの日のことを思い出してみた、確か……

「今度の休み、俺に付き合え。」

それは、断る事は出来ないみたいに断言されて。

何処に連れて行くかさえわからないのに、私は思わずコクリと頷いていた。

「よし、決定な。」

そう約束したとき兄貴が戻ってきた。

「おう、梓。先生にちゃんとお礼言ったのか？」

兄貴に言われて気がついた。

「ありがとうございました。おかげさまで助かりました。」

今更ながら、他人行儀にお礼を言ったのだった。

兄貴も戻ってきたので、じゃあと言って自分の部屋に戻った。

そういえば、どうしてこなかったんだかそれを聞きにいったのに、聞かないできちゃったよ。

でもまあいっか、お礼も言えた事だしな。

あっ、家庭教師の話！断ってって言っとけば良かったか？

でも何だかもう一度兄貴の部屋に行くのは躊躇われてしまう自分がいた。

それは――さっきの話のせいかもしれない。

何処に行くんだ？

ちょっぴり気になる。

とはいえ、翌日からの部活三昧。
そんな事を考えてる暇はなくて、まあちらっと千恵だけには言ってみたのだけれども。
ボールを追っている最中はそれだけに集中していた。
基礎練習が効いているのか、身体が凄く軽くなった気がする。
まだ、ピッチング練習はやらせてもらえなかったけれど、ノックもバッティング練習も思う存分出来たから楽しくって仕方なかった。

「梓先輩ってタフですよね。私達と違ってあれだけの筋トレとかした後のこの練習で笑ってられるって考えられないです。」
後輩の言葉にまわりにいた子もみんな頷く。

「楽しいんだ、ただそれだけだよ。」
本当にそう思っていた。

今日の練習も終わっていつもの帰り道。
千恵も今日はお母さんが帰っているらしく一緒に帰る。
そこに、野球部の面々。
部活も楽しみだけれど、この帰り道も楽しみだったりする。

「そういや、追試通ったんだって？」
そう声をかけたのは康太だった。
にやけそうな顔を抑えつつ

「実力でしょ。実力！」
そうガッツポーズをとる私に間髪入れず

「んなわけねえーだろ、実力ある奴は追試になんかならないだろ」
大和がお腹抱えて笑いだす。

私はスポーツバックを振り上げて――。
大和は殺気を感じたらしく、
「本当のことじゃねえかぁー」
と駄目だしの一言を言いながら走り出した。

「全く、嫌味な奴だ。」
私が呟くと

「でもいいコンビだよ」
と千恵に突っ込まれる。

「いいコンビって。」
私がため息をつくと

千恵は
「すっごい息が合ってて、漫才コンビみたい！ね、健太。」
千恵は健太に話を振った。

「確かに、そうかもな。」
疲れているのか、それは小さな声だった。

康太がそれをみて、健太の肩に手を置いた。
健太はそれを振りほどいて、何やらぶつくさ呟いている。

千恵はにやにやしているし。

「お前ら、何か変。」
思った事を口にした。

罪な奴だ。
と千恵が呟いたけど、私には何のことだかさっぱり分からなかった。
そのうち大和に追いついて、またふざけながらの帰り道。
毎日夏休みだったらいいのに、と空を見上げた。
そんな日を過ごして、とうとう明日は日曜日。
そう、いつの間にか、陸君と出掛ける前日となってしまった。

デート？

昨日まではあんまり考えなかったけれど、前日になってしまったからか、少し気になってしまう自分がいた。

待ち合わせの時間も場所も何もいってこないかったから、もしかして忘れてるのか？なんても思ったりもするのだが。

本音を言ったら、そっちの方がありがたかったりする。

男友達と出掛けることは何の抵抗もないし、どちらかと言ったら女友達と出掛けるよりもよっぽど気が楽だったりするのだけど、どうも陸君とだけは調子が狂うというか何というか。

自分のペースが保てないのだ。

それに何処に行くかも知らないが、会話というものが成り立つのだろうか？

せめて、兄貴が行ってくれればそんなことを心配する事もないのだろうけど。

素振りをしながらそんな事を考えた。

「何考えてるの？」

カンナが不思議そうな顔をして私を覗きこんだ。

「何で」

一度頭を振って、バットを思いっきり振った。

「授業中ならまだしも、練習の最中に集中していない梓を見るのは稀だなぁと思ってさ。」

カンナは私を見ることなく、隣でバットを降りながらそう言った。

「明日は練習休みなんだなぁと思ってさ。」
これなら別に嘘ついてるわけじゃないし、我ながらいい切り返しだ！そう思ったのに。

「ふーん。」
カンナはこちらを向きなおし、一言そう言った。
何だか疑っているような声。

私はカンナの視線をさえぎるように正面を見ると、今度は千恵と目があった。
事情を知っているだけに、千恵の視線方が痛い気がする。

もう一度頭を降って集中集中。とバットを降ったのだった。
素振りを終えて、休憩時間。
私はすっかり汗だくになった顔を洗うために校庭の隅にある水道へ。
少し水がぬるいのはいただけないが、ベトベトした汗がすーっと消えていくようで、さっぱりして気持ちがいい。
水道に寄りかかり、野球部の練習を眺めていた。

「豪快だね、梓の水浴びは。」

気がつかないうちに、千恵が私の隣に立っていた。
忍者かい？なんて思ったりして。

「そうかな？」
ただ顔を洗っただけなのに。

「うん、だって遠目で見てても、こう水しぶきが上がるのが見えたもん。」
手振りつきで説明してくれた。

だってそのほうが気持ちがいいじゃん。
ちまちま水なんてかけてらんないって。

すると千恵は話題を変えて
「やっぱりさ、一生懸命動いている姿ってかっこいいよね。」
野球部の練習を見ながらそう言った。

私は康太の姿を見つめながら、頷いた。

「明日の事考えてた？」
唐突に話題を降る千恵。
さっきのことだ。やっぱり分かり易いんだ私って。

「それほど、深くは考えてないけど、ちょっとだけな。」
ちょっとだけ、心の中で繰り返す。

「家庭教師のお兄さんにはときめいたりとかしなかった？」
この一言には正直、驚いた。
だって、そんなこと考えた事なかったから……。
だいいち、私が誰を想っているのか一番知っているのは千恵だっていうのに。

「ごめん、ごめん。あくまで一般論だよ。ああいう人が一番人気があるタイプなんじゃないのかなぁってちょっと思っただけだって、そんな恐い顔しないでよ。」
と千恵は肩を竦めた。

「そういうもんなのか？」
私は、こうやって目の前で汗を流すこいつらの方がよっぽどいいと

思うけどな。

「あっ、花井先生が動き出したよ、急がなくちゃ。」
千恵のその言葉で会話は中断された。

あの腹黒悪魔が人気ものね。

一瞬あの嫌味な顔を思い出してしまって身震いしてしまった。
練習、練習。
頭を切り替えてグランドを走り抜けた。

そうして、練習をこなして帰宅時間。
いつもの面子での帰り道。

大和が私を見ながら
「なあ、梓達も明日休みだろ？久しぶりに公園行ってキャッチボールでもすっか。」
その言葉に初めに反応したのは健太だった。

「いいねぇやろうぜ。」
と。

すると千恵が
「ごめん、明日は用事入ってるんだよね、梓っ」
と私の顔を見上げた。

「悪りィ、明日はちょっと……」

大和は私が断るとは思わなかったようで
「珍しいこともあったもんだ。」

とぽかんとした表情。

「何処か行くんだ。」
意味深な顔で聞いてきたのは康太だった。

「何処かに行くっていうか―」
私の言葉を千恵が遮った。

「デートだもんね。」
と。

「デートって、そんなのじゃないって。」
慌てて否定するものの。

野球部トリオはぎょっとした顔で私に注目する。

「だって、男の人と2人で出掛けるのはデートっていうもんでょ。」
明らかに私を煽る千恵。
康太もいるっていうのにー、後で覚えとけよ。山田に言いつけてやるから。

「だから、違うって言ってるじゃん。」
私はみんなを置いて一人早歩きで家へと向かったのだった。
後ろでは、何やら千恵が聞かれていたようで、頼むからこれ以上余計な事を言わないでくれよと願うのだった。

家に着いて、身体の汗を流してさっぱりした。
冷たい水を浴び、さっきのむっとした気持ちを静めるように。
少しだけ、気分もすっきりして、冷蔵庫から牛乳を取り出す。
おもむろに牛乳パックに口をつけゴクリと喉を鳴らす。

すると、間髪入れずに

「梓ーそれは止めなさいって何度言われたら気がすむの！」

と母さんの雄たけびが聞えた。

チッいないと思ったのに。

私は電話の横に置いてあるマジックを取り出し、牛乳パックにでかでかと

梓専用

と書き入れた。

後ろで”全くもう”という呟きと大きなため息が聞えた。

女の子を産んだと思ったのは1歳までだったわ。

これまたいつもの独り言。

ちょいと頭を下げつつ、自分の部屋へと戻り寝転んだ。

デートって。

千恵の言うところのデートだったら、私は今まで何回大和とデートをしたのだろう。

そう思うとおかしくなってきた。

だって大和とデートだなんて、ちっともピンとこなかった。

そんなもんだよな。

後でどんな仕返しをしてやろう、千恵の奴め。

いざ出陣！

昨日の晩は、いつ連絡がくるのかと思ったのだが、結局のところ陸君からの連絡はなかった。
忘れているのか、はたまた冗談だったのか、どちらかは分からないが、ほっとしたのは事実だった。
私は安心しきってぐっすりと眠ってしまったのだけれど。

「梓ー、いつまで寝ているの！１０時半に陸君来るってよ。」
その言葉にすっかり目が覚めた。
時計を見ると既に９時を回っていた。
嘘だろー当日電話するってか。

仕方ないから、起きなくちゃか。

パジャマのままリビングに降りてくると、にこにこした母さん。

「さっき、電話があったのよ、梓ちゃんちょっとお借りしますね。って！陸君はお勧めよ。これで梓と付き合えば無料で勉強教えてくれるかもよ～」
なんて浮かれ始めた。
一体何なんだこの人は！

「母さん、間違ってもそれはないから。」
と兄貴が口をはさんだ。

「分かってるわよ、そんなの。冗談よ、冗談。」
オーホホホッと笑い始める母さん。

怪しい人だから、その笑い。

「冗談はさておき、迎えにくるのは確かなんだから、とっとと朝ご飯食べちゃってちょうだいね。」
すでにテーブルに用意してあった朝食を食べ始める。
「それにしても、陸は梓連れて何処へいこうとしているんだ？」
と兄貴が呟く。
「兄貴も知らないの？私も全然分からん。」
変な会話だと思いつつ朝食を食べ終わる。

顔を洗って、歯を磨いて。
後は洋服かぁ。

部屋に入ってクローゼットを開ける。
大した洋服もあるもんじゃなし、私はいつものジーンズとTシャツを着た。
ちょっとお気に入りのTシャツを選んでしまったけれどね。

あっという間に時間になった。
性格なんだろうか、5分前に到着した陸君。
用意も何もあったもんじゃないから、財布が入ったバックだけを持って靴を履いた。
玄関には母さんと兄貴が見送りに出てきた。
「宜しくな」
と言う兄貴に
「宜しくね」
と言う母さん。

何が宜しく何だか分からないっつうの。

でも陸君は丁寧にお辞儀をして、お預かりします。
って言ったのだった。
お借りしますから格上げされたようだった。

じゃあ行って来ます

私にとったら、いざ出陣って感じだ。
「それで、何処に行くの？」
と聞いてみても

「ああ、ちょっとな。」
と言うだけだった。

仕方なく陸君の後を着いていった。
家から少し離れたところに来ると
「それにしても、お前、色気のない服だよな。」
私を見てそう言い放つ。
「色気のある洋服着て欲しかったんだ」
嫌味と分かったので切り返してみた。
すると陸君は笑いを堪えて
「いや、こっちの方が好都合だよ。」
と。
だったら、言うなよ！と声に出さずに叫んでみた。

その後も、もくもくと歩き続け駅に到着。
陸君は迷いもなく、切符を2枚買って私に一枚よこした。
そこは、3つ先の駅だった。

電車に乗って見て、ちょっと驚いた。
ちらほらと、陸君を見る女の人達だ。

千恵の言ったとおりなのかもな。
人の趣味は分からないものだよ。

目的地の駅に着いても、迷う事なく足を進める陸君だった。
バス停に並び、バスに乗って――
着いた場所は、広い公園だった。

「ここ？」
私の問いに

「ああ」
やっと答えた陸君。

広い芝生の端っこに座り、突然寝転んだ。
私に隣に寝転ぶようにと命令が下った。
私は逆らわずに、そっと隣に寝転んだ。

今まで無口だった陸君が話し出した。

「俺、こうやってこの芝生の上で昼寝がしたかったんだよ。」

そう言った陸君に

「じゃあ、私じゃなくて兄貴誘えばよかったじゃねえか。」
我ながら鋭いツッコミだ。
だけど敵もさることながら

「お前は近くにいすぎて分からないかも知れないけれど、お前の兄貴結構いい男でさ、2人でこんなところで寝転んでたら間違いなく話しかけられるから、昼寝休憩にならないだろ。」

悪戯っ子のような笑顔を見せた。

そんなことあるかよ！と思いつつ抜けるような青空を見つめ、私はある事を考え始めた。
それはこの公園に入る時に目にした看板だった。
この公園の向こう側にある霊園の看板。
そこにあゆちゃんが眠っているのではないだろうか……
きっと私をここに連れてきた理由なんだろうな。

はて、どうしたものか。
そんな事を思いながら、ぽっかりと浮かぶ雲を見つめる。

考えても仕方ないよな。
丸い大きな雲が風に流され目の端に消えかけた時、一つ大きな深呼吸をした。

陸君の方は見ず、真直ぐ空を見据えて

「散歩行こうぜ。」

陸君を誘った。

「昼寝中」

間髪いれずの返事。
寝てねえじゃん。

私はスクッと立ち上がり、嫌だと渋る陸君の腕を引き上げた。

「馬鹿力だな、梓は。」

そう言いながら立ち上がる陸君。
私は迷う事なく霊園へと続く小道を進んでいった。
陸君は黙ってついてきた。
さっきと逆のパターンだな。

霊園の入り口でやっと口を開いた。
「昼から肝試しするのか。」
この期に及んでしらを切るつもりなのか？
私はそんな陸君を無視して
「何処にいるの？」
と問いかけた。

一瞬はっとした顔になったが、小さく笑って
「知っていたのか。」
と私を見つめた。
まるで私の心を覗いているかのように。

私は頷いた。
すると後ろを歩いていた陸君が私の横をすり抜けて、ずんずん霊園の中を歩いていく。

少し小高いその場所にあゆちゃんは眠っていた。
公園を一望できる場所だった。

私は墓石の前に膝をついて話かけた。
「久しぶりだね。ごめんね、ずっとこれなくて。」
目を瞑って、あゆちゃんの姿を思い出す。
元気に走り回る姿、木登りする姿。

思い出すあゆちゃんの姿は、本当に元気いっぱいだ。
きっとここから公園を走りまわる子供達を見ているのだろうな。

心の中で、あゆちゃんに沢山語りかけた。
私の後ろでは、動かずにじっとたたずむ陸君。

私は一旦立ち上がり、その場所を陸君に譲った。
陸君も私と同じ様に膝をついて、まるであゆちゃんにするように墓石を撫でている。
何かを語りかけているだろう、その後ろ姿は、寂しそうだった。
一通り話し終えたのか、満足そうに立ち上がり振り返った陸君は

「ありがとうな。」

私にお礼を言ってくれた。

ありがとうなんて……もっと早くに言ってくれたらよかったのに。
何故だか陸君にお礼を言われたせいなのか、背中がムズ痒かった。

久しぶりの感覚

翌朝、いつものように部活へ出る為に、玄関を出た。
ちょっと寝坊してしまったから、走っていくか、なんて思っていたら

「おっす」
と大和が門から出てきた。

「珍しいな、野球部ってうちらよりも集合早いだろ？」
そういいながら、足は小走りになる。

「ちょっと遅刻かも。急ぐぞ。」
大和の声を合図に2人で走り始めた。

無言で走る2人の隣を颯爽と自転車が追い抜かした。
自転車だったら、こんな朝っぱらから走らなくてもいいのに。
なんて思っていたら、前方の電信柱の影によく見る後ろ姿を発見した。

「お前も、遅刻かよ。何やってるんだ、こんなところで？」
私の問いに

「ちょっとな」
大和と目が合い、唇の端を少しあげる健太。

「お前、部長だろ？鍵いいのかよ。」

「そういう、お前だって。」

だから、私はこのペースで走れば余裕だっつうの。
康太の姿が見えないから、大方こいつも寝坊ってか？
人のことは言えないけれど。

「そういや、昨日のデートはどうだったんだ？」
大和がにやりと笑った。

「ああ、デートね。」
否定もせずに私は答えた。

「ああ、ってお前、何処行ったんだよ。」
3人で並んで走りながら大和は聞いてくる。

「んー。半分は寝てたからなぁ」
こいつらに走りながら説明するのも面倒くさいし、適当にそう答えた。

「「寝てた？！」」

お前らいいコンビだな。
絶妙なハモリだよ。

「あぁ、結構気持ち良かったぞ。」
そう天気は良かったし、外で大の字で寝れるだなんて、この年じゃそうそうしないからな。
昨日の事を思い出して一人笑った。

「あいつとか？」

大和の奴やけにしつこい。

「そうだよ。なんて言ったってデートだからな。それに、気になってたこともすっきりしたし、うん、行って良かったよ。」
今更ながらに自分に納得だ。

「何だか、嬉そうだな。そんなにいいとこだったんだ。」
妙に覚めた声の健太。

「あぁ、結構いいとこだったぞ。キャッチボールもしている奴いたし、子供が多かったからボールが当たらないか、冷や冷やもんだったけどな。」
実際、足に当たったりしたのだけれどな。

「お前、それって公園か？」
妙にすっとぼけた大和の声。

「ああ、言わなかったっけか？公園で大の字で寝るのは気持ちよかったぞ。今度行くか？」
ちょっとだけ息を弾ませまがら、隣にいる2人にニカっと笑ってみせた。

おっ、前方に相方発見！
今日は練習試合があるって言ってたっけ。
千恵が山田と一緒に歩いていた。

手を繋いでいるわけではないが、ぴったりと寄り添って歩く後ろ姿は仲が良いことが滲み出ているようだ。
時より見せる嬉しそうな千恵の横顔、背の高い山田が千恵に向ける優しい顔。

あんなにすれ違っていた2人なのに、あの頃の2人は今さっぱり見る影もなしだな。
実際ケンカしていたって、あの頃のようなぎこちなさは垣間見ることはないのだから。

いつか自分も。
健太の後姿をみながら康太の姿を思い描く。
あんな風に並んで歩くときはくるのだろうか？
そう考えたら段々顔が火照ってきた。
いかんいかん、頭を勢い良く振って中身を吹き飛ばす。

「おはよ。」
千恵と山田の間に割って入った。

「おはよう梓。」
「おっす」

「今日試合だって？頑張れよ応援は行ってやれないけど。」
山田の肩を叩いた。

「痛ってぇよ。大事な肩が壊れたらどうしてくれるんだ。」
大袈裟に痛がる山田を無視して千恵に囁いた。

「途中、腹痛で抜けてもいいからな。」

千恵は
「んー。ちょっと魅力的だ。でもいつでも見れるし大丈夫だよ。きっと休憩時間に見に行くかもしれないけれどね。」
そう言って私を通りすごし山田に微笑む千恵。
やってられないって。

先行くぞと一声かけて部室へと走りだした。
やっぱり野球部はもうグランドに集合していた。
輪の中心に康太がいる。
今日も格好いい。目の保養をしてポケットから鍵を取り出した。
時間5分前、後輩達は既に部室の前で待っていて
「おはようございます」
と大量の挨拶を受け
「おはよう」
と挨拶をしてドアを開けた。
楽しい部活の始まりだった。

一通り体を動かしてアップした後で花井先生に呼ばれた。
「そろそろ投げてみるか？」

そろそろ投げてみるか！待ってました、その言葉を。
いつも以上に力を込めて
「はい」
と返事をした。

「千恵ーお許しが出た！」
浮かれ気分で千恵を呼んだら。

「走って、いつもの柔軟してからだ。」
と一括された。
いつもだったら、少し嫌々なところだが、ご褒美がまっているようでそれさえも嬉しくなってくるのは不思議だ。

「いってきます」
と私はグランドから駆け出した。

身体も軽く感じる。
初めの頃の筋肉痛も最近では出なくなりこのメニューをこなしているのが自分でもはっきり分かる。
大和には散々隠れて投げてもバレはしないってとからかわれていたけれど、根が真面目な！？私は先生の言う事を聞いて、キャッチボールに留まりピッチングの練習は全くしていなかった。何日ぶりだろう？投げることを考えるだけでもワクワクしてくる。
ランニングするスピードもいつもの1，5割り増しだ。
その後の筋トレも柔軟も次々にこなし終える。

「先生終わりました。」
いつもの3倍大きな声で先生に声を掛ける。

「分かったから、こんなに近くにいるのにそんな大きな声をださんでも年寄りじゃないんだから。」
そう言って花井先生は知恵に目配せをした。
千恵はアイコンタクトを素早く察知し私の元へとかけてくる。

「お待たせ。」
千恵の言葉に大きく頷く。

いつものサブマウンドに足を踏み入れた。
ここに立つのは久し振りだ。
軽く肩を回しボールを握り締めた。
千恵の構えるミットを見据え私は一球を放った。

何だろうこの体の軽さは。
あの時のイメトレの時より遥かに体が軽く感じられ、何より腕の振りぬける感覚が全く違うのだった。

余分な力も一切入らず、なのに球の勢いは格段に速い。
手首から球が離れる瞬間球が生きているようなそんな感じがした。
自分の体の変化ばかり考えていて、肝心の球筋を見ていなかったのだけれど。

ボールを受ける千恵と花井先生の顔、それに練習中の仲間の声を聞くとそれはばっちり手ごたえを感じるもので。

千恵から戻ってくるボールを胸の辺りでしっかりキャッチした。
今の感覚を忘れないよう。
一つ大きく息を吸い、もう一度千恵の構えるミットを見据えた。
今度は少し落ちつたようで、大きく弧を描く私の腕に集中。
指の先まで神経をくまなく感じ、ボールを放つ。

間近で離れるボールを見て回転も違っている事に気がついた。
グーンと伸びる球は勢い良くミットに吸い込まれる。
構えたところに寸分たがわずボールが収まった。

「よっしゃ」
思わずガッツポーズをしてしまった。

後はお前次第だから。

花井先生の言葉が胸に響いた。

宿題

「あーくそっ」
まだ山となっている机の上。
明後日からは2学期だというのに一向に宿題は減る事がなく、って始めたのが昨日からなのだから当たり前っていえば当たり前なのだけれど。
毎年毎年、同じようなこの3日間を送っているのだ。
今年はこんなはずじゃなかったんだけどな。

あてにしていた兄貴は部活三昧で今日も最後の合宿とやらで帰ってこない。
まさに聞いてないよの世界だ。

誰だよ数学なんて考えた奴は。
そこまで話しが飛躍してしまう頭の中。
でも、こんな私でも驚く無かれ、なんと英語の宿題だけは終わったのだ。
折角覚えた感覚を忘れないようにと陸君に言われたので夏休み前半には終わっていたのだ。その達成感からか、すっかりいつものペースになってしまったのだった。

後は、少々気が引けるが大和に見せてもらうか？
いつぞや作った長い新聞紙をクローゼットの中から引っ張り出す。

ちょっと優し目にコンコンとつついてみた。
直ぐにがらっと戸が開いた。

「どうした？こんな時間に。」

大和は眠たそうな顔をしてこちらを覗き込む。
時計はもう直ぐ午前様といったところ。
「悪い、宿題見せてくんねえか？」
ここは低調にお願いしてみる。
そんな私に大和は

「悪い、近藤に渡しちゃったよ。だってお前随分と前に英語終わって、今年は全部楽勝だなんていってなかったか？」
確かに。大和のおっしゃるとおりです。
近藤かよ。あいつはどっこいだからな。

「そっか、悪かったな、じゃあいいや。おやすみ。」
一方的にそう言って窓を閉めた。
やっぱ他力本願ってわけにはいかないかぁ。
ふーっとため息をついて机に向かった。

せ、背中が痛い。
どうやらあの後、机で寝てしまったようで体中が固まっているようだ。
水一杯飲んできますか。
大きな伸びをして、階段を降りた。
キッチンには既に母さんがいて、顔をみるなり笑い出した。
「梓、鏡見てきなさいよ。」
と必死に笑いを堪えているようだった。

なんだよ。そう思いながらも鏡を見ると。

そこには見事にノートに書いてあった二次関数のグラフが……
それも、自分の筆圧ばっちり太い線で。

洗顔フォームを必要以上に手にとって顔を洗った。
これで外に行かなくて良かったよと思った。
それよりどうする。
宿題提出まであと1日になってしまった。

部活の時間は減らせないし……
こうなりゃ大和本人連れてくるしかないか。
鏡の中に写る自分にそう呟いた。

夏休みの最終日、いつも通りに部活を終えた帰り道。

「梓っ。ますます調子上がってきたじゃない。県大どころか全国にも行けそうな気がするよ。」
千恵の声は弾んでいる。

だけど、私はこれからあの宿題が待っているわけでして。
「狙ってるっていうより、撃たれる気が全くしないんだよね。」
言葉とは裏腹に張りのないこえなのは自分でも分かった。

「何、悩み事？」
心配そうに顔を覗き込んできた千恵。
千恵に宿題の事言ったら怒られそうだよ。
夏休みに入った時から、宿題やっときなさいよって口を酸っぱくして言ってたからなぁ。

そもそも、自分はきちんと宿題を提出する奴なんかじゃないのだが、今年は今までとは違わなくてはいけない理由だあったのだ。

ここ何年かで一番出来の悪い私に、先生は評価をつけられないって

言い出したのだ。
高校受験は来年だったが、それを見越しての評価らしい。
高校なんて何処でも行ければいいやと思う反面、譲れないのは部活だ。
通える範囲でソフト部がある高校は数えるほどしかない。
そこは、スポーツ推薦を取ってくれる私立と違い普通の公立高校だから尚更の事。
各教科の先生に宿題は必須だからなと念を押されていたのだった。
一緒にいた千恵はそれを良く分かっている。
自分を心配してくれていた事も。

そんな千恵に今更、出来てませんなんて言えねえよ。

だけど、千恵にはお見通しだったりするんだよな。
じろっとその横目が顔に突き刺さるんですけれど。

千恵の顔を直視できずに前を向いて歩き続けた。
あっという間に千恵の家の前。

「じゃあ、明日な。」
いつものように手を上げて帰ろうとすると

「ちょっと待ってなさいよ。」
そう言って千恵は家の中に入っていった。
そして、手には大きな紙袋。

「はい、明日忘れたら承知しないんだからね。」
そう言って手渡されたのは数々のノートだった。

千恵……

感無量とはこのことなのだろうか。
「悪い、明日必ず持ってくるから。」
そう言って紙袋を持って駆け出した。

全くもう

という千恵の声を耳にしながら。

そして、夜遅くまでノートとの格闘を続けたのだった。

始業式

「宿題終わってよかったじゃん。」
そういうのはいわずと知れた私の親友。
今日は始業式だったりする。
結局私は、千恵からノートを借りて写しまくるも終わらず、朝早くに教室でカリカリと写すはめになってしまった。
最後のページを終えたのはチャイムが鳴る3分前という神業だ。

「そうね、この報酬はイチゴブリック3個ってところかしらね。」
といつもの私のセリフをニコッと笑いながら言い放った。
勿論、私は反抗する事も出来なくて

「了解。」
と返事をした。
すると千恵は

「冗談だって。でも来年はかさないからね。梓の為なんだよ。一緒にソフトするんでしょ。」
と笑った。

今年の夏休み千恵の家は大変だったらしい。親族会議も開いたっていってたな。
結局千恵のおばあさんは、退院した後、暫く千恵の家にいることで落着いたらしい。
そんな中いつこの宿題を終えたのだろう？

久し振りのホームルームの後、ぞろぞろ揃って体育館へ。
毎回毎回よくもまあ話すことがあるなあと感心するくらい気の長い

校長の挨拶を聞かされた。
朝っぱらだというのに眠気が襲ってくるのはどういうことなのだろう。
しんどい。

校長の話しにもあったけれど、2学期は行事が多いんだ。
今月の末は体育祭があって来月半ばは文化祭、2年の自分達は修学旅行なんてのもある。そのまた先も何かあるけど、其処までは覚えなくてもいいだろうって、頭が判断したみたいだ記憶に残らなかった。
そんな行事に挟まれて今月はソフトボールの新人戦がある。
修学旅行も気になるけれど、これが一番気になっているんだ。
この調子のままいけば県大会だって、全国だって夢じゃないって本気で思っているからな。
後、2週間だ。
宿題からの開放感は素晴らしく、早く放課後になって欲しくて堪らない自分がいた。

2時間目の休み時間私は千恵と渡り廊下にいた。
そういえば、組み合わせっていつだっけ。
そんな会話をしていた。

「よう、宿題終わったってか？」
大和に聞いたのだろう、康太がにやりと聞いてきた。

「ああ、お蔭様で」
さっきまで滑らかに動いていた口は急にブレーキを掛けてしまったらしい。
隣で千恵が笑いをたえているのが分かった。

「しかし、梓って。お陰様って康太は何もしてねえだろうが。」
後ろから聞えた大和の声、振り向きもせずに肘を後ろに突き出した。
ボスと言う音に肘の感触。
よっしゃヒット！そう思って振り向くとピンピンした大和にうずくまった健太がいた。

「悪り、間違えた。」
そう言って健太の背中に手を当てて隣に屈んだ。

「大丈夫か？」
覗き込んだ健太の顔は赤くて何も言わない。
上手い具合にわき腹に入ってしまったようだった。

「梓、俺の時と感じ違いすぎ。」
と大和は声を上げた。

「煩い、お前はいつも自業自得だろ。健太の場合はあれだ、なんて言ったっけそのそれだ。」
そう言ったら健太が立ち上がった。
そして頭をコツンと小突いて
「大和ってすげえのな。これに堪えてるなんて尊敬するかも。」
って言ったんだ。
その顔が、妙に頭に残ってしまった、近くに康太がいるにも関わらず。
それは康太じゃなくて、似ているけれどやっぱり健太で。
ん？似てるからなのか？

見事な復活を遂げた健太はチャイムと同時にクラスへと引き上げていった。

始業式は午前中でおしまいだから後1時間だ。
職員会議があるので今日の部活はどの部も休みだった。
と言う事は、千恵は山田と帰るのか。

何だかんだといって、千恵は楽しそうだ。
長年の片思いからの脱出だもんな。
それは山田も同じことで。

たまにはバッティングセンターでも行ってみるかな。
そう考えただけで、頭の中はバッティングセンターに先に行ってしまったみたいだった。

3時間めはホームルームで2学期の係りを決めたりそんな感じ。
みんな、まだ夏休みの雰囲気を纏ったままいるようで、教室もいつもとは違って浮ついているようだった。

「梓は何の係りにするの？」
千恵から手紙が回ってきた。

その紙の裏に
「どれでも一緒じゃん。」
と書いて返した。

結局私は保健係りになったようだ。
まあこんなとこだよな。

そういえば最近保健の福田先生みないな。
４０歳過ぎくらいの気のいいおばちゃんみたいな先生。
若かりし頃は私もやっていたのよ。
とたまにグランドに来ては、バット振り回していたのに。

ちょっと太目の体格から繰り出す豪快なスウィングは天晴れだった。
当たる時は野球部のダイヤモンドまで飛んでいく勢いなのだか、いかんせん練習不足で、物凄い轟音の空振りばかりなのだけど。

あー今日はやっぱりバッティングセンターだな。
大和を誘ってもいいけど、あいつ煩いからな。
ここは一人で行くとしますか。

上の空も手伝ってか放課後がくるのが早かった。
千恵に
「またな」
と挨拶するや否やカバンを担いで家路を急いだ。

妖怪みたいな

今日は母さんも出掛けていて昼は一人だ。
適当にパンでもっていうお腹はしていなくて、お釜の中のご飯を茶碗に山盛りにしてふりかけをたっぷりかけて、喉にかきこんだ。
冷蔵庫にあった牛乳をパックのままゴクリと飲んで、いつものＴシャツとジャージを履いて準備完了だ。

バッティングセンターまでは自転車に乗って２０分程、ウォーミングアップに丁度よかった。

重たいガラスのドアを開くと

ギィーっと何処かが引っかかるような音がする。
ちゃんと手入れすればいいのに、そう思っているのはここ何年か？
一歩足を踏み入れたそこに響く快音。
この音がいいんだよな。
独り言を言っているのに気がついた。

「最近、ご無沙汰だったな、サボってちゃ全国いけねえぞ。」
カウンターに座ったおっちゃんが言う。

ほんと、妖怪みたいなおっちゃんだ。
兄貴が少年野球をしていた時から来ているからもうどれくらいになるだろう。
だけどおっちゃんはちっとも年を重ねているようには見えなかった。
まあ、前から老けていたって言う事なのかもしれないけどな。

「宜しく」

そう言って千円札を渡した。

おっちゃんはコインを何枚買うのか、なんて聞かない。
いつだって私はあるだけの金でバッティングをしに来ているのだから。

そのコインは1枚２００円。
その1枚でバッティングマシーンが動くわけなんだが、千円分買うと1枚余分にくれるってサービスだ。

軽く屈伸をしてからバットを取り出す。
勿論、背中に背負ってきたマイバット。
クリスマスは何もいらないから、誕生日と一緒のプレゼントでいいからと両親に懇願した某有名メーカーのバット。
随分大和に羨ましがられたっけ。
打席を見渡すと、大学生みたいな奴もいれば、仕事しなくていいのかよって思うスーツ姿の男の人がいた。
３分の1位埋まった打席は結構繁盛しているって事なんだろうな。

上手い具合に空いたど真ん中の打席に入った。
取りあえず野球のボールからだな。
1番端にあるソフトの打席はさっきから、ママさんソフトをしているのだろう福田先生のような女の人が占領していた。

球速は１２０キロ、この位が私の打ち頃だ。
バットを足に挟みポケットから取り出したグローブを嵌める。
手にしっくりくるこのグローブは兄貴からの去年のクリスマスプレゼントだ。
このグローブを嵌めマイバットになってからは空振りしたことなんて記憶になかった。

コインを入れてグリップをギュッと握って。
真直ぐ正面を見据える。
途端に周りの音が聞えなくなる。
集中している証拠だ。
マシンのランプが点滅を始めた。

マシンならではの癖のないストレート。
左足を踏み込んでバットを振った。
打ち抜く瞬間はとても軽く、タイミングもばっちりと決まった。
ボールは一直線に向こうの壁に。

幸先の良いスタートだ。
その後もわき目も振らず只一心にバットを振った。
殆どの球を真芯で捕らえられた。
うん、満足。

野球のボックスを出ると、いつの間にやら妖怪おっさんが。

「サボっているわけではなさそうだな。」
とニヤリと笑った。

「サボるわけないだろ。」
とちょっとムキになって答えてしまった。

やっと、オバサンがソフトのボックスから出てきた。
額に汗をびっしりかいて。
タオルで拭ったその顔はすっごくいい顔していた。
オバサンの前を通る時ちょっと会釈をして、ボックスに入る。
先ほどと同じようにコインを入れた。

この店で最速の８０キロのボタンを押して、バットを握った。
野球の球を見ていたから丁度いい感じでスピードにも慣れて、面白いようにバットに球が当たる。
新人戦が楽しみでならなかった。
何球目か打った後で、後ろから声がかかった。

ナイスバッティング

さっきのオバちゃんだ。
太目の体から出される声は良く響いて、私の耳にも届いた。
それは結構珍しい事で、ここに入っているときは周りの声なんて聞えないっていうのに。
一瞬振り返ろうかと思ったけれど、集中集中とマシンに向き直った。

最後の球を打ち終わってボックスを出ると、オバちゃんが拍手で迎えてくれた。
「凄いのね、何よりフォームがとても奇麗で見とれちゃったわ。」
と。
オバちゃんの豪快なスウィングも見事ですよと言いそうになってしまった。
それは胸の内に置いといて。
「ありがとうございます」
と体育会系らしい大きな声でお礼を言った。
2，3言葉を交わすともう一度打つかと思ったのに、オバちゃんは去っていった。

自動販売機でスポーツ飲料を買って喉を潤すと、残りのコインを消化するためもう一度ボックスに。

後ろに客もいなかったので、今度はボックスを出ずにコインがなく

なるまで打ち続けた。
今日は調子が良かったらしく大満足で店を後にした。
鼻歌をしながら、自宅の前まで来ると大和が素振りをしているところだった。
私と目が合うなりでかい声で
「お前、俺も連れてけよ。」
と。背負ったバットでわかったらしい。
「悪りぃな」
と手を上げて自転車を降りた。
本当は全然悪いと思ってないけれどな。
ちょっと頑張りすぎたらしく少し腕がだるかった。
後ろで大和が何か言っていたが、適当に返事をして家に入ってしまった。

9月になったとはいえ、まだ日差しは相当なもの。
びっしょりかいた汗を流すためにシャワーを浴びた。
さっぱりした後、牛乳を飲んで、ソファーに座って、もう大分前から消えない、てのひらの堅いマメを触った。
このマメの一つ一つが、自己満足だと言われそうだけど、自分の努力の証のような気がしていて結構好きだったりする。
ふとクラスの白い柔らかそうな手をした子を思い出す。
あいつもそんな手の子が好きなのだろうか？
もう一度マメを触って、余計な事を考えるの止めようと頭を振った。

なんてことだ！

「痛っ」
ん？何だかおかしいぞ。
それは夕飯のおかず、かれいの煮付けを食べていた時の事だった。

「何、梓ってば骨まで食べちゃったの？」
母さんが呆れたような声を出した。

「違うと思う。喉じゃないから。」
不思議と今は痛くない。

「じゃあ、舌噛んじゃったとか？いくら腹へってても自分の舌は食えないぞ。」
今度は兄貴が笑い出した。

「だから、そんなんじゃねえって。」
息を撒いてそう言ってご飯を口にかきこんだ。

痛い！

やっぱ痛いぞ。気のせいじゃない。
それは梅干を食べた時に酸っぱくなるあの場所に近いような……。
箸を置き手でその場所をさすってみた。
違和感はそんなにないんだけれど。
そんな私を見ていた母さんが

「もしかして、あんた。」
何だよ、そこで切るなって

「あんたって何だよ。」
痺れを切らして聞いてみた。
まずこれを飲みなさい。
そう言って渡されたお味噌汁。
言われたままに飲んでみた。
うっ
何だこりゃ。
「うん、十中八九これは”おたふく”ね」
母さんの言葉は衝撃だった。
おたふくってあのおたふくかよ。
マジで、勘弁して欲しい。
だって明後日は、明後日は
新人戦だっていうのにー
取りあえず、食べれるだけ食べてもう寝ちゃいなさい。
嫌でも明日にははっきりするだろうから。
死刑宣告のような言葉だった。
兄貴はポツリと
「夜痛くなったら呼べよ。何時でもいいからよ。」
あんまり聞いた事が無いくらい優しい声だった。
そういえば兄貴はやったんだっけ。
どういうわけだか、自分には移らなかったけれど……。

結局ご飯にはそれ以上手をつけられず、寝る事にした。
間違いだって願いながら……

だけれども、私の願いは虚しくものの何時間かで判定は出た。
なんにもしなくて、痛みが襲ってきたのだ。
兄貴の部屋の壁をノックすると夜中だっていうのに兄貴が起きてきてくれて、氷の詰まった水枕を持ってきてくれた。
これを痛いところに当ててると違うからな。
これから、熱も上がるだろうから、頑張るんだぞ。
後は、子機で俺の携帯に掛けろな。
いつもはどんなに頼んだって私の部屋においてくれない電話の子機を枕元に置いてくれた。

「サンキュウ、兄貴。」
そう言うのが誠意一杯で私は水枕にダイブした。

もどかしさ

だぁーーー

何だってこんな時に寝てなくちゃいけないんだよ。
ちくちょ～。
試合で負けても涙流した事なんてないっていうのに。

悔しくって悔しくって。
ベットに顔を押しつけて、大声で泣きわめいた。
調子良かっただよ、負ける気しなかったんだよ。
それなのになんだってこんな時に『おたふく』なんてなっちまうんだ。

もうすぐ、試合が始まる時間。
あいつらが頑張ってくれたら、きっと次の……その次の試合には出れるから。

コンコンと控えめにノックされたドアから母さんが顔を覗かせて

「何か食べれそう？」
と。

顔なんてあげれなくて、ベットに顔を押し付けたまま

「いらない」
とそれだけ、言ってみた。きっと今顔をあげたら目が真っ赤だろうから。
母さんと言えどこの顔を見せるのはちょっと恥ずかいと思ったんだ。

まぶたが重たくて仕方ない。

「これ、ここに置いておくから酸っぱくないから大丈夫だと思うよ」
コトリと物を置く音の後に静かにドアが閉められた。
ゆっくりとベットから身体をはがすとそこには、スポーツ飲料メーカーの栄養ドリンクのゼリーが置いてあった。
昨日よりはずっとましになったもののまだ、唾を飲み込むと下あごと上あごの付け根がキーンとして。腹が減っているのに食べられない辛さを始めって知った。
だけど、そんな事より試合に出られない方の辛さは何倍もあるわけで……

何だってまぁこんな事に。何度言ったわからない呟き。横目でゼリーをちらっと睨むけれど、起き上がる気力も無くて、私は再びベットにダイブしたのだった。

母さんの登場で涙は引っ込んだものの、悔しい気持ちが収まる事はない。
自分が悪いって分かっているけれど、どうしようもないのだ。
何処にもぶつけられない思いをどうしたらいいのだろう。
いつもだったらこんな時、思いっきりバットを振り回すのに今はそれさえもできないときたもんだ。身体もまなっちまうよ、なっ。

目を瞑って深く深呼吸すると、時計の秒針が耳につく。
窓の外は、試合にもってこいのスカッとした青空。
ほんと、何でこんな日に寝てなくちゃならないんだか……

まだ一回の裏くらいか？　かんな打ったかなぁ。他のやつらは？

そう思ったら、いてもたってもいられなくって。

今度こそベットから立ち上がって、階段を駆け降りた。
母さん驚いた顔をしてこっちをみているけれど、一直線に洗面台に向かって顔を見た。
これくらいなら、解らないんじゃないか？
首を右に左に捻って顎のラインを確認する。
いけるかも――。
そう思った瞬間、バシッという音と共に後頭部に衝撃が……

「いけるわけないでしょ、全くもう」
仁王立ちした母さんだった。

「だって」
食い下がってみたけれど

「だってもくそもない、おたふくは外出禁止だっていうの。解らない子ね」
そういって首根っこを掴まれて階段下に強制的に連れられてきてしまった。

「やっぱり駄目？」
自分にしてはしおらしく言ってはみたけれど、目の前には無言で私を睨む母さん。
ガクッと肩を落とし、ゆっくりと足をあげ階段を踏みしめた。
遠くから見てるだけでも駄目なのか？
往生際悪く、そう心で呟くと

「行くまでに人にうつす可能性だってあるでしょ、早く治りたいのだったら大人しくしていなさい」
エスパーかと思った。

ほんと、しぶしぶと足を運びまた自分の部屋に戻ってきてしまった。
やる事ねぇっていうの。

さっき置かれた、ゼリーをきゅっと口の中に捻りいれた。
こんなんじゃちっともお腹いっぱいにならないっていうの。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2518e/

背高のっぽの恋

2010年10月10日07時01分発行